

仏蘭西学研究

2019. 6. 22

第 45 号

目 次

[論 文]

フランス海軍関係資料にみるアルクメヌス号の琉球来航
..... 宮里 厚子… 3

青淵漁夫・靄山樵者著『航西日記』の基礎的研究
..... 関根 仁…13

徳川昭武と多勃都会
一日仏交流を支えたもうひとつの人脈—(前編)
..... 小寺 瑛広…36

[研究ノート]

詩人教授の系譜 —少しばかり個人的に—
..... 木村 哲也…56

[鼎 談]

人文学諸学の草分けレオン・ド・ロニーの再評価
—ベネディクト・ファブル=ミユラーとフィリップ・ロス
シュタインとの鼎談—
..... クリス・ベルアド…67

学会記録..... 103

日 本 仏 学 史 学 会

仏蘭西学研究

2019. 6. 22

第 45 号

目 次

[論 文]

フランス海軍関係資料にみるアルクメーヌ号の琉球来航
..... 宮里 厚子... 3

青淵漁夫・霧山樵者著『航西日記』の基礎的研究
..... 関根 仁...13

徳川昭武と多勃都会
一日仏交流を支えたもうひとつの人脈—(前編)
..... 小寺 瑛広...36

[研究ノート]

詩人教授の系譜 —少しばかり個人的に—
..... 木村 哲也...56

[鼎 談]

人文学諸学の草分けレオン・ド・ロニーの再評価
—ベネディクト・ファブル＝ミュラーとフィリップ・ロス
シュタインとの鼎談—
..... クリス・ベルアド...67

学会記録..... 103

日 本 仏 学 史 学 会

フランス海軍関係資料にみるアルクメヌ号の琉球来航

宮 里 厚 子

はじめに

アルクメヌ号 (L'*Alcmène*) の来航は、19世紀、鎖国下の日本との接触の足掛かりにしようと琉球王国に来航した多くの西洋列強の船の来航のなかでも、重要な出来事の一つである。フォルニエ＝デュブラン (Bénigne-Eugène Fornier-Duplan) 艦長率いるアルクメヌ号は、フランス・インドシナ艦隊所属のコルヴェット艦で、琉球での滞在は1844年4月28日から5月6日までの9日間と比較的短いが、フォルカード神父 (Théodore Augustin Forcade) を琉球に連れてきた船であることからその名前が言及されることは多い。その9日間の滞在の様子はフォルカード神父の『フォルカード神父の琉球滞在日記』⁽¹⁾に詳細な描写があるため、すでに多くの人の知るところであろう。この航海に関しては、海軍関係者も報告書や日記のなかで詳細に記録しており、多くの部分でその内容はフォルカード神父の記録とほぼ同じになっているが、注目に値する部分も少なからず存在する。

本稿は、まずフォルニエ＝デュブラン艦長と同乗していた医者ジャン＝ルネ・ボロレ (Jean-René Bolloré)、士官候補生グリヴェル (Louis Antoine Richild Grivel) の記録から、フォルカード神父の日記を補完する部分を抜き出し、アルクメヌ号の9日間の琉球王国滞在の様子をより鮮明に浮かび上がらせることを目的とする。また、後半では、フォルニエ＝デュブラン艦長の個人的なメモやこの任務を命じたセシユ提督 (Jean-Baptiste Médée Cécille) の手紙から、フォルカード神父と中国人伝道士オーギュスタン高⁽²⁾を琉球に残置したことに関する両者の見解の相違等を紹介したい。

1. 琉球の人々

(1) 役人について

はじめに、フランス側にとって初の公式な訪問となるアルクメヌ号の琉球王国来航に際して、琉球の人々との間にどのようなやり取りがあったのかをみていきたい。先述したように、フォルカードの日記には詳細な描写があるが、海軍の士官・乗船員が別行動をとった日もあり、補完する部分を抜き出してみたい。まず琉球の住民の中でも役人に関しては、この時期のどの西洋人の記録を見ても、一般住民が外国人と接触しないよう双方を制止する様子が多く描かれている。その中から、役人が文字通り体を張ってフランス人士官たちが町に行くことを妨げようとする場面を紹介する。

4月30日、フォルカードは船上に残ったが、船員たちが下船して狩りや町の散策を試みた様子をデュブランが記している。

翌日、何人かの部下は狩りに出かけたが、彼らは獲物を一匹も捕えられなかった。[…] 部下たちの後をつけていた小役人たちは終始彼らを引き返させようとしていた。それはまさに強迫観念のようで、しまいには役人のうちの一人が横になって道をふさぐほどだった。私の部下たちは彼の体を難なくひとまたぎした。部下たちが易々と通ったのがわかると、役人たちは大笑いした。⁽³⁾

琉球側の必死の制止もむなしく、その上をフランス人が易々とまたいでいく場面はその後の両者の交渉を暗示しているようにも見える。ただ、下級官吏たちがこのような状況をまだ大笑いできる余裕があったのに対し、王府の上層部は最初の会談の場で「通訳」2名を琉球に滞在させたいという申し出を受けており、より緊張感が感じられる。

多くの場面で交渉にあたった琉球王府の通事、板良敷朝忠について、フォルカードはその日記の中で「どんな質問にも一人で答えてしまう人物」⁽⁴⁾だとし、「宮廷通信」というあだ名をつけているが、デュブラン艦長は次のように描写している。

ひとつ私達が気付いたのは、他の人物達より外見は簡素な服を着て、

〔位階の下の方を示す〕赤冠を被っているあの若い通事が、下に絹の服を着ていることである。それに対して他の者達は、閣下〔と呼ばれている人物〕でさえ、木綿の下着しか着ていない。⁽⁵⁾

また、翌日の5月2日の報告でもデュプランは同様の事実に気づき、この時は通訳を務めていたオーギュスタン高が「島の有力者の一人であるにもかかわらず、変装して乗船し、一人の通事にすぎない振りをしていること」を指摘したが、板良敷は「この指摘に微笑み、何も言わなかった」⁽⁶⁾と続けている。ちなみに板良敷朝忠は実際、通事であったが、このフランス船の対応での役割を高く評価され、のちに島津斉彬に目をかけられることになる。

一方で、士官達が陸地の散策をするときは「年取った」通事が同行していたことが記されている。通事たちの名前は明記されていないが、「年取った」ほうは安仁屋政輔だと推測できる。彼は、1816年にバジル・ホール船長率いる英国艦ライラ号が琉球に来航した時に対応した人物であり、バジル・ホールの旅行記にも出てくるため、フランス人航海士たちの間でも知られていた。

士官候補生グリヴェルの報告書⁽⁷⁾によると4月30日にフォルカードとオーギュスタンが船に残っている間、士官たちが停泊している泊から小舟で川を渡って那覇の町に行こうとすると、300から400人の見物人のなかに「注意深く地元の文字で」メモを取っている老人に気づく。彼は、「発音から自分の知っている英語に相当するフランス語の単語をいくつか集めていた」ということである。そして、「片言の英語を話しながら」士官たちが那覇の町に行くのをやめるよう懇願した。彼らが制止を無視して町へ向かうと、今度は小舟で彼らを追いかけて来て「深い失望を大げさな身振りで表現」するが、結局士官たちが上陸すると、彼らの腕を取ってエスコートし始める。多くの見物人たちが集まっているなか、士官たちを塙で囲われた家に導くことで混乱を避けようとしたようである。そこでグリヴェルらは通事たちの「中国語半分、英語半分のおしゃべりをしばらく楽しんだ」。その後、彼らは町を見学する目的も果たし（ただし家々は役人の命令によって閉ざされていた）、港で小舟に戻る前には日本の帆船（「ジャンク船」）のなかも見学している。

ちなみに、グリヴェルの報告書では日本の帆船に関して、おもにその構造の特徴を記しているが、デュプラン艦長が5月4日に日本の船を見学した時には、特にその船長室の豪華さに感嘆した様子が描写されており、建具が立派

に作成され仕上げられているのに対して、アルクメーヌ号の木造の建具類は「斧を振りかざして作った」ようで、「日本人艦長がアルクメーヌ号に乗船していたら恥をかいていたであろう」⁽⁸⁾と書いている。

(2) 住民について

19世紀から20世紀初頭の西洋人の記録では、概ね、琉球の役人が西洋人との交渉の場面では二枚舌であり、また住民たちに対しては西洋人と接触しないよう厳しく監視する姿が描写されている一方、住民たちは従順で人懐っこい人々として描かれていることが多い。アルクメーヌ号の船員たちの印象もほぼ同様だったようである。デュプランの報告書には例えば以下のような記述が見られる。

私の二人の部下、プロスト氏とケランガル氏は、湾の両端に観測に行っていた。到着するやいなや、彼らは地元の住民が彼らが座するためのむしろや日傘を急いで持ってくるのを見た。日傘にいたっては漕ぎ手にまで配られた。その後、お茶やお菓子が振る舞われた。ケランガル氏のボートが北側で座礁すると、人々は躊躇せず水に飛び込み、ボートが浮かぶまで持ち上げた。⁽⁹⁾

フォルカードの日記にも書かれているように、2人の技師が艦船に戻る頃には小舟が食べ物でいっぱいになっていたとデュプランは続けている。この日のデュプランの報告には、住民たちが物の名前をフランス語で知りたがり、「教えてあげると、彼らは音を漢字で表し、かなり正しく発音した」というような住民との交流の場面も記されている。もちろん、これらの交流は、役人の目の届かないところでのみ可能であった。

その他、住民に関しては、医師のボロレが非常に良い印象を受けたようで、この上ない賛辞を送っている。

琉球の島民たちは、私にとっては初期の黄金時代を表徴している。私は彼らのうちに純朴な善良さ、この上ない歓待好きな振る舞い、控えめで慇懃な、常に注意深くて敬意を伴ったエネルギー的な親切さ、無欲な気前の良さ、寛容さ、外国人に対する多大な信頼、完璧な誠実さ、つ

まり信じがたいような多くの長所を見出した。⁽¹⁰⁾

また、5月6日の出航に際して、アルクメヌ号が1827年に英国艦船ブロッサム号も苦戦したサンゴ礁に進行を妨げられた時、地元の住民が助けに来た様子もボロレは感情をこめて報告している。この出来事については、デュプランやグリヴェルが船の操作の詳細な記述のなかに1～2行の簡単な報告で終わっているのに対し、ボロレはたくさんの男たちを乗せた4隻の大きな船が救助に来て、彼らに感謝したところ、翌日も手伝いに来る必要があるかどうか尋ねてきたとし、「何という人々！ 何という男たち！」⁽¹¹⁾と感激した様子で書いている。

2. 琉球の戦略的場所としての評価

次に、フォルニエ＝デュプラン艦長と士官候補生グリヴェルの報告書において、海軍関係者の立場から東アジアにおけるフランスの中継拠点候補地として琉球がどのように評価されたのか見てみたい。

まず、グリヴェルは出航前、先述したサンゴ礁「ブロッサム」のせいで実際に船が立ち往生する時点より前に書いた記述のなかで、那覇港には「ブロッサム」と陸地の間が狭い点など危険があるとしながらも、「この湾での停泊はかなり良いとみなすことができる」⁽¹²⁾としている。また、「吃水が12～13ピエの大型船も町まで川を上ることができ、そこで船はあらゆる出来事から守られるだろう」と続けていることから、那覇港に対して比較的良好な印象を持っていたとみなすことができる。

これに対してデュプランは、那覇港が軍が利用するのに適地ではないことを記している。彼は滞在中に降り続いた雨のため思うように調査ができなかったとしながらも、「この停泊地に関する私の意見はと言えば、ビーチ船長が言っているように、とても悪い。海はしばしばかなり荒れる」や、「那覇はいい避難港にさえならない」、「大型船から〔川の〕入口を守ることはとても簡単かもしれないが、丘に囲まれた町を地上からの攻撃から防衛することは容易ではない」⁽¹³⁾、などとかなり否定的な意見を並べている。デュプランからこのような報告を受けたセシーユが彼の意見をどの程度参考にしたのかは、別途調査が必要である。

3. 宣教師の琉球派遣という「秘密」について

フォルカード神父と中国人伝道士オーギュスタン高が宣教師であるという事実を隠して「通訳」として琉球入りしたことは周知の事柄であるが、東アジアに駐留するフランス海軍のなかでは当時この「秘密」に関して、いくらかの混乱があったことがフォルニエ＝デュブラン艦長の私的メモから知ることができる。トロワ市図書館にはデュブランのノートが保管されており、その中には琉球への任務に関するメモも存在する。一冊のノートにはセシーユから受け取った手紙の一部を書き写して番号や記号を付し、もう一冊のノートにはそれぞれの番号・記号に対応する箇所について私的なコメントが書かれている部分があり、上司であるセシーユに対する不満等が綴られている⁽¹⁴⁾。

この中で、セシーユが琉球における任務について書くことを禁止したにもかかわらずそれを守らなかった乗船員がいたことについてはすでに知っていたという内容を書いた手紙の一部を引用したうえで、デュブランは以下のように書いている。

[...]喜劇の秘密はマカオであった；バロンタン神父がシンガポールにいるサビヌ号の士官たちにこれを話し、さらに[...]琉球到着後はこれがアルクメヌ号の乗船者すべての秘密になった：その上、その後知ったことだが、士官候補生グリヴェルがルフェーブル領事にこれについて書いていたのだ。⁽¹⁵⁾

ルフェーブル (Charles Lefebvre de Bécourt) は、1844年当時広東領事を務めていた人物である。バロンタン神父 (André Nicolas Barentin) がどのような状況でサビヌ号の士官たちにフォルカードのことを話したのか、グリヴェルがどの時点で領事に知らせたのか、デュブランのメモからは不明であるが、セシーユが口外を禁止していたにもかかわらずアルクメヌ号の琉球派遣の直前・直後からこの件は東アジアのフランス海軍関係者、外交官、宣教師たちのなかで、すでに公然の「秘密」となっていたことがわかる。

さらに翌年には、先に触れたグリヴェルの報告書が *Revue de l'Orient* に公刊され、その冒頭でこの航海の目的が中国北部の港を調査することと那覇港にフォルカードを置いていくことであったと明言されている。琉球を一王国とみなし、公にはその国との友好と通商関係を築くために通訳を派遣する、

という任務であったにもかかわらず、宣教師を琉球に残していくという任務の「秘密」の部分が自分の知らないところでフランス人関係者の間で公然と広まっていったことは、当事者であるデュプランにとってはおもしろくないことであったであろう。

4. 宣教師の琉球残置に対するフォルニエ＝デュプランとセシーユの意見の相違

宣教師らを琉球に運ぶことに関してこのような想定外のことが起こったことに加え、デュプランにはこの任務に対する不満の種がほかにもあったことが、彼のメモからうかがい知ることができる。1844年7月10日に香港に停泊中のクレオパトラ号からセシーユ提督がデュプランに送った手紙には、「貴殿の任務の前半が我々の望み通りに遂行され、フォルカード神父とその連れが琉球に困難なく残ることができたと知って満足しています。これが貴殿が那覇港に寄港した主要な目的だったのです。」とある。これに対しデュプランは、

セシーユ氏は私の報告書を読んで琉球におけるあの方々の滞在に何の困難も見出さなかったというのか。あれが那覇に寄港した主要な目的だったことを私が知っていたらよかったのだが。私にそろそろそれを言っておいてもよかったのではないか、それが大きな信頼の証しを私に与えただろうに。⁽¹⁶⁾

と皮肉を込めてメモに残している。デュプランが琉球側との慎重な会談を経て、後述するように、複雑な気持ちでフォルカードたちを琉球に残してきたことが、セシーユからは「困難なく」済んだとみなされたのである。さらに部下たちとともに琉球が東アジアにおけるフランスの中継基地になりうるかの調査に取り組んだにもかかわらず、琉球派遣の「主要な目的」は宣教師を運ぶことだったと事後に明言されことで、セシーユに対する不信感がつのったのであろう。

さらに、信心深い人物だったとされ、教会や宣教師たちに協力的だったセシーユとは対照的に、デュプランが宣教師のアジアでの布教活動について批判的であったことがメモには明らかであり、この点もこの任務に対して不満を抱く理由となったようである。メモの中で彼は、宣教師たちの「熱心さ」

と「勇気」には敬服すると前置きする一方、彼らが外国の法に反してあらゆるところに入っていくことをフランス政府が黙認していることで、その国々の君主たちが彼らを受け入れるか拒否するか意のままにする権利を認めていることになっていると指摘し、以下のように記している。

フランス戦艦の一船長が、通訳と嘘をつきながら宣教師を運ぶために派遣されるべきだろうか？ もしフォルカード神父が琉球で拒否されていたら、フランスにとって侮辱ではなかっただろうか？ 私は[その時]何をすればよかったというのか？ 提督が言っていたように、私が彼を夜間に海岸に置き去りにしていたら、私は何という役割を演じていただろうか！「あなたは嘘をついている、この方は宣教師じゃありませんか」と言われていたら、私は何と答えれば良かったというのか？⁽¹⁷⁾

デュプランは、この後も琉球におけるフォルカード神父に限らず、他のアジア諸国における宣教師の布教活動などについて、批判的な意見を述べている。フォルカードらを琉球に残す任務は、その任務自体は成功したと見なすことができる結果であったとはいえ、デュプランにとっては、この任務の前からずっとこのようなわだかまりを抱えていたことが彼のメモからうかがい知ることができる。

セシーユがフォルカードらの中に宣教師という身分と同時に、彼が計画していたように、後々実際に自身の通訳の役割を担う者という二重の側面を同等の比重で見えていたとすれば、彼にとって宣教師を琉球に派遣することは、外国宣教会にとってもフランス海軍にとってもまさに一石二鳥の任務だという認識だったのであろう。それに対してデュプランにとっては、フォルカードらは「通訳という隠れ蓑をかぶった宣教師」という認識が強かったのかもしれない。だからこそ、当該国の法に反し、フランスを代表する一船長が外交の場で嘘をつかなければならないような任務には否定的な感情しか生まれず、上司に不満がつのるのは当然の結果と言える。

ところで、先にセシーユが「困難なく」この任務が完了したと見なしたことに触れたが、これにはそれなりの根拠があったようである。アルクメヌ号の琉球派遣から1年以上たった1845年9月7日、セシーユが在広東フランス大使テオドーズ・ドゥ・ラグルネに送った手紙⁽¹⁸⁾の中にその考えが表れて

いる。2人のフランス人宣教師を島に滞在させることになった琉球王府は、当時密接な関係にあった広東の中国当局を通して、宣教師らを連れ帰って欲しいとフランス側に請願していた。これに対してドゥ・ラグルネ大使がセシーユに説明を求めた際、セシーユがアルクメヌス号を琉球に派遣し「通訳」を残置したことの正当性を改めて主張しているのがこの手紙である。

まず宣教師らが残された状況に関して、「彼らは彼らの衣類とともに、白昼、海岸に集まっている人々全員のいる前で、そして何の抵抗もなく陸地に置かれた」と認識していることを書いている。さらに、アルクメヌス号が出航時にサンゴ礁に乗り上げ、島民が助けに来たことに触れ、この機会に当局がフォルカードとオーギュスタンを船上に戻すこともできたのにそうしなかったとしている。「したがって、[...]彼らを置いていくことに[琉球側が]同意したと信じざるをえない」と結論付けている。先述のデュブランのメモによれば、セシーユは宣教師たちを夜間に海岸に置いていくという選択肢も提案していたことが明らかであることから、白昼堂々とフォルカードらを陸上に残しても押し返そうとする仕草も見せなかった琉球側の対応に、この任務が予想以上に難なく遂行されたと評価したようである。

おわりに

本稿では、1844年のコルヴェット艦アルクメヌス号の琉球来航の際、フランスと琉球の人々の間にどのような交流があったのか、邦訳版出版から25年経つフォルカード神父の日記では触れられていなかった出来事を、海軍関係者の記録から一部抜き出し、紹介することを試みた。一方で未公開の史料も紹介しつつ、アルクメヌス号の琉球派遣を指揮したセシーユ提督と実際に任務を遂行したフォルニエ＝デュブラン艦長のこの任務に対する見解の相違を確認することができた。那覇港の調査をするとともにフォルカード神父と中国人伝道士オーギュスタン高を琉球に連れて行くという任務は、その結果から判断すればフランス海軍にとって成功したとみなすことができるかもしれないが、実際に任務に携わったデュブランにとっては、複数の理由から不満の多く残る航海だったことをその記録から明らかにすることもできた。

* 本稿を執筆するにあたって、パトリック・ベイヴェール氏が収集・翻刻したフランス側の琉球関連史料のうち未公開の史料も使用させていただいた。氏の寛大なご協力に対し感謝いたします。

(注)

- (1) 『幕末日仏交流記—フォルカード神父の琉球滞在日記—』 中島昭子・小川小百合訳、中央公論社、1993年。
- (2) 『幕末日仏交流記』によれば、オーギュスタン高は「[キリスト教] 信仰のために広東の刑務所に留置されていたところを提督が釈放させたばかり」(p.10)の中国人伝道士で、フランス側と中国語を話す琉球王府側との間の通訳としてフォルカード神父とともに琉球に滞在した。
- (3) Fornier-Duplan, « Campagne d'Alcmène en Extrême-Orient, d'après le Journal du Commandant Fornier-Duplan (1844) » dans *Bulletin de la Société de la géographie de Rochefort*, 30 (1908), pp. 26-27. (パトリック・ベイヴェール編『西洋の出会った大琉球 第一期：第4巻』Curzon, Edition Synapse, 2000に所収)、拙訳。フォルカード神父の日記の引用以外、本稿におけるフランス語史料はすべて拙訳。
- (4) 前掲書、27頁。
- (5) Fornier-Duplan, p. 29.
- (6) *Ibid.*, p. 29.
- (7) Louis Grivel, « Visite à Napa-Kiang », *Revue de l'Orient*, Tome VI (1845), pp. 304-313.
- (8) Fornier-Duplan, p. 31.
- (9) *Ibid.*, p. 27.
- (10) Jean-René Bolloré, *Voyages en Chine et autres lieux : 23-1-1839—13-5-1846*, Société Finistérienne d'Histoire et d'Archéologie, 1979, p.128.
- (11) *Ibid.*, p. 129.
- (12) Louis Grivel, « N° 37. Campagne de la corvette l'Alcmène sur la côte nord de Chine et aux îles Liou-tchou, en avril, mai, juin, juillet et août 1844, par un élève de la marine », *Annales Maritimes et Coloniales* (Partie non officielle, tome I, 1re section, sciences et arts), 90, pp. 325-341. グリヴェルの前掲書はこの文書の縮約版である。パトリック・ベイヴェール氏の琉球関連文書に所収されており、当該文章のページは不明。
- (13) Fornier-Duplan, p. 31.
- (14) Fornier-Duplan, manuscrit 3181, « Campagne en Chine de la corvette l'Alcmène, 1843, 4, 5, 6 », 2e cahier, « Campagne en Chine ». トロワ市立図書館所蔵、パトリック・ベイヴェール氏翻刻。
- (15) Fornier-Duplan, manuscrit 3181, pp. 12-13.
- (16) *Ibid.*, partie F., p. 8. (セシユの手紙は同じノートにデュブランによって部分的にコピーされたもの。)
- (17) *Ibid.*, partie G., pp. 16-17.
- (18) Archives nationales, fonds Marine BB/4/637, ff. 474-475.

青淵漁夫・靄山樵者著『航西日記』の基礎的研究

関 根 仁

はじめに

『航西日記』は、1867年パリ万国博覧会に將軍名代として派遣された徳川昭武に随行した渋沢栄一と杉浦讓^{ゆずる}による全6冊の紀行である⁽¹⁾。渋沢と杉浦の共著として明治4年から5年にかけて出版されたもので、慶応3年1月11日に横浜を出港してフランス到着の後、万国博見学、ナポレオン3世謁見など公式行事を経て、さらに欧州巡歴の期間（同11月22日まで）の様子が日記形式で記されている。

本書は幕末にフランスを訪問した徳川昭武一行の動向や、渋沢と杉浦の見聞内容を知る貴重な記録とされるが、例えば久米邦武編『米欧回覧実記』や森鷗外『航西日記』などに比して、一般的な知名度は決して高くはない。その一方で、日仏交流史をはじめとした諸研究、さらに近年では啓蒙書やビジネス書等でも引用されることが多いのだが、誤った認識が定説化している⁽²⁾。

その多くは共著者の杉浦が無視されてしまい、「渋沢栄一の単著」と認識される、あるいは共著という認識はあっても、「渋沢栄一の日記」として引用されることである。もう1つの大きな問題点は、本書が慶応3年渡仏時におけるリアルタイムの日記史料と見なされてしまうことである。そもそも「航西日記」という名称の原史料は確認できない。本書は渋沢と杉浦による日記やメモ類、新聞記事訳など様々な付属情報をまとめた、二次編纂物なのである。

こうした背景には、杉浦が明治10年に43歳という若さで亡くなり、その一方で渋沢が近代日本を代表する実業家として、昭和初期まで活動したことによる一般的な誤解や先入観があるだろう。さらに『航西日記』それ自体が、これまで研究対象とはされておらず⁽³⁾、無批判のままで利用されている現状

がある。

本稿では、『航西日記』の基礎研究が不足しているという状況を踏まえて、①編纂経緯、②編纂材料、③編纂過程について分析を行い、先行研究における認識の修正をしつつ、今後の研究に資することとしたい。

1. 『航西日記』の著者および概要

(1) 渋沢栄一と杉浦譲

著者名義の「青淵漁夫」は渋沢栄一であり、近代日本の実業家として著名である⁽⁴⁾。そして「靄山樵者」は杉浦譲である。甲府勤番出身で、江戸幕府の外国方、そして明治維新後は静岡学問所教授を務めた後、民部省、大蔵省等において郵便制度、富岡製糸場建設など近代化の諸政策に大きな役割を果たした⁽⁵⁾。

慶応3年に徳川昭武一行が渡仏する際に杉浦は「外交官」、渋沢は「庶務・会計」であり、立場は違えども2人は意気投合したようで、親しく交流するようになった。昭武一行のうち杉浦は先に帰国することになり、その後は日本国内の不安定な政治・社会状況の中で、昭武一行を支援するために奔走した。また渋沢に宛てて国内の状況を頻繁に書簡で伝え、さらに杉浦は渋沢家を援助し、家族ぐるみのつきあいともなったようだ。

明治2年、民部省に出仕した渋沢は杉浦を推薦し、翌3年に杉浦は同省に出仕する。以後、同省改正掛をはじめとして、様々な近代化政策を進めるため、渋沢と杉浦は共に尽力した。こうした2人の関係性を前提として『航西日記』は編纂・刊行されたのである。

(2) 『航西日記』の概要

『航西日記』は、黄色の表紙が特徴的な木版刷りの和装本で、巻之一から巻之六までの計6冊から成る。先述のように渋沢と杉浦の共著として耐寒同社より発行された⁽⁶⁾。

まず明治4年9月に巻之一と二が「初編」として出版、続いて同5年1月に巻之三と四が「二編」として、さらに同年6月に巻之五と六が「三編」として出版された。計600部（1巻につき100部か）が発行され、須原屋茂兵衛、和泉屋市兵衛、山城屋佐兵衛の3か所で販売された⁽⁷⁾。

本文は原則として日記形式で記述され、所々に見聞にまつわる説明や補足、

新聞記事などが挿入されている。卷之一は「題字」、「叙」、「凡例」、「経過順目次」に続き、本文は横浜を出港する慶応3年1月11日から始まり、卷之六で、昭武一行が欧州巡歴を終えた同年11月22日をもって記述が終わる⁽⁸⁾。そして本文の次丁より杉浦の漢詩集「帰東雑草」が収録されている⁽⁹⁾。

2. 編纂経緯

本章では『航西日記』の編纂経緯について見ていく。本書の卷之一の冒頭には、渋沢の名義による「叙」(序文)が掲載されており、ここに編纂の経緯が端的に述べられている。この「叙」は漢文で記されているため、編纂経緯にかかわる部分を、以下に要約してみよう。

①慶応3年にパリ万国博出席のため、民部公子(徳川昭武)が渡仏することになり、私(渋沢)と杉浦は随行した。②諸事情により杉浦が先に帰国したので、私が見聞内容を記録し、それらが蓄積された。③帰国後に杉浦と私は静岡に移住し、当時の記録類を見ながらフランスでの日々を語り合った。西洋の豊かな文物、自然、また鉄道の車窓から見た風景など、それらは夢のようだった。④杉浦と私は、これらの記録類を2人で編纂しようと約束したが、私(明治2年11月)、続いて杉浦(明治3年2月)が明治新政府に仕官し、職務が繁忙を極めたので編纂作業ができないままだった。⑤そうしたなか、私達が勤める大蔵卿の伊達宗城氏が日記の出版を勧めた。⑥私の記録は自分で見聞し、気付いた事項のみであり、西欧体験の全てではなく、西洋の言語も理解していないために不十分なものであると思っていたが、無益なものではないだろうと考えて、仕事を終えた夜に杉浦と一緒に灯りのもとで編纂した。

「叙」の記述をそのまま信用すれば、渋沢と杉浦は渡欧中の見聞内容を記録し、それぞれ所持していた。2人は帰国後にそれらの記録を編纂しようと約束をしていたものの、職務多忙のなか果たせていなかった。そこに伊達宗城の強い勧めがあり、編纂・刊行に至ったという。

この「叙」の記述を裏付けるものとしては、渋沢による後年の回想がある。

「航西日記」は帰朝後大蔵省に出仕中、時の大蔵卿伊達侯の切なる御勸説により、杉浦愛蔵氏の大人^{たいじん}に於て取調の上出来致候ものに有之、今にして思へば余りに密に過ぎ冗長の嫌有之、此亦採余の価値無之やに被存候⁽¹⁰⁾

これは渋沢の晩年、昭和2年の回想であるが、渋沢の記憶は正確なものであることが知られている。

また渋沢が民部省に出仕した直後、明治2年11月17日の日記には、「玉乃少丞ヨリナポレオンコード之儀申談有之、郷少丞ヨリ永田■左衛門建白書被相廻一覽、岡本へ廻ス、仏国在中之儀其外ニ付卿伊達従二位殿より御談有之」との記述がある⁽¹¹⁾。渋沢は、民部省によるナポレオン法典の翻訳・刊行事業に関与していたようであり、それに関連して伊達にフランス滞在時の話をしていたことが窺える。

以上のように『航西日記』の編纂にあたっては、渋沢と杉浦による滞仏時の記録類の存在、そして2人による編纂の意思に加えて、伊達宗城による勧めが大きなきっかけとなったことが分かる。巻之一の巻頭には、伊達の筆による題字「乗風破浪」が掲載されており、編纂の経緯を示唆していると言える。

3. 編纂材料の分析

本章では『航西日記』が、どのような材料・情報から成り立っているのかを、編纂の基となった記録類の分析を通して見ていきたい。

『航西日記』は大きく分けて「日記の記事」と「トピック記事」という2つの記述方法から成り立っている。

(1) 日記の記事部分

『航西日記』の基本的な記述は日記の形式である。例えば徳川昭武一行が日本を出発して約2か月の旅を経てようやくパリに到着した、慶応3年3月7日条では「同七日 西洋四月十一日晴、朝七時発し、汽車にて、夕四時仏都巴里斯へ着ぬ」⁽¹²⁾というように、日付、天気、その日の出来事などが記される。

この日記部分が、どのような記録を基に編纂されているのかを示したのが【表1】である。

昭武一行のなかで杉浦の担当業務は外国奉行支配調役（二等書記官）として日々の公務日記、外交文書の作成、筆写などの「書記役」であった。特に公務日記の作成は大きな比重を占めていたと考えられ、杉浦は横浜出港から帰国まで、詳細な記録を残している。

杉浦の帰国後、渋沢は「書記役」の一部を引き継ぎ、「庶務・会計」に加えて公務日記や部分的な書類作成なども担当する。欧州巡歴期間における渋沢の記録が「御巡国日録」である。

杉浦と渋沢の日記は私的な記録というよりも、「書記役」の職務として記した公務日記であり、清書したものを本国や上役へ提出している⁽¹³⁾。そして2人はそれぞれ、日記の下書きおよび原本を手元に残しており、それらが『航西日記』の基になったと考えることができる。

徳川昭武一行が横浜を出港した、慶応3年1月11日からパリに到着した翌々日の同3月9日までは、①杉浦「奉使日記」が基になっている。そして杉浦が先に帰国した後、昭武一行が欧州巡歴に出発した同8月6日からパリに帰着した同11月22日までは、②渋沢「御巡国日録」と⑦「英国御巡行日誌」が基になっている。

また同8月3日から同5日については ③杉浦「帰朝雑誌」と④「帰朝日記」を参考にしたと思われる。

さらに上記以外の期間、つまり同3月10日から8月2日までの記述については、これまで基となる記録の存在が判明していなかった。しかし近年、筆者は静岡県立中央図書館所蔵の「御用留」の中に、杉浦の筆による慶応3年1月5日から8月4日までの日記（表中⑤）を見出すことができた⁽¹⁴⁾。これは杉浦が徳川昭武一行の動向を記した公務日記であると考えられ、①杉浦「奉使日記」よりも詳細に記述がなされている。このことから「御用留」所収の杉浦の日記が直接的な材料であると判断することは現状ではできないが、同期間において杉浦が日記・記録を残していたことは確かなことであり、それが『航西日記』の材料になったと推測できる。

以上から、慶応3年1月11日から同8月5日までは杉浦の日記、そして同8月6日から同11月22日までは渋沢の日記が基になっていると考えられる。つまり『航西日記』は、冒頭から3分の2は杉浦の記録を基にしている範囲、そして残り3分の1は渋沢の記録を基にした範囲という構成になっている。

(2) トピック記事部分

『航西日記』の記述でもう1つ特徴的なものが「トピック記事」である。先述の日記の記事に挿入、または1字下げの形式で、各寄港地や訪問したフランスほか各地域の名所旧跡、風土、地理歴史、人種、慣習、施設、歴史上の人物、動植物、パリ万国博関連の現地新聞記事訳などが記される⁽¹⁵⁾。特に

杉浦の日記においては確認できない記事も多数含まれており、編纂の際に新たに加筆された箇所は非常に多いのである。

この「トピック記事」と記事概要、そして基になったと考えられる材料を一覧にしたのが、【表2】である。

まず杉浦の範囲を見ていくと、先述の日記（表中（1）奉使日記、（4）日記）のほかに、表中（3）、（5）など滞仏時における杉浦自身のメモ類がある。さらに注目できるのは（6）「奉使日記」、（7）「使幕雑報」という、杉浦が文久3年から元治元年に渡欧した際の記録類を多くの箇所 で引用している点である。このことは、『航西日記』を慶応3年渡仏時のリアルタイムの記録史料として位置付けることを難しいものとしている。本書を二次的な編纂物として見る必要性を示していると言えよう。

次に渋沢の範囲を見ていくと、杉浦が多くの記録類を使用しているのとは対照的に、日記（表中（8）と（9））2点が挙げられるのみである。（8）については先述のとおりであるが、（9）はイギリス訪問の際の日記であり、（8）を作成する際の材料であったと考えられる。（9）の存在から、渋沢も杉浦と同様に日記を編成するための下書きやメモ類を所持していたと思われるが、大正12年関東大震災の被害により関係史料が焼失したために⁽¹⁶⁾、材料として現状で判明しているのはこの2点のみとなる。

以上のように、『航西日記』は渋沢と杉浦の日記の記述をそのまま合成したような、単純に編纂されたものではなかった。数種の日記史料、記録類を基にして編纂され、さらに「トピック記事」として新たに加筆されるなど、二次的な編纂物であることが分かる。

4. 編纂過程 一だれが、どのように執筆・編纂したのか一

前章で述べた材料を基に編纂された『航西日記』について、これまで看過されていた大きな問題は、渋沢と杉浦の日記の文章がそのまま引用されているわけではないという点である。

『航西日記』と日記類を併読すると分かるのだが、日々の事実関係はほぼ基本線に沿って記されているものの、日記の文章自体は新たに書き改められている。また日本側の個人名、固有名詞の省略や削除も確認できる。では、このような編纂作業をだれが、どのように担ったのであろうか。

『航西日記』の編纂過程については、これまで小西四郎氏と高橋善七氏に

よる言及がある⁽¹⁷⁾。特に小西氏の見解は後の日記事典等の記述にも踏襲されており、現在まで通説的に扱われているのが現状である。しかしながら関係史料を丹念に調査すると、これまで見えていなかった編纂過程の実態が浮かび上がってくる。

まず文章の執筆について、渋沢は次のように回想をしている。

猶此航西日記の筆者は杉浦の父護堂（筆者注—七郎右衛門、号は護水）といふ人が当時無職で遊んでゐたので、自分と杉浦が共に口授して此護堂が執筆せるもの、費用は杉浦と自分とが持出したが、自分のほうが少し余計に出したかも知れぬ⁽¹⁸⁾

このように渋沢と杉浦が日記を「口授」して、七郎右衛門が執筆したという当時の状況が語られている。そしてこれを裏付けるのが、渋沢史料館が所蔵する『航西日記』の草稿史料である⁽¹⁹⁾。これは計21点の草稿から成るもので、そのうち第1稿から4稿までの草稿を見ると、七郎右衛門の筆跡であることを確認できるのである。

次に編纂期における杉浦（家）の日記に注目してみたい。日記の記述から『航西日記』の関連記事を抽出したものが【表3】である。

記事中で特に目立つのが「家父」、すなわち七郎右衛門の動向である。例えば明治3年8月9日の「家父が西洋紀行を調べる」という記事を最初として、同4年以降では、1月17日に「家父が井沢平助を訪ねて航西日記の浄書を促す」、同1月24日には「家父が渋沢を訪問し、航西日記（巻之一と二）の出版願出書を持参」、同2月25日に「家父が大平と板木彫刻の件について打合せ。午後に渋沢が巻之三を校閲終了する」、同4月4日には「家父が渋沢を訪れ、巻之三と四の校正原稿を渡す」、同5月28日に「家父が筆工の樵山を訪れ、巻之三の原稿12丁分を渡す」、同8月23日に「家父が大平を訪れて、板木彫刻を点検した」というように、ここで記事の全てを挙げることはできないが、杉浦の父・七郎右衛門が『航西日記』の編纂実務を担当し、非常に繁忙を極めていたことが判明する。

また七郎右衛門の動向のほかにも日記には、渋沢の名義で記されている「叙」（序文）の草稿執筆を田辺太一に依頼していた事実（明治3年閏10月8日条）や⁽²⁰⁾、制作費用にまつわる記事が散見されることから、編纂の実態を知る上では、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

ともあれ、現段階での分析から、『航西日記』の執筆、編纂について次のことが明らかになる。

渋沢と杉浦の日記やその他の記録類を基にして、杉浦の父・七郎右衛門が原稿を執筆。出来上がった原稿を杉浦、渋沢がそれぞれ校正する。浄書、筆耕作業は「井沢平助」、「中田弘太」、「樵山」、「石塚信吉」なる人物が担当。板木彫刻は紀伊国屋源吉に相談し、「大平」なる人物が担当した。製本は須原屋が行う。そして校正、浄書、筆耕、彫刻などのやり取りといった実質的な編纂作業の大部分を七郎右衛門が担っている。

おわりに 一小括と展望

本稿はこれまで研究対象とされていなかった『航西日記』について、編纂の経緯、編纂の基となった材料、編纂過程を検討した。

ごく基礎的な事項の分析に終始したが、諸研究では見過ごされてきたことや新たに判明した事実は多く、これまで定説化していた『航西日記』とは異なる姿が見えてきた。

特に本書を「渋沢栄一の日記」と見なす、または共著者である杉浦の存在を無視した形で引用した諸研究は、修正が必要となるであろう。単純な見方かもしれないが、『航西日記』の文章の割合でも、全体の3分の2（慶応3年1月11日から同8月5日まで）が杉浦の記録、3分の1（同8月6日から同11月22日まで）が渋沢の記録である。まずは渋沢と杉浦の「共著」であることを踏まえた上での利用が前提となる。

また編纂過程の分析から、文章の執筆や編纂実務を杉浦側が主導となって行っており、渋沢はむしろ補助的な立場であったことも明らかになった⁽²¹⁾。

さらに各種の編纂材料の存在、杉浦の父・七郎右衛門による文章執筆の事実は、本書が慶応3年渡仏時におけるリアルタイムの日記史料ではなく、二次的な編纂物であるということを私たちに改めて認識させるだろう⁽²²⁾。これは「日記とは何か」、「記録とは何か」という根本的な問いにつながるものであり、容易に答えを出すことのできるものではないが、少なくとも『航西日記』を無批判に「渋沢栄一の日記」、「渋沢栄一の単著」と見なして研究利用することは、問題があると言わざるを得ない。

本書は日仏交流史の基本史料、また幕末における日本人の海外体験記として重要な史料の1つであることは間違いないものである。本稿で行った基礎

研究を土台として、『航西日記』とはどのような書物（史料）であるのか、多くの視点から検討していくことが求められる。

注

- (1) 1867年パリ万国博や徳川昭武一行、渋沢栄一の動向についての詳細、参考文献等については、寺本敬子『パリ万国博覧会とジャポニズムの誕生』（思文閣出版、2017年）、渋沢史料館編『渋沢栄一渡仏150年 渋沢栄一、パリ万国博覧会へ行く』（2017年）など。
- (2) 『航西日記』の翻刻、収録、また利用した諸研究については拙稿「日本史籍協会叢書『渋沢栄一滞仏日記』の刊行と収録日記についての考察」（『渋沢史料館年報2012年度』2014年）の注を参照されたい。また近年の研究としては、箕輪睦夫「『航西日記』から学ぶアデランス」（田中宏司・水尾順一・蟻生俊夫編著『渋沢栄一に学ぶ「論語と算盤」の経営』同友館、2016年）、橋本順光、鈴木禎宏編著『欧州航路の文化誌 寄港地を読み解く』（青弓社、2017年）、西原大輔『日本人のシンガポール体験―幕末明治から日本占領下・戦後まで』（人文書院、2017年）、関水信和「渋沢栄一における欧州滞在の影響―パリ万博（1867年）と洋行から学び実践したこと―」（『千葉商大論叢』第56巻第1号、2018年）が挙げられるが、いずれも『航西日記』を「渋沢栄一の日記」として論じている。
- (3) 編纂過程について言及した古典的な研究として、小西四郎「解題」（日本史籍協会編『渋沢栄一滞仏日記』東京大学出版会、1967年覆刻）、高橋善七「解説」（土屋喬雄編『杉浦譲全集』第5巻、杉浦譲全集刊行会、1979年）がある。特に高橋氏は杉浦七郎右衛門の役割について述べるなど踏み込んだ言及がなされているが、事実誤認が散見される。

また『航西日記』それ自体を分析した近年の成果としては、荒尾禎秀「近代日本語資料としての渋沢・杉浦『航西日記』―左振仮名を中心に―」（近代語学会編『近代語研究』第20集、武蔵野書院、2018年）、拙稿「渋沢史料館所蔵『杉浦露山詩稿 帰東雑草』（『渋沢史料館年報 2016年度』2018年）がある。

- (4) 渋沢栄一（1840－1931）は天保11年、武蔵国榛沢郡血洗島村の農家に生まれる。号は青淵。一橋家に出仕後、幕臣となり、慶応3年パリ万国博開催の際には徳川昭武一行の随員として渡仏。帰国後、大蔵省官僚を経て、第一国立銀行の創立に関わり、総監役（のちに頭取）となる。また500社にのぼる株式会社の設立と育成に尽力したほか、民間外交、社会公共事業などにも取り組み、日本の近代経済社会の基礎を築いた。なお渋沢の経歴は公益財団法人渋沢栄一記念財団編『渋沢栄一を知る事典』（東京堂出版、2012年）などを参照。
- (5) 杉浦譲（1835-1877）の経歴は次の通り。初名は愛蔵。号は露山^{あいらさん}。天保6年に甲府勤番同心の家に生まれ、文久元年に江戸出府、外国奉行支配書物御用出役となる。同3年に池田筑後守使節団の随員として渡欧、また慶応3年には徳川昭武に随行して渡仏。明治維新後は徳川家に随従して静岡へ移住、明治2年に静岡学問所四等教授となる。翌3年には郷純造、渋沢栄一らの推挙により明治新政

府に出仕し、同年駅通権正、地理権正兼務に任命、郵便事業創設に携わる。その他、富岡製糸場建設準備や戸籍法など諸政策に大きな役割を果たした。その後は内務省に移り、大久保利通のもとで諸役務に尽力するも、激務が続き在職中の明治10年、43歳という若さで亡くなった。

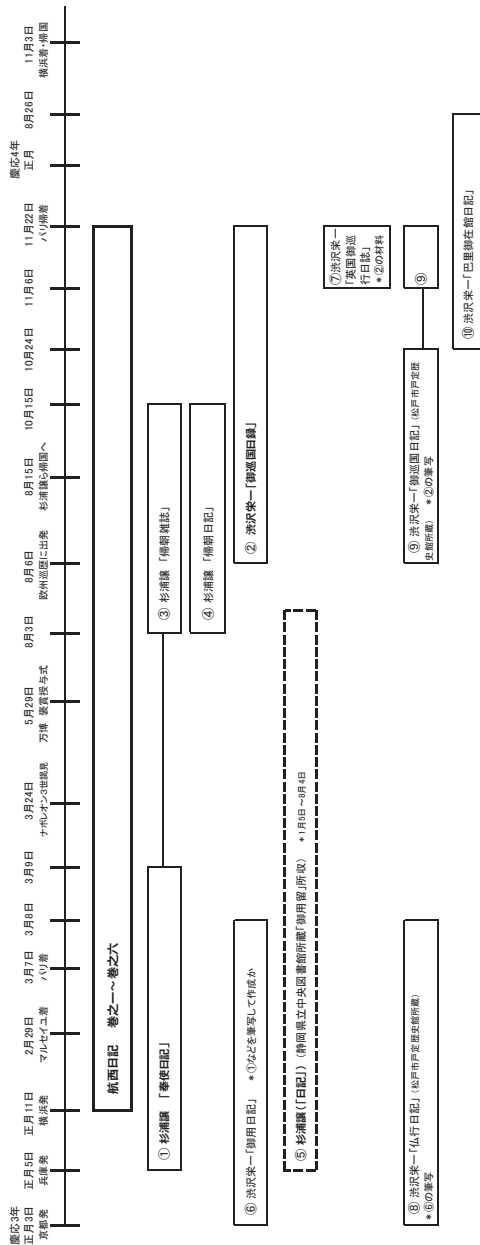
なお杉浦については、高橋善七『初代駅通正 杉浦譲 ある幕臣からみた明治維新』（日本放送出版協会、1977年）、土屋喬雄編『杉浦譲全集』第1巻～第5巻（杉浦譲全集刊行会、1978年～1979年）、五十嵐暁郎「旧幕臣の明治維新—近代官僚の原型・杉浦譲の構想とエートス—」（『思想』第800号、岩波書店、1991年）などを参照。

- (6) 本稿作成に当たっては、渋沢史料館所蔵の『航西日記』全6巻（版本）を参照した。
- (7) 「つゝれきぬ」、「座右日誌」、「座右日記」（すべて『杉浦譲全集』第3巻所収）、『航西日記』巻之二の奥付。
- (8) 各巻の主な内容は次の通りである。
巻之一（10丁+29丁）：題字（伊達宗城筆）、「叙」（渋沢栄一の名義）、「凡例」、「経過順目次」、慶応3年1月11日（横浜出港）～2月20日（アデン出港～航海中）
巻之二（35丁）：同年2月21日（スエズ着）～4月26日（パリ滞在）
巻之三（33丁）：同年4月27日（パリ滞在）～5月26日（パリ滞在）
巻之四（40丁）：同年5月27日（パリ滞在）～7月5日（パリ滞在）
巻之五（37丁）：同年7月6日（パリ滞在、欧州巡歴に出発）～10月5日（イタリア滞在）
巻之六（28丁+11丁）：同年10月6日（イタリア滞在・発）～11月22日（イギリス～フランス帰着）、「帰東雑草」〔（杉浦譲）、叙（中村正直）、跋文（巖谷修）〕
- (9) 「帰東雑草」については、前掲注（3）拙稿を参照。
- (10) 「渋沢栄一書簡 赤司鷹一郎宛（控）」昭和2年7月11日付（渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第48巻、渋沢栄一伝記資料刊行会、1963年）。
- (11) 「渋沢栄一日記 自明治二年十月二十一日至明治三年二月十日」（『渋沢栄一伝記資料』第2巻、1955年）。
- (12) 『航西日記』巻之二、慶応3年3月7日条。
- (13) 例えば「巴里御在館日記」（『渋沢栄一滞仏日記』所収）によれば、渋沢は滞仏中の慶応3年11月25日に「卯三月以来巴里御在館日記」の写しを外国方へ回送し、また同12月8日には「御巡国日記」の写しを徳川昭武に献上している。
- (14) 「御用留」（静岡県立中央図書館所蔵「久能文庫」Q293-3）。この史料は徳川昭武一行の関係書類綴であり、渡仏直前の慶応2年12月頃から翌3年9月頃に至る、外国方による往復文書、外交文書、渡仏・滞仏中の事務書類等の写しが綴られている。多くの部分で杉浦の筆跡が確認できるが、他の人物の筆跡による文書も含まれる。なお本史料収録の杉浦の日記は、『渋沢栄一伝記資料』第1巻に翻刻掲載されているが、「向山隼人正 航西日誌」とされており、修正がなされるべきであろう。
- (15) トピック名は巻之一の「経過順目次」に列挙されている。また各巻の所々に頭注で示されている。

- (16) 関東大震災で焼失した渋沢の史料については、拙稿（講演録）「関東大震災で失われた渋沢栄一の資料―渋沢史料館所蔵資料の形成前史―」（渋沢史料館編『渋沢栄一再発見！―渋沢史料館のあゆみと名品―展示記録・講演集』2013年）などを参照。
- (17) 前掲注（3）小西「解題」では、『航西日記』と『御巡国日録』を日記風に書き、その外に種々感想をメモに記し、のちにそのメモや杉浦霏山の助力を得て『航西日記』をまとめたと思われる。したがって記述がほとんど重複し、また『航西日記』の方が詳しくなったのであろう」と述べられている。また高橋「解説」では、「まず、杉浦分担の横浜出帆からパリ着までの原稿についてみると、譲が『航海日記』をもとにして原稿を書く。これを父護水が清書する。さらに、譲がこれに加筆修正する。それを、もう一度護水が清書して決定稿が完成する手順であるが（後略）」との説明がある。
- (18) 渋沢史料館所蔵「御口授 青淵先生諸伝記正誤控並御談話控附日記」のうち「昭和五年十二月二十九日の御話」。
- (19) 草稿史料については現在筆者が整理と調査を進めており、今後成果を報告していく予定である。
- (20) 大正10年に刊行された田辺太一の遺稿集である田辺朔郎編『蓮舟遺稿』（全2冊のうち「文編」）には、「航西日記序 代」が収録されている。杉浦と田辺の交流については、高橋『初代駅逓正 杉浦譲』などを参照。なお『航西日記』の編纂を考えるうえでは、旧幕臣のネットワークを分析する必要があるが、こうした点は別稿で論じていきたい。
- (21) 例えば「叙」の名義について渋沢は、「先生之御作為二出候儀二付」、杉浦の名義でなければ「其实を失ひ候」という意見を述べていた（渋沢史料館所蔵「渋沢栄一書簡 杉浦譲宛」明治3年閏10月11日付）。
- (22) ただし実際の執筆作業については不明な部分が多い。例えば、基となった杉浦と渋沢の日記や記録類には見られない外国語、人名、固有名詞、さらに翻訳した漢語の使用や表現などは、七郎右衛門だけでは到底成し得ないと思われ、杉浦、渋沢をはじめ、その他関係者の協力があったと考えるのが自然であろう。

[付記] 本稿は日本仏学史学会第491回月例研究発表会（於・日仏会館）での発表内容を基に作成した。発表の際には松戸市戸定歴史館館長の齊藤洋一氏に司会をつとめていただき、また多くの諸氏より貴重なコメントを頂戴した。この場をお借りして厚く御礼申し上げる。

【表1】日記の記述期間



出典: ①「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、②「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、③「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、④「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑤「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑥「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑦「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑧「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑨「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)、⑩「航海日記」(明治3年4月、東京、東京府立中央図書館蔵)

【表2】『航西日記』 トピック記事と材料

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之1	1月12日	(経過順目次に無い)	フランス船内での西洋食を紹介	未詳
巻之1	1月15日	楊子江	横浜出港後、上海へ行く途中、 揚子江の様子	未詳
巻之1	1月15日	上海	上海の街、視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	1月20日	香港	香港の街、視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	1月25日	瀾滄江・東埔寨	メコン川、カンボジアの様子	(1) 杉浦「奉使日記」
巻之1	1月25日	柴棍	サイゴンの街、視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	1月29日	新嘉埠	シンガポールの街、視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	2月7日	錫蘭	セイロン島、ゴール港、街の 視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	2月16日	亜丁	アデンの街、視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	2月16日	水溜	アデンの貯水の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之1	2月16日	紅海	紅海の気候、夏季の酷暑など	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	2月21日	蘇士	スエズの街、運河工事の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (6) 杉浦「奉使日記」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之2	2月21日	該祿	カイロの風土、風俗など	(6) 杉浦「奉使日記」、 (2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (7) 杉浦「使幕雑報」
巻之2	2月22日	亜歴散大	アレクサンドリアの風土、風俗、 博物館の様子など	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	2月26日	墨西拿	シチリア島メッシナの街、風土、 風俗など	(6) 杉浦「奉使日記」、 (2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	2月28日	撒丁	サルデーニャ島の説明、ガリ バルディ隠居の話題	(6) 杉浦「奉使日記」
巻之2	2月28日	歌爾西克	コルス島の説明、ナポレオン1 世の出生地の話題	(6) 杉浦「奉使日記」
巻之2	2月29日 ～3月6日	馬塞里	マルセイユ到着の模様、役所、 トゥーロンの軍事施設、軍事 訓練など視察の様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 (1) 杉浦「奉使日記」、 (4) 杉浦「日記」
巻之2	3月2日	水底術	潜水具の実演を視察	(1) 杉浦「奉使日記」

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之2	3月3日	授功牌	行軍式でのメダル授与の様様	(4) 杉浦「日記」
巻之2	3月6日	黎昂	リヨン到着、街および絹織物産業の説明	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	3月7日	仏都巴里	パリ到着（詳細記事は無し）	(1) 杉浦「奉使日記」
巻之2	3月14日	養魚所	水族館視察の様子	未詳
巻之2	3月17日	那破烈翁之墳	ナポレオン1世の墓・アンヴァリッドの視察	未詳
巻之2	3月21日	夜茶会	フランス外相招待による夜宴の様様	未詳
巻之2	3月24日	仏帝謁見	ナポレオン3世謁見の様子	(4) 杉浦「日記」、(3) 杉浦「ナポレオン三世謁見式の模様(手記)」、なお「仏帝へ謁見手続書」(『徳川昭武滞欧記録』第一所収) にほぼ同文あり
巻之2	3月28日	風船	気球の視察、紹介記事	未詳、「帰東雑草」所収の漢詩「観気船」に関連
巻之2	3月29日	劇場	仏帝主催、オペラ座での観劇会の様子、オペラの説明など	未詳、「帰東雑草」所収の漢詩「観演戯」に関連
巻之2	4月1日	舞踏	大臣主催の舞踏会の様子、舞踏会の説明	未詳
巻之2	4月2日	凱弓	凱旋門を登った様子、凱旋門の説明、眼下の街の様子	未詳、「徳川昭武日記」によれば、昭武が凱旋門を登ったのは5月3日
巻之2	4月3日	チュイロリー宮	チュイルリー宮にて仏帝招待の舞踏会、チュイルリー宮殿の説明	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	4月4日	戦争画図	シャンゼリゼ通りの博物館側のパノラマで、伊澳戦争のパノラマ絵を見学	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之2	4月10日	テヤートルシヤツトルイ	劇場・シャトレイ座で観劇（詳細記事は無し）	未詳
巻之2	4月12日	シヤルクラン館舎	杉浦、渋沢、木村、山内がシャルグラン街30番のアパートメントに引っ越し（詳細記事は無し）	未詳

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之2	4月12日	ボワテブロンギユ 公園	ブーローニューの森について紹介	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 「帰東雑草」所収の漢 詩「曉起遊園林」に関連
巻之2	4月24日	埋地道	地下の上下水道視察の模様	未詳
巻之3	4月30日	観競馬	仏帝、露帝らとブーローニュー で競馬を観る、競馬賭博の紹介	未詳
巻之3	5月4日	巴里調練	ブーローニューのロンシャン競馬 場で行われた大調練視察の模様	未詳
巻之3	5月4日	魯帝危難	同上帰途、ロシア帝暗殺未遂事件	「ラシエクル新聞」抄 訳。「歴山帝へ対する 不敬事件」（『徳川昭武 滯欧記録』第一所収） と同じ
巻之3	5月6日	病院	病院施設の視察の模様	(5) 杉浦「病院説明メ モ」
巻之3	5月9日	(経過順目次に無い)	随員らが早朝のブーロー ニューの森で遊ぶ記事	(2) 杉浦「帰朝雑誌」、 「帰東雑草」所収の漢 詩「曉起遊園林」に関 連
巻之3	5月10日	英国新聞	慶応3年3月28日に將軍慶喜が、 大坂城にて英仏蘭公使と会見 した記事か（詳細記事は無し）	未詳
巻之3	5月15日	横浜新聞	同上（詳細記事は無し）	未詳
巻之3	5月18日	博覧会	パリ万国博の展示会場視察記 事、会場内について詳細レポート	未詳（明らかに「報告 書」あるいは「新聞記 事」を訳したと見られ る引用箇所あり
巻之3	5月24日	水溜	パリ市街にある飲用水の貯水 場視察、市内の水道管設備の 説明	未詳
巻之4	5月29日	博覧会 褒賞	パリ万国博の褒賞授与式の模様	「仏国博覧会受賞の件 向山隼人正より塚原 但馬守等への書簡」中 の「附新聞訳」（『徳川 昭武滯欧記録』第一所 収）と同じ
巻之4	6月10日	セイヌ河	蒸気船でセイヌ河を遊覧する （詳細記事は無し）	(4) 杉浦「日記」
巻之4	6月17日	博覧会新聞	万国博会場、特に日本紹介の 新聞記事訳	該当新聞は未詳

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之4	6月19日	独楽	日本人曲芸団・松井源水らの 技芸を観る（詳細記事は無し）	(4) 杉浦「日記」
巻之4	6月21日	手品	「ヒガロ新聞」掲載の日本人曲 芸団の記事訳	Le Figaroの記事訳
巻之4	6月22日	葡萄牙王妃	ポルトガル王および王妃と面 会のためチュイルリー宮殿へ （詳細記事は無し）	(4) 杉浦「日記」
巻之4	7月2日	ヒガロ新聞	「ヒガロ新聞」掲載の日本人曲 芸団、足技の記事訳	Le Figaroの記事訳
巻之4	7月4日	新聞雑報	日本人曲芸団の記事、万国博会 場内の日本茶店の記事訳	新聞（「ヘクトブルス」） 記事訳
巻之5	7月15日	仏帝初代 誕辰	ナポレオン1世の生誕祝祭の様 子、市内の賑わいの様子	(2) 杉浦「帰朝雑誌」
巻之5	8月6日	回歴初途	欧州巡歴に出発、スイスへ向 かう途中「トロワ」「シャンパ ンギュ」の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月6日	瑞西	スイスのバーゼル到着記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月7日	織物所	織物工場、製品の紹介	未詳
巻之5	8月7日・ 8日	瑞西 伯爾尼	スイスのベルン到着・大統領 謁見の記事	(8) 渋沢「御巡国日録」。 大統領謁見記事は「瑞 西大統領謁見手続書」 （『徳川昭武滞欧記録』 第一所収）と関連か
巻之5	8月9日	ツーン	スイスのトゥーンにて軍事訓 練視察の記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月10日	蓄熊	同地で古来より熊を飼育する 風習の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月11日	日内瓦湖	ベルンからジュネーブへ向か う。レマン湖の説明	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月11日	メイトロホール	ホテル・メイトロポールに宿泊。 ジュネーブ市街の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月12日	パロン・ロウチ ュル	現地の富豪、パロン・ロウ チュール氏招待	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月13日	ヌーシヤテル	ヌーシヤテル市街の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月13日	帰 伯爾尼	ヌーシヤテルからベルンへ戻る	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月17日	ランヌ河	スイスからオランダへ向かう。 ライン河を蒸気船で進む（詳 細記事は無し）	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月18日	荷蘭	オランダのハーグ到着、歓迎 の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之5	8月19日	議事堂	国王より議事堂招待、視察の様子	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月20日	国王謁見	オランダ国王謁見の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」。 「荷蘭王謁見手続」 （『徳川昭武滞欧記録』 第一所収）と関連か
巻之5	8月21日	ニューヨジップ	軍艦製造視察、同市街の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月23日	アムステルダム	同市街の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月24日	レイデン	ライデンにあるシーボルトの 別荘訪問記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月26日	荷王再謁	オランダ出発の前に、国王再 謁見の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月27日・ 28日	白耳義	ベルギーのブリュッセル到着、 歓迎の模様、国王謁見の様子	(8) 渋沢「御巡国日録」。 国王謁見記事は「白耳 義国帝謁見手続書」 （『徳川昭武滞欧記録』 第一所収）と関連か
巻之5	8月29日	観 火技	花火の祭典、国王招待の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	8月30日	アンベルス	アントワープの砲台視察記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月2日	看劇	劇場招待会の記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月3日	シラアン	リエージュ近傍のシラアンの 製鉄所視察記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月4日	マリートワフニエト	オワニーの鏡・ガラス類製造 所視察記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月6日	観 畋獵	狩猟の視察記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月8日	調練	陸軍三兵調練の視察	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月9日	燕見	国王招待の夕食会記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月11日	マストリウツク	富豪・マストリウツトレグー 氏の招待会記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月21日・ 22日	サンミセール	フランスからイタリアまでの行程、 山越え、馬車、トリノ着記事など	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月24日	伊太里	イタリア首都フィレンツェ到 着の記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月26日	石細工	議事堂、大理石加工場の視察	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	9月27日	王謁見	イタリア国王謁見の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」。 謁見は「伊太利国王謁 見手続書」（『徳川昭武 滞欧記録』第一所収） と関連か

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之5	10月1日	意大利別都 ミラン	ミラノ訪問、市街の紹介	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之5	10月5日	ピサ攻城	ピサ訪問、狩猟見学記事	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月10日	水軍訓練	イタリア→マルタ島へのイギリス軍艦に乗船中、海軍の銃砲訓練を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月10日	噴火山	イタリア→マルタ島へのイギリス軍艦に乗船中、ストロンボリ島を船から見る	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月11日	マルタ島	マルタ島到着、歓迎の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月13日	戌兵訓練	番兵の訓練視察	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月14日	的打	スナイドル銃の的撃ち訓練視察	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月14日	集議場	官邸内にある集議場での謁見・歓迎会の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月20日・21日	水師訓練	マルタ島→マルセイユへのイギリス軍艦に乗船中、海軍の訓練を見る〔但し、詳細記事は無し〕イギリス軍艦の故障の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	10月23日	帰巴里	パリに帰着（詳細記事は無し）	(8) 渋沢「御巡国日録」
巻之6	11月7日	英国	イギリスのドーヴァー港到着、歓迎の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」
巻之6	11月7日	倫敦	ロンドン着、歓迎の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」
巻之6	11月7日	議政堂	議事堂視察の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」
巻之6	11月9日	英国女王謁見	英国女王謁見の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」謁見は「英国女王謁見手続書」（『徳川昭武滞欧記録』第一所収）と関連か
巻之6	11月9日	劇場	女王招待による観劇会の記事（詳細記事は無し）	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」
巻之6	11月10日	新聞紙局	タイムズ新聞社視察の模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之6	11月11日	ウーリッチ	ウーリッジ到着、出迎えの模様	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月11日	観 調兵	ウーリッジにて砲兵の訓練を 視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月11日	大砲製造所	ウーリッジで大砲製造を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月13日	キリストルパレイス	クリスタルパレス視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月14日	スリウスベリネス	スーベリネスで大砲「遠打」 など視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月14日	大砲打様	スーベリネスで上記とは別の 大砲試発を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月14日	鉄台場	スーベリネスで鉄製の台場を 視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月15日	バンク 貨幣	イングランド銀行を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月16日	観 海軍器械	海軍施設の視察のためポーツ マスへ行く	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月17日	セラゼス	ポーツマスにて兵士輸送船セ ラゼス号を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月17日	観 狙撃船	ポーツマスにて狙撃船を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月17日	海上試砲	ポーツマスにて軍艦大砲、小 銃隊の訓練を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」
巻之6	11月18日	三兵訓練	オールダーショットにて陸軍 の三兵訓練を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行 日誌」

巻数	慶応3年／ 月日	トピック	記事概要	基と考えられる材料
巻之6	11月18日	浮梁	オールダーショットにて軽重兵の技術、川の進軍で使用する浮梁器械の運用を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」
巻之6	11月18日	屯所	オールダーショットにて兵隊の屯所を視察	(8) 渋沢「御巡国日録」、 (9) 渋沢「英国御巡行日誌」

出典:『航西日記』巻之1～巻之6、(1) 杉浦譲「奉使日記并帰朝雑誌」慶応3年(国立国会図書館憲政資料室蔵「杉浦譲文書」90)、(2) 杉浦譲「帰朝雑誌」慶応3年(『杉浦譲全集』第2巻)、(3) 杉浦譲「ナポレオン三世謁見式の模様(手記)」慶応3年(『杉浦譲全集』第2巻)、(4) 杉浦譲「日記」慶応3年(静岡県立中央図書館蔵「御用留」所収)、(5) 杉浦譲「病院説明メモ」慶応3年(『杉浦譲文書』264)、(6) 杉浦譲「奉使日記」文久3年～元治元年(『杉浦譲全集』第1巻)、(7) 杉浦譲「使幕雑報」文久3年(『杉浦譲全集』第1巻)、(8) 渋沢栄一「御巡国日録」慶応3年(『渋沢栄一滞仏日記』)、(9) 渋沢栄一「英国御巡行日誌」慶応3年(『渋沢栄一滞仏日記』)

【表3】「杉浦日記」および杉浦家「家記」にみる『航西日記』関連記事

年月日	関連記事
明治3年	
8月9日	一家父閩西洋紀行
8月16日	一休暇 家父訪渋沢氏
10月16日	一夜閩航西紀行
10月26日	一休日○渋沢氏使中外堂 実名紀伊国屋源吉 来談航西紀行彫刻之事、遣下書
閏10月8日	暮訪田辺氏談航西紀行序詞、二更後帰
閏10月10日	一出省 帰路訪渋沢氏、談航西見聞録自序
閏10月19日	一採葉○渋沢氏遣西洋見聞録二卷閩畢
閏10月22日	一西洋見聞録序文之事、遣書及渋沢氏談
11月15日	一出省 帰路訪渋沢氏
11月16日	一渋沢氏返航西紀行草稿
12月5日	一夜訪渋沢青淵談会社全書序文
明治4年	
1月16日	一午後訪渋沢氏、会田辺氏与俱乗艇
1月17日	一午後家父訪本所津輕前井沢平助、(促航西日記浄書)、不在、託閣(其妻)航西日記草稿十二枚、凡例三枚
1月24日	一家父訪渋沢氏、齒痛、且出(遣)航西日記式冊願下書
2月2日	一出省○与渋沢氏上疏如左 航西日記藏板いたし度候間開板御允許被成度奉願候也
2月6日	一中外堂使其番丁二人来問、本町書肆紀国屋源兵也 問括字板並航西日記彫刻之事、不在、家父接
2月7日	一早朝中外堂代手、玉乃氏訃事報告
2月8日	一航西日記開板允許如左(中略)一右渋沢氏達之
2月11日	○夕中田弘太来、出航西日記筆耕七枚
2月14日	渋沢氏書至
2月20日	一会渋沢氏携行家属来俱飲
2月21日	一大平来、出彫刻試板
2月25日	○家父談剗彫之事太平、午後渋沢氏遣航西日記三卷閩了、其彫刻用費金五十兩
3月11日	○石塚信吉来、出航西日記筆工 青山権田原之人
3月16日	○朝訪田辺氏、渋沢氏
3月21日	一午後渋沢内使僕謝先頃家属出京周旋
4月4日	○午後家父訪渋沢氏、謝過日贈物、且達航西日記三四編
4月9日	一朝家父詣高松氏為楨次、寛三施葉、訪太平
4月10日	一大平来謝彫刻
5月1日	一日記二卷出来、金一兩遣ス
5月22日	一航西日記三四編開板願如左(以下、省略)

年月日	関連記事
5月28日	一朝家父訪（筆工）樵山授日記三卷十二丁
6月6日	一大平来彫刻六枚持参、遺金拾枚
6月22日	一家父訪大平
6月23日	一家父訪大平遺金貳拾兩
7月23日	○家父訪樵山 談筆工 訪大平責督、剝刷期来月五日
8月14日	一家父訪瑞穂卯三、托航西日記彫刻 三卷之五枚目一枚を渡
8月15日	一家父訪両国大平遺彫刻料三十金
8月16日	一朝書肆須原屋来談出版遺卷三、三十三丁、期来廿五日、代料五十目
8月17日	一家父辞瑞卯彫刻之托、○遺筆工高橋へ五卷目
8月18日	○大平来 出航西日記彫刻二冊
8月23日	一朝家父往大平檢正航西日記彫刻
9月2日	一訪大平視摺立
9月4日	夕須原茂兵衛来 遺航西日記成刻一部 但一二卷
9月5日	一月給諸官如左 権少内吏一ヶ月百五十金、一耐官同社印成
9月6日	○航西日記製本七拾本、ひら七十枚渡、すはらや茂兵衛方へ通来
9月15日	○夕退後促大平製本
9月19日	一夜大平航西日記九十五冊出来、遅緩ニ付差戻ス
9月22日	一大平航西日記五十部入 貳拾部須原屋へ渡
9月28日	一航西日記百部輪須原屋 請取来
10月3日	○朝大平来、乃遺製本料五十二円三分
10月4日	夕須原屋来 謝彫刻遅緩 且告発兌之許
10月6日	寄書岳岳（徳川家達）、向山黄邨先生贈航西日記一部、山高氏同一部
11月3日	○家父訪西氏 不在、訪筆工樵山
11月6日	○須原屋来、出三四卷製本一冊、遣同本稿本二冊並伺書
12月晦日	○須原茂兵衛納航西日記代之内金百兩
明治5年	
1月26日	大平来出航西日記三百部、北村受取書
1月29日	朝家父遺航西日記仕立代於大平、三十七両貳分也、外ニ貳分払
2月1日	一家父遣大平金四拾兩、釣二兩取即三十八兩也、内貳分諸紙板代
2月3日	○航西日記 五六 編発兌 文部省允許 洪沢氏達
3月1日	一航西日記二部 一二 借楨次郎 一直也宿○須原屋善七来遺五、六卷草稿
3月2日	○須原茂兵衛来、遺航西日記五六卷
4月1日	○午後訪洪沢氏 達航西日記出版入費之内百三十円
5月30日	一須原屋使摺工持留板一枚来、五卷三十五・三十六 摺三百枚宛帰
6月8日	一夕須原氏来談、一航西日記五、六卷三百部帙朱印渡 須原氏

年月日	関連記事
6月9日	一須原屋代来、遣五、六卷二冊并官許狀一通
6月24日	○須原屋使代来、納航西日記二十部 五卷一冊六卷一冊
6月27日	一達航西日記 五六 十部於渋沢氏
8月27日	一使僕饋航西日記三之卷二冊并千歳饅頭一箱、家父手書添

出典：「つゝれきぬ」、「座右日誌」、「座右日記」（すべて『杉浦譲全集』第3卷所収）、「（杉浦譲）家記」十二（『渋沢栄一伝記資料』第3卷所収）

徳川昭武と多勃都会 一日仏交流を支えたもうひとつの人脈—

(前編)

小寺 瑛 広

はじめに

徳川昭武(1853-1910)は、幕末の1867年に実兄である将軍慶喜の名代としてパリ万国博覧会に派遣され、各国巡歴後にパリで留学生生活を送った⁽¹⁾。幕府瓦解により帰国した昭武は、水戸藩11代藩主として版籍奉還・廃藩置県を経験し、華族の身分を得た。1876年フィラデルフィア万国博覧会御用掛として出国した昭武は、万博終了後に渡欧し、1881年まで主にパリを拠点に留学生生活(第二次留学)を送った。筆者は前稿⁽²⁾で、第二次留学期間に昭武が多く、の在仏日本人とのネットワークを形成し、帰国後も公・私両面において彼の国際交流を支えていたと指摘した。公的ネットワークが仏学会⁽³⁾であり、もうひとつの私的ネットワークこそ、本稿で述べていく「多勃都会」である。

このような私的ネットワーク、特に文化的・経済的な人脈の重要性は、近年注目されている。たとえば、山縣有朋の非政治的人脈に焦点をあてた内藤一成氏⁽⁴⁾や、近代数寄者のネットワークを明らかにし、その実像や変質過程を明らかにした齋藤康彦氏⁽⁵⁾、そして昭武のフランス語書簡から日仏の人的ネットワークを見出そうという寺本敬子氏の研究⁽⁶⁾である。

このような先行研究に学びつつ、本稿では徳川昭武の日仏交流を支えた私的ネットワーク「多勃都会」について述べる。樋口雄彦氏は徳川宗家16代当主家達の評伝の中で、前身の学友会に触れている⁽⁷⁾ものの、「後々までも親しく交流し、思い出を語り合う仲間」という評価にとどまっている。そこで本稿ではまず、会の性格や会名の変遷、活動期間や、会員などの基本的事項を確認したい。その上で後編では、同会が昭武の日仏交流において果たしてきた役割や、私的ネットワーク研究の展望と可能性を提起したい。

1. 多勃都会とは

まず【表】⁽⁸⁾を参照しながら、多勃都会についての基本情報を見ていこう。

(1) 会の結成と会名の変遷

多勃都会の前身である「例月会」は明治16年（1883）2月3日に結成された。同日の昭武の日記から、「ロンドン・パリにて知り合った人々」と「毎月1回ずつ上野精養軒にて懇親会を開催する」旨が決まったのである。この会は当初名称がなく、明治17年（1884）7月19日より「例月会」と呼ばれてきたが、同18年（1885）12月5日に「学友会」と命名された。その後、明治24年（1891）12月14日からは「多勃都会」という名称で記されており、改称したと考えられる。

会名「多勃都会」の正確な読み方は不明である。結成会員の思い出の地⁽⁹⁾であるロンドンのタルボット・ロードにちなみ「タルボット」会と発音した可能性もあるが、現時点では音読みの「タボット」会としておきたい。

(2) 会員

明治26年（1893）4月13日に小石川後楽園で撮影した写真【写真1】がある。写真台紙には、左から河田熙^{かわだ ひろむ}（1835-1900）、徳川昭武^{とくがわあきたけ}（1853-1910）、竹村謹^{たけむらきん}吾^ご（1847-没年不明）、徳川家達^{とくがわいえさと}（1863-1940）、平山成信^{ひらやまなりのお}（1854-1929）、徳川^{とくがわ}篤敬^{あつよし}（1855-98）、三田^{さん}信^{だだし}（1851-1923）、末松謙澄^{すえまつけんちよう}（1855-1920）の名が記され、裏面に「多勃都会員写真 明治廿六年四月十三日於小石川後楽園撮影、但シ会員中徳川義禮・大越成徳・山本安三郎ノ三氏ハ不在ニヨリ参列セズ」とある。よって、欠席会員が徳川義禮^{とくがわよしあきら}（1863-1908）、大越成徳^{おおこしなりのり}（1856-1923）、山本安^{やまもとやす}三郎^{さぶろう}と判明する。そして、この時点での物故会員に大久保業^{おおく ぼなり}（1862-90）、長^{おさ}田^だ銈太郎^{けいたろう}（1849-89）がいた。

結成会員のフランスやロンドンでの交流の詳細については前稿に譲るとして、明治16年（1883）2月3日の「例月会」結成時点で日本に帰国していたのは、家達・昭武・篤敬・河田・竹村・山本・三田・大越・長田・平山である。昭武が没する明治43年（1910）までの彼らの動向を見ていこう。

まず、家達⁽¹⁰⁾は帰国した明治15年（1882）12月2日に麁香間祇候⁽¹¹⁾に任じられた。同職は明治天皇に定期的に拝謁できる名誉職で、主に上級の元公家や元大藩藩主が任じられていた。家達が数え20歳で同職となったのは、やは



【写真1】「多勃都会員写真」 1893.4.13中嶋待乳撮影 21×27 松戸市戸定歴史館所蔵

り徳川宗家16代当主という立場が重視されたのだろう。明治17年（1884）7月7日には華族令によって公爵を授けられた。公職では、明治31年（1898）年3月1日に華族会館第9代館長に就任し、同36年（1903）12月4日には貴族院議長に選任された。この他、明治40年（1907）5月27日に東京慈恵会会長に就任している。位階は、明治29年（1896）1月31日に正三位、34年（1901）12月20日に従二位、42年（1909）12月27日に正二位と昇進した。

昭武⁽¹²⁾は帰国後の明治14年（1881）12月5日、特旨を以て従三位に叙せられ、麝香間祇候を仰せつけられた。7日、昭武は麝香間祇候の辞退を願い出たが、明治天皇はこれを認めず、侍従山口正定にその旨を伝達させた⁽¹³⁾。同16年（1883）5月25日に隠居願を提出し、30日付で宮内省より隠居と篤敬の家督相続が許可された。その後位階は明治25年（1892）12月12日に正三位、同30年（1897）12月20日に従二位、同35年（1902）12月20日に正二位と昇り、栄典も明治22年（1889）12月27日に勲三等瑞宝章、同36年（1903）4月1日に勲二等瑞宝章となっている。明治43年（1910）7月1日、危篤に際して従一位に昇位し、勲一等瑞宝章を賜っている。

篤敬⁽¹³⁾は明治16年（1883）5月30日に家督を相続し、翌17年7月7日華族令により侯爵を授けられた。その後彼は外交官となり、明治20年（1887）6月15日に弁理公使、同年7月9日イタリア特命全権公使に任じられ、10月8日ローマへと出発した。3年間の駐在の後、明治23年（1890）12月9日ローマを出発し、翌24年（1891）1月25日帰国、4月13日付で公使の任を解かれた。この間に位

階は進み、明治20年（1887）9月24日に従四位、同23年（1890）6月21日に正四位、同年10月13日に従三位に叙せられている。帰国後も明治28年（1895）2月19日に華族総代として日清戦争戦地慰問に出発（5月13日帰国）したほか、翌29年3月8日に伏見宮貞愛親王の随員として、ロシア皇帝戴冠式に参列（8月12日帰国）するなど、国際的に活躍した。また、明治28年7月23日に式部次長に任じられ、官僚としても活動している。位階・栄典面では、明治28年6月29日に正三位、翌29年に勲四等瑞宝章と昇進し、明治31年（1898）7月12日の死に際しては従二位・勲二等瑞宝章が贈られた。

河田⁽¹⁴⁾は帰国後も徳川宗家家扶として勤務し、明治32年（1899）に退職するまで家達に仕えた。竹村も同じく家扶として徳川宗家に勤務している。

山本⁽¹⁵⁾は明治17年（1884）5月24日に日本銀行役員となり、同36年（1903）3月11日時点では函館支店長を務めている。その後、41年（1908）3月23日に京都へ転居、同45年（1912）4月13日には再び東京へ戻り、徳川宗家会計事務委託となったことが知られる。

三田⁽¹⁶⁾は明治15年（1882）に大蔵省に出仕した後、日本銀行創立委員に加わった。同17年（1884）には日本銀行文書局長補から秘書役に転じた。同30年（1897）、日本銀行監事となり、同年勲四等旭日小綬章に叙せられた。

大越⁽¹⁷⁾は明治16年（1883）4月、再び外務書記生としてイギリス在勤を命じられた。以後ほとんどを外国で過ごし、明治18年（1885）12月にリヨン駐在領事、同24年（1891）3月にロンドン駐在領事、同26年（1893）11月に上海駐在領事を経て、翌27年3月に総領事となった。なお、ロンドン駐在時代にロンドン日本協会創立に尽力した点は特筆される⁽¹⁸⁾。明治27年（1894）12月に帰国し、横浜税関長を務めたが、同32年（1899）3月にブラジル駐節第二代弁理公使に任じられ、7月4日ペトロポリスへ赴任した。同35年（1902）4月からはアルゼンチン駐節公使を兼務し、明治36年（1903）12月までその任にあった。任地では、日本ラテン協会創立に尽力している。外交官を引退したのは、明治37年（1904）である。

長田⁽¹⁹⁾は明治15年（1882）の帰国後、宮内権大書記官兼太政官権大書記官に任じられた。同年正六位となり、12月には勲五等に叙せられた。さらに、式部寮勤務をも兼ねている。明治19年（1886）内務省参事官となり、同21年（1888）には勲四等に昇進した。この頃より体調を崩しつつも職務に邁進した長田は、翌22年2月に奏任官一等となったが、同年4月1日病死した。死に際し、特旨により従五位に昇位している。昭武と長田は、多勃都会以外でも

交流を持っており、明治18年（1885）11月8日には岩倉具綱・香川敬三・山口正定とともに戸定邸を訪れている。この時は篤敬も交えて食事や庭園回遊を楽しんだ⁽²⁰⁾。また、昭武は長田が重病の床に就くと見舞いに訪れ⁽²¹⁾、その死後には墓参もしている⁽²²⁾。

平山⁽²³⁾は帰国後に大蔵省少書記官、元老院少書記官、権大書記官を経て、大蔵大臣秘書官となった。明治23年（1890）9月17日に大蔵大臣秘書官を非職となった後⁽²⁴⁾、翌24年5月28日、第一次松方内閣で総理大臣秘書官を、ついで6月16日に内閣書記官長をつとめた。松方総理退陣後の明治25年（1892）8月15日に枢密院書記官長となり、同27年1月29日まで在任している。また、同27年（1894）1月23日には勅選で貴族院議員に選出された。その後も明治29年（1896）12月3日に行政裁判所評定官、翌30年10月8日には第二次松方内閣書記官長となり、内閣が退陣する31年1月12日まで在職した。退陣後は大蔵省参与官となり、明治31年（1898）11月11日より翌32年9月28日まで日本銀行監理官の任にあった。さらに、大蔵省官房長を経て、明治41年（1908）11月7日に宮中顧問官・有栖川宮別当となっている。また、彼は美術行政・博覧会行政に関わり、女子教育の推進者としても知られる。

一方、イギリス留学を継続していた大久保はなかなか帰国せず、父一翁の心配や周囲のやきもきする様子が勝海舟の日記に記されている⁽²⁵⁾。帰国したのは明治19年（1886）7月3日である⁽²⁶⁾。父一翁が死去すると、明治21年8月14日に襲爵し、子爵となった。その後大久保は鉄道技師となっていたが、明治23年7月7日、出張先で橋脚工事中に溺死した⁽²⁷⁾。

2. 多勃都会の運営と開催

(1) 多勃都会の回数算出

先述のように、毎月1回ずつ開催と決まったものの、結果として毎月開かれたわけではない。実際に100回を迎えたのは明治27年2月だが、明治16年2月以降、仮に毎月開催されていた場合、133回に相当するはずである。ただし、明治18年12月の「学友会」命名時を第1回と数えた場合100回となり、回数は一致する。また、明治34年6月に150回を数えているが、27年2月以降、毎月開催であれば221回または189回のはずである。その後、明治42年10月に250回となっており、計算上、150～250回は毎月開催された形になる。そして、大正2年4月時点で283回を迎えているが、これも250回以降毎月開催されてい

れば、292回となっているはずである。会員は社会的地位や公職を持つ人物が多く、実際には毎月開催とはいかなかったようだ。

(2) 多勢都会の会場

会場は上野精養軒にとどまらず、多くの会場が用いられている。すなわち、グランドホテル（横浜居留地・1870年開業）、水神八百松、紅葉館（芝・1881年開業）、富士見軒（九段・1873年頃開業）、星ヶ岡茶寮（麹町・1884年開業）、三縁亭（芝公園）、小石川植物園、東京ホテル（有楽町・1887年開業）、愛宕館（芝・1889年開業）、帝国ホテル（1890年開業）、築地精養軒（1872年開業）、メトロポールホテル（築地・1907年帝国ホテルに買収）、華族会館（1898年より家達が館長）などのホテルや西洋料理店、料亭・貸席を用いている⁽²⁸⁾。

また、小梅邸（水戸徳川家本邸）や戸定邸（徳川昭武私邸）、平岡熙邸（駒形）、千駄ヶ谷邸（徳川宗家本邸）、末松謙澄邸、末松謙澄別邸（高輪）、浅草瓦町邸（尾張徳川家別邸）といった、会員や知人の邸宅を用いた開催もあった。さらに、梅見を兼ねて水戸公園・常磐公園・丹下牧を散策し、元日銀総裁の富田鐵之助別邸に宿泊するなど、地方開催事例もある。

(3) 会の実態—昭武幹事の場合

では、会の内容はどのようなものであったのだろうか。昭武が幹事を務めた回を例に見てみよう。明治19年（1886）10月24日は戸定邸を会場とし、午前中から17時まで「談話」をしている。このような長時間の開催では、同じく戸定邸で開かれた明治24年（1891）11月1日の会が挙げられる。この時も11時半から夕刻までとある。また、昼餐の回も散見される。明治20年10月23日は戸定邸を会場に、10時半より16時半まで開催し、「正午酒肴ヲ饗シ」たとある。同様に、戸定邸で10時半から16時まで開かれた明治23年10月12日の回では、「午餐」が行われている。もちろん、明治22年7月9日午後小梅邸で開催された「晚餐」や、翌23年4月10日15時に小梅邸内二峯庵での「晚餐」事例もある。

このように、開催時間もさまざまであり、晚餐のみにとどまらず、午餐も行われている。また、単なる食事会ではなく、「談話」がなされている点が注目される。そして、後述するように、「談話」にこそ会の本質があると考えられるのである。

(4) 新会員の加入

明治19年（1886）5月30日に末松謙澄が、翌20年11月13日には徳川義禮が加入した。義禮加入の際、家達は昭武へ書簡で意見を尋ね、昭武は異存なしとの回答を送っている⁽²⁹⁾。この経緯から、家達と昭武が会の中心メンバーである一方、主導権は家達にあったと思われる。以下、新会員の略歴を見ていこう。

^{すまつけんちょう}末松謙澄（1855-1920）は安政2年8月20日（1855年9月30日）に小倉藩領の大庄屋末松房澄4男として生まれた⁽³⁰⁾。明治11年（1878）1月、英国公使館一等書記見習の辞令を受け、英国・仏国の歴史編纂方法取調を命じられた。同年2月10日に横浜港を出港、4月1日にロンドンに到着している。明治12年にはケンブリッジ大学に入学し、文学・法学を学んだ。徳川家達は明治15年（1882）4月14日付の昭武宛英文書簡で末松の動向を伝えており、ロンドン滞在中に親交があったと考えられる⁽³¹⁾。帰国したのは学友会（多勃都会）加入の年である。同年内務省参事官となり、明治22年（1889）4月には伊藤博文長女生子と結婚した。翌23年7月より衆議院議員となり、同29年（1896）9月18日には第二次松方内閣の法制局長官をつとめた。これに先立ち、29年6月には貴族院議員となっている。その後は岳父伊藤博文と行動を共にするようになり、明治31年（1898）1月には第三次伊藤内閣の通信大臣、同33年10月には第四次伊藤内閣の内務大臣を歴任している。また、33年9月の立憲政友会結成に当たっては、創立委員として名を連ねている。さらに、日露戦争に際しては、明治37年（1904）3月から同39年2月の間、特使としてイギリスに駐在し、ヨーロッパへの宣伝活動を行っている。そして、帰国翌月（1906年3月）には枢密顧問官、翌40年9月には華族に列せられ、子爵を授けられた。さらに、同年12月には宮内省御用掛となっている。

彼は学者でもあり、明治21年（1888）6月文学博士となり、同40年（1907）4月には帝国学士院会員に推挙されている。

^{とくがわよしあきら}徳川義禮（1863-1908）は尾張徳川家18代当主・侯爵である⁽³²⁾。彼は文久3年9月19日（1863年10月31日）、高松藩主松平頼聰2男として誕生し、幼名を晨若といった。母は侍女である。明治13年（1880）9月27日、尾張徳川家14・17代当主慶勝の娘登代子と結婚し、家督を相続した。義禮は明治17年（1884）11月末から同20年（1887）の期間、イギリスに私費留学している。1885年から86年の間を除いて、ユニヴァーシティ・カレッジに在学し、キリスト教（ユニテリアン）に入信した。彼もまた、帰国まもなく学友会（多勃

都会)へ加入している。明治20年代には貴族院で会派・懇話会を組織するなど、英国流の政治改革を目指したのではと指摘されている。しかし、明治24年(1891)頃にはお家騒動が起り、同年4月13日から同25年7月15日までの『海舟日記』には関連記事が散見される。その後義禮は明治33年(1900)に名古屋大曾根邸へ転居し、同41年(1908)5月17日に死去した。

義禮は家達や昭武と留学期間が重ならず、他の会員とは異なる。彼の加入は、会が単なる留学仲間の会という位置づけから変化するきっかけとなったのである。

3. 会員にとっての多勃都会

では、各会員にとって、多勃都会はどのような存在であったのだろうか。家達と昭武の行動から見ていこう。

(1) 家達と多勃都会

先述のように、多勃都会は家達と昭武中心の2トップ体制であり、家達に主導権があったと考えられる。それは開催時も同様であり、家達の出席は不可欠であったようだ。明治18年(1885)8月9日午前10時、戸定邸へ平山成信・竹村謹吾・三田侖・山本安三郎が招かれた。彼らは「通常之料理」で昼食を饗され、午後6時に散会した⁽³³⁾。昭武は直近の7月31日・9月26日の会を例月会と記しているが、この日は例月会とは記していない。また、明治21年(1888)10月28日午前10時にも平山・竹村・三田・山本が招待され、昼食を饗され午後4時に散会している⁽³⁴⁾が、この日も学友会とは記されていない。直近の10月12日・12月5日は学友会と明記されているにもかかわらず、である。このような事例は他に、明治30年(1897)9月12日⁽³⁵⁾・同31年(1898)10月9日の2例が確認できる⁽³⁶⁾。

これらの事例に共通するのは、家達の不在である。直近の会に家達の参加が確認できるのは、明治30年9月15日のみであるが、中心メンバーの家達不在では多勃都会が開催できなかった可能性が考えられる。

事実、家達は多勃都会の開催に並々ならぬ強い希望を示している。それは、明治27年(1894)2月3日の第100回終了後、昭武に宛てた書簡⁽³⁷⁾に「同会ハ此後も幾久敷永続之様、希望居奉候」と記していることから窺える。家達は会の永続を希望し、昭武にも意見または同意を求めているのである。

(2) 昭武と多勃都会の“造形”

では、昭武にとって多勃都会はどのような存在であったのだろうか。明治31年（1898）4月26日の会で、昭武は自らの邸宅である戸定邸庭園内の窯で3月中に製作した戸定焼⁽³⁸⁾の磁印・朱肉入を会に寄付している。昭武自ら記した記録「戸定焼自製陶器贈遺控 一」によれば、それは「多勃都会之章白磁印」【写真2】「多勃都会之章青磁印」【写真3】「青磁肉入」であった⁽³⁹⁾。

また、昭武は明治34年（1901）6月30日の第100回の際にも、家達・末松・平山・三田へ戸定焼の「磁器菓子鉢 第百五十回多勃都会記念品」【写真4】を贈っている。この菓子鉢の賛は、昭武とも親しい水戸藩茶道師範をつとめた笠間政之（善兵衛、洗耳庵、有水）の手による。昭武は多勃都会にまつわる品を自邸内で製作し、会や会員への贈り物としている。家達とは異なった形であるが、会への深い思いが感じられる。



左【写真2】《多勃都会之章白磁印》 1898.3徳川昭武製作 松戸市戸定歴史館所蔵

中【写真3】《多勃都会之章青磁印》 1898.3徳川昭武製作 松戸市戸定歴史館所蔵

右【写真4】《菓子鉢》 1901.6 印・戸定、笠間政之の染筆 松戸市戸定歴史館所蔵

(3) 昭武の海外情報収集と多勃都会

では、そのような深い思いを抱いていた昭武は、多勃都会に何を求めているのだろうか。彼が腎盂乳頭状癌の摘出手術中に記した「順天堂入院日誌」、および死の床についてから記した「臥床日記」から読み解いていこう⁽⁴⁰⁾。

明治41年（1908）2月19日、入院中の昭武は家達から「英国絵入新聞」を送られた。翌3月21日にも家達から「英国絵入雑誌六冊」を借用している⁽⁴¹⁾。入院中であっても、海外事情に興味を示し、積極的に知識を摂取しようとい

う昭武の強い意志が読み取れる。

また、亡くなる前月の明治43年（1910）6月の日記からは、会員間の頻繁なやりとりが窺える。家達と平山は4月13日から10月24日まで欧米周遊を続けていた。一方昭武は、腎盂乳嘴状癌が肺に転移し死の床にあった。6月2日、ワシントンより会員宛に送られた家達の絵葉書を回覧し、末松謙澄へ転送した。家達へ返事を出した直後に、再度絵葉書が届き、4日に家達へ返信し、家達と行動を共にしている平山へも絵葉書を投函している⁽⁴²⁾。その後も6月5日・6日と絵葉書のやりとりが続く⁽⁴³⁾。

そして、昭武が送った書簡1通・絵葉書2枚を6月29日に入手し、平山成信が7月1日に投函した書簡⁽⁴⁴⁾には、彼が目にしたイギリスの最新事情が詳しく記されている。そこには、渡英中の家達の動向に始まり、博覧会の人手、天候、婦人選挙権要求運動について記され、帰国後に多勃都会に出席して、詳しく話したいと述べられている。昭武最晩年のこのやりとりからは、彼にとって多勃都会がいかなる存在であったのかが窺える。すなわち、海外事情を収集し、それについて語り合う場だったのである。それは、先に「談話」という言葉が用いられていた点とも通じる。社会的地位の高い会員たちが私的に集い、海外事情について語り合う場こそ、多勃都会であったのである。

しかし、昭武がこの書簡を読むことはなかった。書簡が最寄りの郵便局に到着したのは7月17日で、彼は既に7月3日に亡くなっていた。死を間近にしても、海外事情に興味を示す昭武の強い思いこそ、多勃都会が彼にとって非常に重要な私的ネットワークであった事実を物語っているのである。

次稿では、多勃都会が日仏・日英交流において果たした役割について述べていく。

註

- (1) 昭武についての先行研究は、高橋邦太郎『チョンマゲ大使海を行く』1967 人物往来社発行、須見裕『徳川昭武 万博殿様一代記』1984.12 中央公論社発行、『万博の殿様 徳川昭武』1985 水戸市立博物館編・発行、宮地正人監修・松戸市戸定歴史館編『徳川昭武幕末滞欧応日記』1997.3 山川出版社発行、宮永孝『プリンス昭武の欧州紀行 慶応三年パリ万博使節』2000.3 山川出版社発行などがある。また、昭武とその子孫である松戸徳川家伝来資料を所蔵する松戸市戸定歴史館でも、以下の研究成果が出版されている。松戸市戸定歴史館編・発行（以下全て同じ）『プリンス・トクガワの生涯 徳川昭武とその時代』1991、『文明開化のあけぼのを見た男たち』1993、『徳川昭武のヨーロッパ体験 解説シート』2010.10、『戸定論叢』1～4 1990.3～95.3、『プリンス・トクガワ』2012.12など。
- (2) 拙稿「徳川昭武の第二次留学と在仏日本人ネットワーク」（『仏蘭西学研究』44号 2018.6 日本仏学史学会発行pp.29-54所収）。
- (3) 安岡昭男「仏学会に関する基礎的研究Ⅰ・Ⅱ」（『法政大学文学部紀要』42～43号 1997.3～1998.3 法政大学文学部発行pp.83-112、pp.111-155所収）。
- (4) 内藤一成「もうひとつの山県人脈—山県有朋と高橋箒庵」（伊藤隆編『山県有朋と近代日本』2008.3 吉川弘文館発行pp.235-263所収）。
- (5) 齋藤康彦『近代数寄者のネットワーク 茶の湯を愛した実業家たち』2012.1 思文閣出版発行の他、同『根津青山 「鉄道王」 嘉一郎の茶の湯』2014.12 宮帯出版社発行、同「根津青山の茶友たち」（根津美術館学芸部編『根津青山の至宝—初代根津嘉一郎コレクションの軌跡』2015.9 根津美術館発行pp.143-148所収）。
- (6) 寺本敬子『徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡』上・下 2009.3・2009.12 一橋大学社会科学古典資料センター発行。同「初期日仏交流における私信—徳川昭武に宛てたレオポルド・ヴィレットの書簡の意義」（『仏蘭西学研究』37号 2011.7 日本仏学史学会発行pp.35-47所収）、同「シャルル・アントワヌ・マルクリーと日本」（『仏蘭西学研究』39号 2013.7 日本仏学史学会発行pp.41-52所収）、同「初期日仏交流における私信と人的ネットワーク—徳川昭武宛のフランス語書簡を中心に」（『跡見学園女子大学人文学フォーラム』13号 2015.3 跡見学園女子大学発行pp.53-73所収）。
- (7) 樋口雄彦『第十六代徳川家達』2012.10 祥伝社発行pp.52-57。
- (8) 典拠はいずれも松戸徳川家文書（松戸市戸定歴史館所蔵）。以下、文書番号のみ表記する。「備忘録」（1-1-3-1-10）、「戸定備忘録 第一号」（1-1-3-1-11）、「戸定備忘録 第二号」（1-1-3-1-12）、「戸定備忘録 第三号」（1-1-3-1-14）、「戸定備忘録 第四号」（1-1-3-1-16）「戸定備忘録 第五号」（1-1-3-1-17）、「順天堂入院日誌」（1-1-3-1-21）、「臥床日記」（1-1-3-1-22）、「露国行留守中扣」（1-1-4-1-4）、明治42年10月11日付徳川昭武宛徳川家達書簡（1-1-8-1-43）、および「戸定邸日誌」（2-1-2-3～33）。
- (9) 前掲註（2）。
- (10) 「故徳川家達公履歴」（斯文会編『斯文』22巻8号 1940.8 斯文会発行pp.4-13所収）および柳田直美編「徳川家達略年譜」（徳川記念財団編『家康・吉宗・

- 家達－転換期の徳川家』 2008.2 徳川記念財団発行pp.65-69所収)による。徳川家広「大日本帝国の中の徳川将軍家－十六代当主家達の履歴」(『家康・吉宗・家達－転換期の徳川家』 pp.65-67所収)、同「名門と国家」1-12回(『新潮45』 346-357号 2011.2-2012.1 新潮社発行)、前掲註(7)樋口著書。
- (11) 麿香間祇候については、大久保利謙『華族制の創出』 1993.6 吉川弘文館発行や、刑部芳則『明治国家の服制と華族』 2012.12 吉川弘文館発行に詳しい。しかし、昭武や家達が任じられた時期には既に役割が変質している。
 - (12) 『プリンス・トクガワ』 2012.12 松戸市戸定歴史館編・発行所収pp.77-79。
 - (13) 前掲註(8) および坂本辰之助(箕山)『水戸黄門』 1910.4 如山堂書店発行 pp.25-26。
 - (14) 『河田烈自叙伝』 1965.9 河田烈自叙伝刊行委員会編・発行pp.17-33。
 - (15) 「徳川慶喜邸日誌」(松戸市戸定歴史館所蔵)。
 - (16) 『箱館日記』 1997.10 山崎栄作編・発行pp.291-295所収「三田佑略年譜」。
 - (17) 志立鉄次郎編『大越成徳遺稿』 1926 財政経済時報社発行pp.1-14、井上琢智「大越成徳と自由貿易論」(『経済学論究』 57巻3号 2003.12 関西学院大学経済学部・経済学研究科発行pp.35-76所収)。
 - (18) ロンドン日本協会については、長岡祥三「日本協会の創立者アーサー・ディオシー」(『英学史研究』 29号 1996 日本英学史学会発行pp.1-12所収)による。
 - (19) 谷中霊園所在の墓碑銘による。
 - (20) 「戸定邸日誌」「戸定備忘録 第一号」明治18年11月8日条。
 - (21) 「戸定備忘録 第一号」明治22年2月14日条「同十四日 一、午后長田銑太郎氏大患ニ付尋問、(後略)」。
 - (22) 「戸定備忘録 第二号」明治22年6月5日条「明治廿二年六月五日 一、午前出京、江崎方ニテ撮影中墓地ニ至り故長田銑太郎氏之墓ニ詣、(後略)」。
 - (23) 『省斎年譜草案』 1908.10 平山成信編・発行のほか、『仏蘭西巴里府万国大博覧会報告書 第二篇 日本部』 1998.5 (原著1880) フジミ書房発行pp.1-5、今井祐子「ジャポニスムからみた平山成信」(『ジャポニスム研究』 27号 2007.11 ジャポニスム学会発行pp.40-53所収、後に加筆の上、『陶芸のジャポニスム』 2016.11 名古屋大学出版会発行pp.88-100所収)、福田須美子「平山成信と啓明会」(『相模女子大学紀要』 77号 2013 相模女子大学紀要等編集委員会編・発行pp.49-59所収)を参照した。
 - (24) 平山の官歴についてはまとまった文献がなく、官報を参照した。以下号数と発行年月日を列挙する。2168号(1890.9.18)、2372号(1891.5.29)、2741号(1892.8.15)、3169号(1894.1.24)、3174号(1894.1.31)、4031号(1896.12.4)、4283号(1897.10.9)、4612号(1899.11.12)、4875号(1899.9.29)、7612号(1908.11.9)。
 - (25) 「海舟日記」明治18年11月29日・同19年2月22日条。以下、「海舟日記」は『勝海舟全集』 21 1973.8 勁草書房発行所収。
 - (26) 「海舟日記」明治19年7月3日条。
 - (27) 「海舟日記」明治23年7月8日・12日条、「戸定備忘録 第二号」明治23年7月15日条、「徳川慶喜邸日誌」明治23年7月15日条(ともに松戸市戸定歴史館所蔵)。
- なお、大久保の名の読み方は『平成新修華族家系大成』では「なり」、大久保

- 一翁著『桜園集』（1892.12 勝安芳発行）では「なる」である。
- (28) 以下の文献を参照した。横浜開港資料館編『横浜ものはじめ考』 1988.3 横浜開港資料普及協会発行、大鹿武『幕末・明治のホテルと旅券』 1987.10 築地書館発行、桐浴邦夫『茶の湯空間の近代』 2018.1 思文閣出版発行、池野藤兵衛『料亭 東京芝・紅葉館—紅葉館を巡る人々』 1994.10 砂書房発行、岡田哲『明治洋食事始め』 2012.7 講談社発行（初出2000）、『愛宕山—江戸から東京へ』 2011.10 『実業家たちのおもてなし 渋沢栄一と帝国ホテル』 2014.3 渋沢史料館編・発行、港区立港郷土資料館編・発行、『華族会館の百年』 1975.12 霞会館編・発行、『会館百四十年の歩み』 2014.6 霞会館編・発行。
- (29) 「戸定備忘録 第一号」明治20年11月13日条「同十三日（中略）一、徳川義禮君学友会ニ加入之儀、千駄ヶ谷ヨリ御文通ニ付、異存無之旨御回答ニ及候事」。
- (30) 玉江彦太郎『青萍・末松謙澄の生涯』 1985.8 葦書房発行。同『若き日の末松謙澄 在英通信』 1992.1 海鳥社発行、秋山勇造「末松謙澄一生涯と業績」（『人文研究』130集 1997.9 神奈川大学人文学会発行pp.77-103所収）、松村正義「ヨーロッパにおける“広報担当大使”としての末松謙澄」（『軍事史学』40巻2・3合併号 2004.12 錦正社発行pp.125-140所収）、松谷美夫「作品紹介 末松謙澄献上『英国各種写真帖』」（『宮内庁三の丸尚蔵館年報・紀要』16号 2011.3 宮内庁三の丸尚蔵館発行pp.58-41所収）、堀口修・西川誠監修『末松子爵家所蔵文書』上・下巻 2003.9 ゆまに書房発行、および同書下巻pp.491-530所収の堀口修「末松謙澄について—『末松子爵家所蔵文書』の理解によせて」。
- (31) 1882年4月14日付徳川昭武宛徳川家達英文書簡（松戸徳川家文書1-1-8-2-45）。
- (32) 『徳川諸家系譜』3 1979.3 統群書類従完成会発行p.103.122、長沼秀明「徳川義禮の英国留学—ユニテリアン告白の意味」（『金鯢叢書』42輯 2015.3 徳川黎明会発行pp.83-93所収）、宮崎幸恵「徳川園の歴史的考察1」（『東海学園短期大学紀要』28～30 1993.9-1995.9 各pp.27-38、pp.63-74、pp.41-48所収）、千田稔『明治・大正・昭和 華族事件録』 2005.11（原著2002）新潮社発行pp.392-397、『平成新修華族家系大成』下 1996.11 霞会館発行p.166。
- (33) 「戸定邸日誌」明治18年8月9日条「同九日晴炎暑甚タシ 午前十時平山成信・竹村謹吾・三田信・山本安三郎参邸（前日ヨリ御約則之由）、通常之料理ニテ昼食ヲ饗ス、午后六時頃各々歛ニ入テ帰京セリ、（後略）」、「戸定備忘録 第一号」同日条「同九日 一、午前平山・竹村・三田・山本之五氏来荘、五時帰京之事」。
- (34) 「戸定邸日誌」明治21年10月28日条「同二十八日晴 兼テ御招ニ依リ平山成信・山本・三田・竹村参邸、昼食ヲ饗シ午后退邸セリ、（後略）」、「戸定備忘録 第一号」同日条「同廿八日（中略）一、午前十時半頃ヨリ平山・竹村・三田・山本之四氏来荘、午后四時帰京相成候事」。
- (35) 「戸定邸日誌」明治30年9月12日条「十二日晴（中略）此日午前、平山成信・竹村謹吾・三田哲[マ、信]ノ三氏参邸ス、」、「戸定備忘録 第四号」同日条「同十二日 一、午前平山成信・竹村謹吾・三田信ノ三氏来荘、午后二時帰京之事、（後略）」。
- (36) 「戸定邸日誌」明治31年10月9日条「同九日雨（中略）一、午前十時半、平山成

- 信・三田信・山本安三郎ノ三氏来邸ス、午飯ノ饗応アリ、午後三時帰京ス」、「戸定備忘録 第四号」同日条「同九日 一、午前平山成信・三田信・山本三郎之三氏来荘、午飯ヲ供ス、三時帰京之事、(後略)」。
- (37) 1894年2月5日付徳川昭武宛徳川家達書簡(松戸徳川家文書1-1-8-2-47)。「(封筒表) 徳川昭武様 貴答乞親展」 「(封筒裏) 徳川家達 二月五日夜」 「玉翰拝読候之、如仰余寒強候処、益御清祥奉大賀之、陳者如命一昨日ハ第百回多勃都会無滞相済御同慶之至御座候、同会ハ此後も幾久敷永続之様、希望居奉候、一昨日ハ御出席被下御処、万事不行屈恐縮之至御座候、御帰路監ニ御寒く有之事と御察仕候、御序ニ篤敬様へも宜敷御伝言奉願候、先者貴答早々早々、勿々、二月五日夜 家達 昭武様机下」。
- (38) 現時点での戸定焼を「徳川昭武が自ら作陶、あるいは戸定邸内で作陶・焼成した陶磁器」と定義する。拙稿「徳川昭武旧蔵《大理石獅子彫刻》『勝利者!!!』—華族の西洋美術コレクションが育んだ交流とその文化土壌」(『近代画説』25号 2016.12 明治美術学会編・発行pp.161-178所収) 参照。
- (39) 松戸徳川家文書1-1-6-3-3。
- (40) 松戸徳川家文書1-1-3-1-21、1-1-3-1-22。
- (41) 「順天堂入院日誌」明治41年2月19日・3月21日条「同十九日晴(中略) 家達公ヨリ御書状ニ添へ英国絵入新聞ヲ送ラル、直チニ御礼状ヲ出、(後略)」 「同廿一日(中略) 家達公ヨリ書状ヲ添へ、英国絵入雑誌六冊ヲ貸与セラル、(後略)」
- (42) 「臥床日記」明治43年6月2日・4日条「同二日雨 在京 一、家達公ヨリ「ワシントン」五月初附之絵葉書ヲ落手セリ、多勃都会員宛ニ付、末松子爵へ転送セリ、(中略) 一、家達公へ返事ノ絵葉書ヲ出ス、 一、家達公ヨリ華盛頓五月五日附之絵葉書ヲ再ビ受取ル」 「同四日曇 在京(中略) 一、家達公へ絵葉書之答事、平山成信氏同絵葉書ヲ出ス」。
- (43) 「臥床日記」明治43年(1910) 6月5日・6日条「同五日曇(中略) 一、家達公紐育ヨリ倫敦へ渡航出帆之日、則チ五月十一日巨船モレタニヤ(三万噸) 船上ニ於テ御認メ之同船之絵葉書一并ニ平山成信君倫敦五月十六日発之絵葉書一落手セリ」 「同六日曇 在京 一、家達公・平山君ニ返書絵葉書ヲ出ス、(後略)」。
- (44) 1910年7月1日付徳川昭武宛平山成信書簡(松戸徳川家文書1-1-8-2-101)。

【表】多勃都会記述一覧

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	16	2	3	1883				昭武?	上野精養軒	「備忘録」同三日 一、龍動・巴里両府ニテ知己ノ輩ヲ上野精養軒江招キ晩餐会振舞、以来毎月一回ツ、同処ニテ懇会相催ヘク旨決議致候事、
明治	17	4	19	1884	家達・前田利同・長田・平山・河田・竹村・三田・山本			昭武	小梅邸（水戸徳川家本邸）	「備忘録」同十九日 一、邸前ノ桜花満開ニ付、徳川家達・前田利同・長田建太郎・平山成信・河田熙・竹村謹吾・三田信・山本安三郎ノ諸君ヲ午後ヨリ招キ候事、但シ河田氏ハ用事ニテ四国江罷越候ニ付断リ、
明治	17	7	19	1884			例月会			「戸定備忘録 第一号」同十九日 一、例月会ニ付、早朝ヨリ出京、（後略）
明治	17	10	12	1884	家達・河田・長田・平山・竹村・三田・山本・萬敬		例月会	昭武	戸定邸	「戸定備忘録 第一号」同十二日 一、例月会当莊ニ於テ相催候ニ付、午前會員一同来莊、午後四時帰ル、
明治	18	2	28	1885			例月会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同廿八日（中略）一、午后出京、例月会ニ付、駒形平岡方江行ク、
明治	18	4	25	1885			例月会	家達	千駄ヶ谷邸（徳川宗家本邸）	「戸定備忘録 第一号」同廿五日（中略）午后例月会ノ参朝、帰途例月会ニテ千駄ヶ谷江行ク、
明治	18	5	30	1885			例月会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同三十日（中略）午后例月会ニテ平岡方エ行ク、
明治	18	7	31	1885			例月会			「戸定備忘録 第一号」同三十一日 一、例月会ニ付、出京候事、
明治	18	9	26	1885			例月会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同廿六日 一、例月会ニテ午後ヨリ平岡方江罷越候事、
明治	18	12	5	1885			学友会	萬敬か昭武	小梅邸	「戸定備忘録 第一号」十二月五日 一、毎々一回ツ、家達君初メニ催来候会ヲ以、学友会ト名称相定候事、一、本日者兄梅本邸ニテ同会相催候ニ付、午前より出京ス、
明治	19	2	6	1886			学友会		横浜グラントホテル	「戸定備忘録 第一号」同六日 一、午后学友会ニテ横浜江罷越、「グラントホテル」ニ晩食之上、九時汽車ニテ帰京致候事、
明治	19	4	11	1886			学友会	昭武	水神八百松	「戸定備忘録 第一号」同十一日 一、午后学友会員ヲ水神八百松江招候ニ付、同所江罷越候事、
明治	19	5	30	1886			学友会		芝紅葉館	「戸定備忘録 第一号」同卅日 一、本日学友会ニ付、午后出京、芝公園内紅葉館江罷越候事、一、本日より末松謙澄学友会江加入致候事、（後略）
明治	19	7	16	1886				謙澄	末松謙澄邸	「戸定備忘録 第一号」同十六日 一、午后末松謙澄氏方江晩餐ニ被招候事、
明治	19	10	24	1886	家達・河田・長田・平山・竹村・山本・三田・萬敬		学友会	昭武	戸定邸	「戸定備忘録 第一号」同廿四日 一、午前学友会員一同来莊、午后五時迄談話致候事、（後略）
明治	19	11	27	1886			学友会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同廿七日（中略）一、午后学友会ニテ平岡方江行ク、
明治	19	12	11	1886			学友会		横浜グラントホテル	「戸定備忘録 第一号」同十一日（中略）午后学友会ニテ横浜グラントホテル江行キ、同九時十五分汽車ニテ帰京致候事、
明治	20	2	12	1887			学友会		富士見軒	「戸定備忘録 第一号」同十二日（中略）午后学友会ニテ富士見町富士見軒江罷越候事、
明治	20	4	30	1887			学友会	昭武	小梅邸	「戸定備忘録 第一号」同三十日 一、学友会員ヲ本邸江招キ候ニ付、午後より出京ス、
明治	20	6	20	1887			学友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第一号」同廿日 一、学友会ニテ午後ヨリ星ヶ岡工罷越候事、
明治	20	7	1	1887			学友会		三縁亭	「戸定備忘録 第一号」七月一日（中略）午后学友会ニテ芝公園内三縁亭エ行ク、
明治	20	10	2	1887			学友会			「戸定備忘録 第一号」十月二日 一、午后出京、学友会員之招待ニテ、萬敬同伴芝紅葉館江行ク、
明治	20	10	23	1887	家達・平山・竹村・三田・山本				戸定邸	「戸定備忘録 第一号」同廿三日 一、午前家達公・平山・竹村・三田・山本五君来莊、午后四時半帰京相成候事、／「戸定邸日誌」同二十三日暮 午前十時三十分、千駄ヶ谷様御始メ平山成信・竹村謹吾・山中・三田信御招ニ依リ参邸、正午酒肴ヲ饗シ午後四時三十分何レモ帰京セラレタリ、（後略）
明治	20	11	27	1887			学友会		小石川植物園	「戸定備忘録 第一号」同廿七日 一、午后三時ヨリ学友会ニテ小石川植物園ニ行ク、

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	20	12	17	1887			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第一号」同十七日（中略）午后星ヶ岡茶寮江学会会ニ付、出向ス、
明治	21	1	21	1888			校友会		東京ホテル	「戸定備忘録 第一号」同廿一日（中略）午后ヨリ学会会ニ付、東京ホテルヘ行ク、
明治	21	4	14	1888	家達・平山・河田・三田・山本		校友会	昭武	小梅邸内二峯庵	「戸定備忘録 第一号」同十四日 一、本邸ニテ学会会相催候ニ付、出京ス、 一、午后三時ヨリ二峯庵ニ於テヒテ学会会相催シ、家達公・平山・河田・三田・山本之四氏来会、其他ハ断リ、（後略）
明治	21	5	17	1888			校友会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同十七日 一、午后ヨリ学会会ニテ飯橋脇平岡邸ヘ行ク、
明治	21	6	20	1888			校友会		富士見軒	「戸定備忘録 第一号」同廿日（中略）午后学会会ニテ富士見軒ヘ行ク、（後略）
明治	21	10	12	1888			校友会		三縁亭	「戸定備忘録 第一号」同十二日 一、午後一時帰京、同四時ヨリ学会会ニテ芝三縁亭ヘ行ク、
明治	21	12	5	1888			校友会		三縁亭	「戸定備忘録 第一号」同五日（中略）一、午后四時ヨリ学会会ニテ芝三縁亭ヘ行ク、
明治	22	2	13	1889			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第一号」同十三日 一、午後（中略）夫ヨリ星ヶ岡茶寮ニテ催セル学会会へ出席ス、
明治	22	3	13	1889			校友会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第一号」同十三日（中略）午后飯橋平岡邸ニ於テ催レル学会会ニ列ス、
明治	22	6	12	1889			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同十二日 一、午後出京、学会会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、
明治	22	6	18	1889			校友会	末松	末松謙澄邸	「戸定備忘録 第二号」同十八日（中略）一、午后五時頃ヨリ学会会員一同、芝山内なる末松謙澄氏之邸へ被招行キ、十二時過帰宅ス、
明治	22	7	9	1889			校友会	昭武		「戸定備忘録 第二号」同九日（中略）午后学会会員一同ヲ晚餐ニ招待ス、
明治	22	9	11	1889			校友会	家達	千駄ヶ谷邸	「戸定備忘録 第二号」同十一日 一、学会会ニテ午後ヨリ千駄ヶ谷邸ヘ行キ、九時帰宅、（後略）
明治	22	11	12	1889			校友会		三縁亭	「戸定備忘録 第二号」同十二日 一、午后学会会ニテ芝三縁亭ヘ行ク、
明治	22	12	18	1889			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同十八日（中略）一、学会会ニテ午後四時ヨリ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、
明治	23	1	18	1890			校友会		平岡熙邸	「戸定備忘録 第二号」同十八日（中略）午后学会会ニテ飯橋平岡方ヘ行ク、
明治	23	2	19	1890			校友会		愛宕館	「戸定備忘録 第二号」同十九日 一、午後出京、午後四時ヨリ学会会ニテ愛宕館ヘ行ク、
明治	23	4	10	1890	家達・義禮・末松・河田・平山・竹村		校友会	昭武	小梅邸内二峯庵	「戸定備忘録 第二号」同十日（中略）一、午後三時ヨリ学会会員ヲ招キ、二峯庵ニ於テ晚餐ヲ供ス、来会ノ人名ハ左ノ如シ、家達君・義禮君・謙澄君・照君・成信君・謹吾君ナリ、
明治	23	5	14	1890			校友会		上野精養軒	「戸定備忘録 第二号」同十四日 一、午后学会会ニテ上野精養軒ヘ行、晚餐ヲ為ス、
明治	23	6	25	1890			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同廿五日（中略）学会会ニテ午後四時ヨリ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、
明治	23	9	17	1890			校友会		三縁亭	「戸定備忘録 第二号」同十七日（中略）一、午后学会会ニテ芝公園内三縁亭ヘ行ク、
明治	23	10	12	1890	家達・平山・河田・竹村・三田		校友会	昭武	戸定邸	「戸定備忘録 第二号」同十二日 一、午前十時半頃学会会員中、家達公・平山成信君・河田照君・竹村謹吾君・三田信君来莊、午餐ヲ振舞、午後四時頃帰京相成候事、／「戸定邸日誌」同十二日 晴 学会会員 千駄ヶ谷様御始メ平山成信・河田照・竹村謹吾・三田信御招ニ依リ御来邸、午後四時御帰邸被遊タリ、（後略）
明治	23	10	16	1890			校友会		富士見軒	「戸定備忘録 第二号」同十六日（中略）午后同伴出京、四時頃ヨリ学会会ニテ富士見軒ヘ行ク、
明治	23	12	17	1890			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同十七日（中略）一、午後五時学会会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、
明治	24	3	16	1891			校友会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同十六日（中略）一、本日星ヶ岡ニ於テ、例之学会会之催有之趣、所勞ニ付不参、（後略）
明治	24	7	3	1891			校友会		上野精養軒	「戸定備忘録 第二号」七月三日（中略）午後四時ヨリ学会会ニテ上野精養軒ヘ行ク、（後略）

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	24	10	7	1891			学友会		富士見軒	「戸定備忘録 第二号」同七日 一、午後出京、学友会ニテ富士見軒へ行ク、（後略）
明治	24	11	1	1891	家達・河田・平山・竹村・三田・篤敬		学友会	昭武	戸定邸	「戸定備忘録 第二号」十一月一日 一、午前例年之通り家達君初メ学友会員来赴、夕刻帰京相成候事、篤敬モ来荘セリ、／「戸定邸日誌」同十一月一日 御招待ニ依リ 午前十一時三十分干駄ヶ谷様御来臨被遊、学友会会員河田順・平山成信・竹村謙吾・三田浩[信]の誤記]参邸、猶 小梅様ニテ御来邸被為在タリ、何レモ夕刻御帰邸被遊タリ、（後略）
明治	24	12	14	1891			多勢都会		三縁亭	「戸定備忘録 第二号」同十四日（中略） 午后染井墓地へ行キ、夫ヨリ多勢都会ニテ芝三縁亭へ行ク、
明治	25	1	29	1892			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同廿九日（中略） 一、夕刻多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮へ行ク、
明治	25	2	18	1892			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第二号」同十八日（中略） 夫ヨリ多勢都会ニテ午后四時ヨリ上野精養軒へ行ク、
明治	25	3	12	1892	家達・末松・河田・三田・竹村		多勢都会	昭武	水戸常磐公園	「戸定備忘録 第二号」同十二日 一、観梅ヲ兼、茨城表ニテ多勢都会之催ニ付、上野苑一番汽車ニテ出発ス、来会者ハ徳川家建公・末松謙澄・河田熙・三田浩・竹村謙吾之五氏、何レモ兼テ打合せ之上、同列車ニテ発府、幹事ハ篤敬ナリ、水戸・常盤岡公園、丹下牧斎散歩之上、富田氏別荘へ投宿ス、 同十三日 一、末松氏ヲ除キ其他ハ一同午前十時発汽車ニテ発水、帰京ス、末松氏ハ西山大洗辺遊覧之上帰京之都合ナリ、
明治	25	5	3	1892			多勢都会	末松	愛宕館	「戸定備忘録 第二号」五月三日（中略） 夫ヨリ芝愛宕館へ行キ、末松氏ヨリ多勢都会員一同晚餐之費応相受、十一時頃帰宅ス、
明治	25	5	15	1892		中止	多勢都会	昭武	戸定邸→中止	「戸定備忘録 第二号」同十五日 一、本日当荘ニ於多勢都会相催ノ筈ニ候処、雨天ニ付停会ス、／「戸定邸日誌」同十五日雨 一、学友会員御招キ之処、雨天之爲停会トナル、（後略）
明治	25	5	26	1892	家達・義禮・平山・末松・河田・竹村・三田・篤敬		多勢都会	昭武	富士見軒	「戸定備忘録 第二号」同廿六日（中略） 一、午后五時ヨリ富士見軒ニ於、拙者亭番ニテ、多勢都会相催候事、家達君・義禮君・平山・末松・河田・竹村・三田之諸氏及ヒ篤敬来会之事、
明治	25	6	17	1892			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同十七日（中略） 一、多勢都会ニテ午後五時ヨリ星ヶ岡茶寮へ行ク、（後略）
明治	25	9	19	1892			多勢都会		三縁亭	「戸定備忘録 第二号」同十九日（中略） 午后四時半ヨリ多勢都会ニテ芝三縁亭へ行ク、
明治	25	11	29	1892			多勢都会		富士見軒	「戸定備忘録 第二号」同廿九日 一、多勢都会ニテ午後四時半ヨリ富士見軒へ行ク、
明治	25	12	20	1892			多勢都会	家達	帝国ホテル	「戸定備忘録 第二号」同廿日 一、午后乗馬ニテ出京、夕刻家達君之催ニかゝる多勢都会ニテ、帝国ホテルニ行キ、晚餐之費応ヲ受、
明治	26	3	30	1893			多勢都会	昭武→篤敬		「戸定備忘録 第二号」同三十日（中略） 一、本日ハ拙者幹事多勢都会相催候筈之処、兩三日より背骨上へ腫物出来、乗車相成難ニ付、篤敬へ代理相托候事、
明治	26	4	13	1893	家達・篤敬・平山・竹村・三田・河田・末松		多勢都会		小石川後楽園	「戸定備忘録 第二号」同十三日（中略） 一、午后出京多勢都会ニテ小石川後楽園へ行キ、八時頃帰宅ス、本日園内ニ於テ会員写真ヲ撮影ス、（後略）
明治	26	6	29	1893			多勢都会		高輪東町末松謙澄別邸	「戸定備忘録 第二号」同廿九日（中略） 一、午后四時より末松氏幹事ニテ芝区高輪東町なる同別邸ニ於テ催さるゝ多勢都会へ臨ミ十一時頃帰宅ス、
明治	26	9	19	1893			多勢都会	義禮	瓦町邸（尾張徳川家別邸）	「戸定備忘録 第二号」同十九日（中略） 一、午后四時半より浅草瓦町徳川義禮君別邸ニテ被催サレタル多勢都会へ列席ス、但シ義禮君来る廿四日発名古屋表へ移住ニ付、告別ヲ兼ねサレタルナリ、夜九時半頃帰宅ス、／「戸定邸日誌」同十九日晴 一、上公御腕車ニテ午前七時比御出京、尾州公名古屋御移転ニ付、送別会ノ由、本日梅邸へ御一泊被遊タリ、（後略）
明治	26	10	30	1893			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同卅日（中略） 一、午后伊達・土屋・南部ノ三家ヲ訪、夫より星ヶ岡ニテ催サレタル多勢都会列席臨ス、／「戸定邸日誌」同卅日晴 一、上公午前七時御出京被遊候、本日ハ多勢都会御臨席ノ御都合之由、（後略）

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	26	11	29	1893			多勃都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第二号」同廿九日（中略）午後四時半より多勃都会ニテ上野精養軒へ行ク、／「戸定邸日誌」同廿九日晴 一、上公多勃都会御臨席ニ付、本日午前九時御出京被遊候、（後略）
明治	26	12	21	1893			多勃都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第二号」同廿一日（中略）午後五時より多勃都会ニテ星ヶ岡茶寮へ行ク、（後略）／「戸定邸日誌」同廿一日晴 一、上公午前七時半御出京、本日ハ多勃都会へ御臨席被遊トテ御出京ナリ、（後略）
明治	27	1	25	1894			多勃都会		富士見軒	「戸定備忘録 第三号」同廿五日 一、午後出京、多勃都会ニテ五時より富士見町富士見軒へ行ク、／「戸定邸日誌」廿五日雨雪交降終日不止（中略）一、上公午後ヨリ多勃都会御臨席ニテ御出京、（後略）
明治	27	2	3	1894		100回	多勃都会	家達	星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第三号」二月三日 一、午後出京、同四時多勃都会ニテ星ヶ岡茶寮へ行ク、本日ハ同会開設以来第百会相当ニ付、家達公ヨリ響應ヲ受ク、／「戸定邸日誌」同三日節分晴 一、上公午後十二時過ヨリ御出京、多勃都会へ御臨席ニ付、本日ハ梅邸へ御滞留被遊候、（後略）
明治	27	3	21	1894			多勃都会		築地静養軒	「戸定備忘録 第三号」同廿一日 一、午後出京、五時多勃都会ニテ築地采女町静養軒へ行ク、／「戸定邸日誌」同廿一日曇 一、上公午時より多勃都会、且明廿二日御参明日ニ付、被兼御出京被遊候、（後略）
明治	27	4	21	1894			多勃都会	篤敬	小梅邸	「戸定備忘録 第三号」同廿一日 一、午前武定同伴出京、本日席敬幹事ニテ多勃都会ヲ小梅本邸ニ催シ、治庖烹之料理ヲ振舞、／「戸定邸日誌」同廿一日晴 一、上公午前七時より武定様御同車ニテ御出京、本日ハ梅邸ニテ多勃都会御定番ニ付、御臨席ノ為御出京被遊候、
明治	27	5	29	1894			多勃都会	三田	星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第三号」同廿九日（中略）午後五時より多勃都会ニテ星ヶ岡茶寮へ行キ、九時帰宅、本日ハ三田氏幹事、／「戸定邸日誌」同廿九日晴 一、上公多勃都会御臨席ニ付、本日午前七時より武定様御同車ニテ御出京被遊タリ、
明治	27	9	25	1894			多勃都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第三号」同廿五日（中略）夕刻多勃都会ニテ星ヶ岡茶へ行ク、
明治	27	12	12	1894			多勃都会	末松	上野精養軒	「戸定備忘録 第三号」同十二日 一、午後（中略）夫ヨリ上野公園内精養軒ニ於テ末松氏ノ催ニカ、ル多勃都会へ臨ミ、八時頃帰宅ス、
明治	28	2	26	1895			多勃都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第三号」同廿六日 一、午後出京、多勃都会ニテ四時より星ヶ岡茶寮へ行ク、
明治	28	4	11	1895			多勃都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第三号」同十一日（中略）一、午後五時より多勃都会ニテ上野精養軒へ行ク、／「戸定邸日誌」同廿一日晴 一、上公午前七時過御出京、本日多勃都会御参臨ノ由、（後略）
明治	28	7	3	1895			多勃都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第三号」七月三日（中略）午後多勃都会ニテ上野精養軒へ行ク、
明治	28	7	27	1895			多勃都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第三号」同廿七日（中略）一、午後五時より多勃都会ニテ星ヶ岡茶寮へ行ク、
明治	28	9	16	1895			多勃都会	昭武	上野精養軒	「戸定備忘録 第三号」同十六日 一、午前出京午後五時より多勃都会ニテ上野精養軒へ行ク、幹事順番拙者ナリ
明治	28	11	25	1895			多勃都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第三号」同廿五日（中略）一、午後四時より多勃都会ニテ上野精養軒へ行ク、／「戸定邸日誌」同廿四日晴 一、上公午後ヨリ御出京、明日多勃都会へ御臨席ノ御都合ノ由、（後略）
明治	29	3	20	1896			多勃都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同廿日（中略）猶又多勃都会ニテ四時ヨリ星ヶ岡茶寮へ行キ、八時三十分帰宅ス、

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	29	4	7	1896	家達・末松・平山・河田・三田・竹村		多勢都会	萬敬一 昭武	上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同七日 一、午后四時ヨリ拙者幹事ニテ、上野精養[77]ニテ多勢都会ヲ催、来会者ハ徳川公爵・末松・平山・河田・三田・竹村ノ諸氏ナリ、／「露国留守中扣」四月七日 本月ハ萬敬多勢都会幹事順番之處不在ニ付拙者代理本日午后四時ヨリ上野精養軒ニ於テ開会ス、来会者ハ千駄ヶ谷公・末松・平山・河田・竹村・三田ナリ、(後略)／「戸定邸日誌」同五日 晴 (中略) 一、上公ニハ午前七時上京シ被遊タリ、此日多勢都会ノ完事ニ付、会員ヲ上野西洋軒[77、精養軒]ニ御招キノ事、(後略)
明治	29	6	15	1896			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」十五日 一、夕刻多勢都会ニテ精養軒ヘ行ク、(後略)
明治	29	7	15	1896	家達・末松・平山・河田・竹村		多勢都会	昭武	星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同十五日 一、午前出京之事、同十時参内、奉伺 天機、午后拙者幹事ニテ星ヶ岡茶寮ニ於テ多勢都会ヲ催ス、千駄ヶ谷様・末松・平山・河田・竹村来会ス、
明治	29	9	15	1896			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同十五日 (中略) 午后五時ヨリ多勢都会ニテ上野精養軒ヘ行ク、(後略)
明治	29	10	21	1896			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同廿一日 一、午后出京、四時ヨリ多勢都会ニテ上野精養軒ヘ行ク、(後略)／「戸定邸日誌」同廿一日 晴 (中略) 一、上公ニハ十二時、多勢都会御出席ノ為メ御出京被遊タリ、(後略)
明治	29	11	30	1896			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同三十日 一、午后出京、多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、／「戸定邸日誌」同三十日 降雨 (中略) 一、上公ニハ午後二時多勢都会御出席ノ為メ御出京被遊タリ、(後略)
明治	29	12	25	1896			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同廿五日 (中略) 午后四時ヨリ多勢都会ニテ上野精養軒[ヘク]行キ、七時頃帰宅ス、／「戸定邸日誌」同廿五日 晴 (中略) 一、上公ニハ午前十一時多勢都会御出席之為メ御出京被遊タリ、(後略)
明治	30	5	26	1897			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同廿六日 (中略) 午后多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行、八時頃帰宅之事、
明治	30	7	28	1897			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同廿八日 (中略) 午后五時ヨリ多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行キ、帰途萬敬同伴銀座辺参歩、十時過帰宅之事、
明治	30	9	15	1897	家達・末松・河田・平山・竹村・三田・萬敬		多勢都会	昭武	上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同十五日 一、正午出京、五時三十分ヨリ拙者幹事ニテ多勢都会ヲ上野精養軒ニ催ス、来会者ハ千駄ヶ谷様・末松・河田・平山・竹村・三田之六氏并ニ萬敬なり、
明治	30	11	30	1897			多勢都会	昭武	小梅邸	「戸定備忘録 第四号」同三十日 一、午后二時出京、夕刻ヨリ西洋風家屋ニ於テ多勢都会之催シアリ、会員一同来会ス、
明治	30	12	15	1897			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同十五日 (中略) 午后小川町東明館ヘ買物ニ行キ、四時三十分多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、
明治	31	2	9	1898			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同九日 一、午后多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行キ、九時頃帰宅之事、
明治	31	3	8	1898			多勢都会	末松	末松謙澄邸	「戸定備忘録 第四号」同八日 (中略) 夕刻ヨリ末松謙澄氏之催シなる多勢都会ニテ、芝公園内氏邸ヘ行、十時半頃帰宅之事、
明治	31	4	26	1898			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同廿六日 一、午后二時多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行キ、十時帰宅、
明治	31	5	30	1898			多勢都会	昭武	上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同三十日 (中略) 午后五時三十分ヨリ多勢都会ニテ精養軒ニ於テ晚餐之上、九時頃帰宅ス、但シ本日之会ハ拙者幹事番之事、
明治	31	6	28	1898			多勢都会		星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第四号」同廿八日 (中略) 午后五時ヨリ多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行、
明治	31	10	17	1898			多勢都会		上野精養軒	「戸定備忘録 第四号」同十七日 一、午后三時列車ニテ子供同伴出京、多勢都会之為メ上野精養軒ヘ行ク、(後略)
明治	31	11	11	1898			多勢都会	家達	星ヶ岡茶寮	「戸定備忘録 第五号」同十一日 一、午后出京、多勢都会ニテ星ヶ岡茶寮ヘ行ク、幹事千駄ヶ谷、(後略)
明治	31	12	13	1898			多勢都会	山本	築地メトロ ボールホテル	「戸定備忘録 第五号」同十三日 一、午后五時ヨリ多勢都会ニテ築地居留地「メトロボールホテル」ヘ行キ、晚餐ヲ為ス、幹事山本安三郎ナリ、

元号	年	月	日	西暦	参加者（昭武以外）	回数	会の記載	幹事	会場	史料
明治	34	6	30	1901	家達・末松・平山・三田	150回	多勃都会	昭武	戸定邸	「戸定邸日誌」同三十日雨（中略）一、多勃都会御催ニ付、徳川家達様・末松謙澄・平山成信・三田信、家達様御供ニ久貝某御来邸被遊、午後四時御散会御帰京被遊タリ、（後略）
明治	38	11	15	1905	家達・平山・三田	203回	多勃都会	昭武	戸定邸	「戸定邸日誌」同十五日雨（中略）一、多勃都会御開催ニ付、千駄ヶ谷様並ニ平山成信・三田信来邸、午後三時半御帰京被成タリ、（後略）
明治	41	1	20	1908		229回	多勃都会			「戸定邸日誌」同廿日曇（中略）一、上公ニハ午前八時十三分多勃都会御出席之為メ御上京被遊タリ、
明治	41	2		1908		230回	多勃都会	家達?		「順天堂入院日誌」同九日晴（中略）本日膀胱鏡検査之結果、拱腰線ノ方ハ追々快方ニ向ヒタレトモ、右方腎臓ヨリ輕微ノ出血ヲ認トノ事ナリ、家達君へ出状、本月ノ多勃都会ニハ欠席ノ旨申送、（後略）
明治	41	9	16	1908		237回	多勃都会			「戸定邸日誌」同十六日晴（中略）一、上公ニハ午後二時五十分多勃都会御出席之處、御本邸へ御上京被遊タリ、
明治	42	1	20	1909		241回	多勃都会			「戸定邸日誌」同廿日曇（中略）一、上公ニハ午前八時十三分多勃都会御出席之為メ御上京被遊タリ、（後略）
明治	42	10	20	1909		250回	多勃都会	昭武	華族会館	明治42年10月11日付徳川昭武宛徳川家達書簡 拝読、来廿日第二百五十回多勃都会御催ニ付、御通知ニ接シ、委曲拝承、必此〔華族会館写真〕江出席可仕、此段御答申上候也、 十月十一日 家達

[研究ノート]

詩人教授の系譜 —— 少しばかり個人的に ——

木 村 哲 也

はじめに

入沢康夫が2018年10月に逝去した。1931年生まれ。

明大の仏文科（以下、「仏文」と略す）の教授であったが、詩人でもあり、また宮沢賢治の研究家としても有名であった。

詩人教授という名にふさわしい人物であった。

さて、詩人教授は、日本において少なからず存在していた。

しかも、ひいき目でなく仏文に多かった。教授にならなかった、一般の卒業生まで含めればなお多いように思える。

在籍校でなかったが、入沢の授業を複数年受講した。同じころに、飯島耕一（1930～2013）、安藤元雄（1934～）も受講した。渋谷孝輔（1930～1998）をなぜか受講しなかったのは、同窓の大先輩でもあり、今にしてみれば残念であるが、非常勤出講の窪田般弥（1926～2003）も受講した。

教え子らによる、明大詩人会というのも一時期だが存在した。

本稿では、それらの人々について概括的に見てゆく。

1 仏文以外の詩人教授たち

寡聞にして、仏文以外の詩人は、英文の日夏耿之介（1890～1971）、石原武（1930～2018）、相沢史郎（1931～）、独文の細見和之（1962～）、露文の工藤正広（1943～）、中文の秋吉久紀夫（1930～）、国文の原子修（1932～）、橋浦洋志（生年不明、存命中）、國中治（1960～）などぐらいかと思える。

2 明治大学

ところが仏文には、前述のように一時期に明大だけで4人も詩人教授がいた。

なお申せば、大岡信（1931～2017）もそのころ明大教授であった。ただ仏文の授業は担当していなかった。しかし、詩の絵本で『プレヴェール詩集 やさしい鳥』（偕成社、1977）といったフランス語の翻訳も多数あるので、ここでふれておく。

また、飯島や安藤は文学部所属ではなく、法学部や政経学部所属で、文学部に出講していたこともふれておきたい。

1) 飯島耕一

飯島耕一は、仏文関係でもいろいろに関心があったが、小生の受講の前ごろに出た『アポリネール全集』（全4巻、青土社、1979）の訳者の一人であった。窪田般弥も入沢康夫もかかわっていた。全集の名ながら、実態は選集で、訳注もないあたりは、平成の筑摩書房の全集とは、趣を異にする。なお申せば、大学院も留学も経験していなかった（同じ世代で、大学院に行き、船で1か月かかってフランスに留学していた人たちもいたわけであるが）。

あえて余談ながら、生前にうかがったおもしろい話を語り継いでおく。アポリネール（1880～1918）をたくさん訳した堀口大學（1892～1981）は、なぜかマドレーヌという恋人への書簡集の訳出紹介を、あまり詳しくないと自称していた河上徹太郎に願い出て、『アポリネールの恋文』（垂水書房、1965）が出た。アポリネールを振ったローランサン（1883～1956）と直接に会っていることは知られているが、恋愛関係にあったかのように、堀口はローランサンの話題には赤ら顔になったという。憶測にすぎず、今となっては検証できないが、詩人教授らしい語りが印象に残っている。

さて、詩人としては、第1回現代詩人賞受賞の『夜を夢想する小太陽の独言』（思潮社、1982）が、受講中の刊行で、授賞式にも出席したが、個人的には『宮古』（青土社、1979）に思い入れがある。この詩集を読み、返還前に行った沖縄本島を思い出した。宮古島も後に訪問し、出身の詩人と親しくなったことが、運命を変えるほどにもなった。

また、日本定型詩協会を設立した。散文ふうの詩を書いていたのに、違和感はあったが、雑誌『中庭』は20号以上出た。同人誌をやめていた飯島にしては異例であった。小生も10号から14号まで執筆し、最後の号は編集長でも

あった。その後、日本語での脚韻は、個人誌『調べ』や、ブログ「日本語脚韻」で継続している。

授業で教わったシュベルヴィエル（1884～1960）は、むしろ後述の安藤元雄のほうが入れ込んでいる感じだが、いい経験になった。他にはミショー（1899～1984）の受講も有意義であった。

2) 窪田般弥

窪田般弥は早大の教授であり、早大ではアポリネールなどを受講した。

アポリネールの短編小説集『異端教祖株式会社』（晶文社、1972）なども訳しているし、前述の『アポリネール全集』も多くにかかわっている。

この全集の訳者で不思議なのは、安藤元雄はフランス語版の1966年の4巻本の付録つき全集を所蔵しているのを確認しているが、なぜか全くかかわっていない。そして、ライン伝説ふうの詩などを入沢康夫が訳していることである。

しかし、安藤は、飯島や窪田の他、詩人教授でない平田文也を加えて、小沢書店から『堀口大學全集』（全13巻、1981～2002）を出している。仏文系の詩人教授には、こういった国文系の仕事もしていたことに注目しておきたい。

さて窪田には、詩人としての受賞歴はないが、『円環話法』（青土社、1979）などの詩集がある。

また、思潮社の現代詩文庫には、明大系の詩人教授を始め、多くの詩人が収められている。

3) 入沢康夫

明大赴任初期と言えた入沢康夫のネルヴァル（1808～1855）を1982年度と翌年度に受講したが、詩学社の雑誌『詩学』に連載されていたものであり、その後、花神社から『ネルヴァル覚書』（1984）として刊行された。

『ネルヴァル全集』（全6巻、1997～2001）では、1975年からの刊行が、後の会社更生法につながる社業不振のため、3巻になってしまった全集の留飲を晴らすものであったことが感じられる。

詩の業績は、『入沢康夫詩集成1951～1994』（全2巻、青土社、1998）までにまとめられる。詩壇の新人賞であるH氏賞（1966）、高見順賞（1983）、現代詩花椿賞（1994）、萩原朔太郎賞（2002）などを受賞している。

また、後出の天沢退二郎とともに、『【新】校本宮沢賢治全集』（全17巻、筑摩書房、1995～2009）に至る編集作業は、時おり担当した国文の授業でも披露されていた。

また、大学のポストを得るまでは、同社での勤務があったはずで、出版社経験は、保健同人社の飯島耕一も同じであるし、後出の安藤元雄は時事通信社の勤務であった。

このあたりは、非常勤講師を経験する現在とは違った感じである。

4) 安藤元雄

安藤元雄は、最近でも現代詩人会の会長も務めた後、『立原道造全集』（全4巻、筑摩書房、2006～2010）の編集に携わり、『『悪の華』を読む』（水声文庫、2018）も刊行している。

詩集『水の中の歳月』（思潮社、1980）で高見順賞を受けたが、これは1970年に同社から出した『シュペルヴィエル詩集』との関連が明白である。

詩の講読での「詩人の私としては」という言葉が印象的である。

また、飯島や窪田とともに『堀口大學全集』に編集に精力的にかかわったのは、前述のとおりである。堀口とは生前に親交があり、卒論のために文献の借覧を許されたと聞いたのは、Wikipedia にもあるとおりである。

さらには、地元ではむしろ住民運動家で有名であり、『居住点の思想』（晶文社、1978）もある。偶然ながら安藤宅は小生の実家の近隣であり、興味深く読むことができた。

飯島と同じで、國學院大が初任校で、文学部でないままに明大に後述の渋沢孝輔に招かれて定年を迎えたのも奇しくも同じである。

ただし、安藤は政経学部で都市論のゼミも担当していたことはふれておかねばならないだろう。

新卒で受験した東大大学院に不合格となり、通信社に勤務したが、その間も翻訳は発表していた。現在とは隔世の感がある。

5) 渋沢孝輔

渋沢孝輔は、旧制と新制の2回の東外大卒業である。大学院は東大であった。学部が同窓なのに、受講を敬遠してしまったのが、今となっては残念である。

『渋沢孝輔全詩集』（思潮社）は、2006年と死後刊行である。入沢と同じで、高見順賞（1980）、萩原朔太郎賞（1997）を受賞している。

また、『蒲原有明論』（中央公論社、1980）をむしろ例外とする感じで、国文のほうはあまり著作が出てない。このあたりは、既出の詩人教授とはやや違う（それも個人的ながら敬遠の理由だったかもしれない）。

6) 大岡信

大岡信も、あえていちおう仏文扱いにもしておこう。

読売新聞外報部の記者から明大の教員になったが、東芸大に転出している。

詩人としての受賞歴もあるが、むしろ『折々のうた』（岩波新書、1980）といった評論活動のほうが前面であった感じがする。

国文の教授であったから、国文の著書のほうが圧倒的なのは言うまでもない。

7) 嶋岡晨

嶋岡晨（1932～）は、明大の教員ではなかったが、明大の出身である。現代詩文庫『嶋岡晨詩集』（思潮社、1986）、翻訳にシュペルヴィエルの『ノアの方舟』（ハヤカワ文庫、1975）、国文では坂本龍馬などに関する著作もある。

8) 明大詩人会

ここで、詩人教授ではないが、明大出身の詩人たちについてふれておこう。

年長では、H氏賞受賞の鈴木ユリイカ（1941～）もいたし、後述の野村喜和夫（1951～）も大学院からは明大だが、むしろ詩人教授たちの教え子に注目したい。

城戸朱理（1959～）、広瀬大志（1960～）、田野倉康一（1960～）たちは、ピカソ（1881～1973）にあやかり、在籍中から『洗濯船』という同人誌をやっていた（高貝弘也は京大）。昭和末期の一時期だが、明大詩人会というのができて、イベントに参加した。

田野倉は、現代詩文庫『田野倉康一詩集』（思潮社、2016）の裏表紙で、在籍時の1年生の担任が渋沢で、2、3年生では入沢であったことを記している。

存続はしなかったこの会の意味合いはあえて論ずまいが、詩人教授の教え子たちが何人も詩人になったのを見届けられたのは僥倖であった。

3 他大学

1) 小海永二

小海永二（1931～2015）は、横浜国大で、第二外国語のみ担当していた。2年時のクラスではミシヨールを読んでいたという話を聞いたことはある。地方大学への集中講義に行っていた話はあるが、仏文科に非常勤で行っていた

話は聞いていない。

先に個人的だが、小生より年少の姉弟と偶然ながら同じ予備校に在籍した。お姉さんのほうは、そこでのアルバイトの同僚だった。小海の娘と教えてくれた女性課長が仏文出身というのも驚いた。弟さんの英語の答えは、すべて採点させていただいた。小海宅訪問の際には、お姉さんに再会した。

詩集や翻訳は『小海永二著作撰集』（全8巻、丸善、2007）、『小海永二翻訳撰集』（全6巻、丸善、2008）にまとめられている。

翻訳では、スペインのロルカ（1898～1936）の翻訳もしている。初期はフランス語経由の重訳であったが、『ロルカ全詩集』（全2巻、青土社、1979）はスペイン語からの翻訳である。

土曜美術社の雑誌『詩と思想』では、編集主幹でもあったはずだが、最後はけんか別れとなっている。

国文のほうでは、『原民喜 詩人の死』（国文社 1978）など、また、大学以前には、中高の教員の経験があり、『表覧現代国語』（有精堂出版、1966）なども刊行している。

その他に、『現代詩の解釈と鑑賞事典』（旺文社、1979）といった、アンソロジーを多く編集している。

ただし、ここには異議をえて呈したい。詩人である自分自身を含めているからである。アンソロジーをまとめるなら、自作は遠慮すべきか、そもそも詩人にならないほうがいいはずである。

さて、しかしそのアンソロジー作成については、外国人へのアシストをしている。『中国語版日本戦後名詩百家集』（羅興典編、木村哲也訳、私家版、1995）である。小生は主として出典探しをして、詩人の解説は原題に戻すという作業が中心だったが、小海自身の書庫に入っている作業協力のおかげで、完遂することができた。

フランス語にスペイン語も教えて、その著作もあり、詩に関心を持って、大学院で国語を教え、教員免許状更新講習で国語の講座を担当する小生は、受講こそしなかったが、一番の理解者と自負している。

スペイン語の全詩集も、原文とていねいに合わせる機会もあり、失礼ながら、文庫化（『ロルカ詩集』（土曜美術社出版販売、世界現代詩文庫、1996））された中にまで、誤訳の指摘のないままのものもあることを、いずれまとめたい。

2) 井上輝夫

井上輝夫（1940～2015）は、慶大の教授であった。経済学部から湘南藤沢キャンパスに移った。

ボードレール（1821～1867）の研究者で、この年代には珍しく、フランスの博士号を取得している（在仏時の飯島耕一の通訳をしたりした）。フランス語での著作がある。

詩集には、『夢と抒情と』（思潮社、1979）などがあるが、冊数が少なく、現代詩文庫には入っていない。国文系の刊行物もない。

夫人がアラビア人で、その方面のことにも詳しくあった。

個人的ながら、仏文学会誌担当書記時代に、後出の天沢退二郎とともに編集委員であった。

また、これも個人的ながら、小生の事実上の指導教員である、後出の沓掛良彦とも面識があり、他の編集委員と併せて、酒席に加えていただいたことがあった。

3) 天沢退二郎

天沢退二郎（1936～）は明治学院大の仏文科創設時からの教員であった。

中世文学の研究者であったが、童話の翻訳もある。

詩集には、タイトルにフランス語が含まれる『Les Invisibles 目に見えないものたち』（思潮社、1976）などがあり、詩人教授の面目躍如である。

また、前述の入沢康夫とともに、宮沢賢治の研究でも有名で、宮沢賢治賞を受賞している（2001）。

4 沓掛良彦

沓掛良彦（1941～）は、創作詩こそないが、訳詩が多い。あえて詩人教授にしたい。

小生の事実上の指導教員であるので、面はゆさもなくはない。

早大の露文科から、東大大学院では西洋古典学であった。

しかし、東外大での最終講義は陶淵明であった。何者か。

最初の専任校は大阪市大で、ロシア語の教員であった。晩年ながら、サーチナ、他『ラフマニノフの思い出』（水声社、2017）というロシア語の共訳もある。

転任先は東北大で、言語学科であった。ここでは、ギリシア語やラテン語を教えていた。

ラテン語の翻訳では、オウィディウス『アルスアマトリア』（岩波文庫、

2008) などがある。

ギリシア語関係では、あえて『サッフォー 詩と生涯』(水声社、2006)を挙げておく。

フランス語の業績もあるのだが、それはこの女流詩人の影響下にある詩人たちなどである。例えば『焰の女——ルイーゼ・ラベの詩と生涯』(風の薔薇、1988)などが挙げられる。

国文の業績があるのは言うまでもなく、『和泉式部幻想』(岩波書店、2009) などがある。

他に、あえてふれておけば、東外大停年の後は、東学大でドイツ語の専任教員を2年間務めたし、イタリアの大学でイタリア語で講義をしたことがあった。

さて、最終講義は漢文系であったが、それに関しては、『壺中天酔歩——中国の飲酒詩を読む』(大修館書店、2004)などを挙げておく。

詩酒合一、学酒合一を実践し、院のゼミの後の研究室での酒盛りを、語源からすれば、これぞ「シンポジウム」と称していた杳掛らしい。

だが、詩集はない。だが、『トルバドゥール恋愛詩選』(平凡社、1996)などを挙げておく。訳詩家である。

独文だが、飯吉光夫(1935～)も、訳詩専門ながら、雑誌『現代詩手帖』(思潮社)では、創作詩の選者も担当していた。杳掛はそれはしていないが、まず、『杳掛良彦訳詩選 黄金の豎琴』(大和プレス、2015)の発売元は思潮社である。

また、裏表紙にその全面広告が載った『現代詩手帖』(2016年9月号)の座談会(「古典詩への誘い」高橋睦郎、伊藤比呂美)にも登場して、中ほどで興味深いことを言っている。

「昔、私も詩のようなものを書いていたこともありますが、自分のことを作品に書いたり語ったりするのが死ぬほど恥ずかしく、詩を書くことは諦めまして、学問の道に進みました。それでも詩への憧れは消えないので、古典詩を自分なりの言葉で表現できたらという思いで詩の翻訳をやってきました」

現代詩の立場からは、やや違和感のある発言であろう。

それを理解するために、その前のほうの発言を引いておこう。

「[ギリシアの古典詩は] 必ず何か具体的な現実があって、それを詩にしている。自分の周りにいる人を思い浮かべて、その人たちに聞かせるために詩を書いている。そこが近代と大きく違いますね。あと、詩と言いますが、抒

情詩はすべて歌で、豎琴の伴奏で歌われるものなので、詩人はシンガーソングライターです」

シンガーソングライターでは、杳掛の著作のタイトルにもある中世南仏のトルバドゥールも連想されるが、はるかに大昔のものを思い起こさねばならないわけである。

ただし、メディアが大きくなりすぎた現代には、もはや合わせようがないというのも正直なところであろう。

少し後の発言を引く。

「ヨーロッパの詩は歌われる伝統がアポリネールまで流れていますよね」

個人的ながら、小生が仏文に転向したきっかけとなったアポリネールだが、句読点を廃止した自由詩の始まりながら、定型詩ふうのものも確かにある。この後は、歌には適さない自由詩の時代となった。

対談の最後の発言も二箇所引いておく。

「ただ一般的に言えば、日本の詩人はもう少し勉強して言語的に教養を積んだほうが良いような気がします。ヨーロッパでは詩人になることは大変なことです。古典的な枠組みがまずあって、まずそれを理解した上で更にそれを壊して自分の詩の世界を築いてゆく。日本の場合は必ずしもそうでない」

率直に言って「必ずしも」ではない。定型詩が事実上ないまま、行分け散文のような自由詩だけになっている。

また、印刷技術が発明されるまでは、現代では詩と思えないものも、記憶の便もあって定型詩の形であった。

そして、小説のほうよりステータスが高い。

現代日本では、残念ながら詩人では食えないから小説家になったのではという詩人がいる。三木卓（1935～）、富岡多恵子（1935～）、金井美恵子（1947～）、ねじめ正一（1948～）などである。

残念ながら、小説家のほうがステータスが高いと言わざるを得ない。

「詩作は教養の問題ではないにせよ、詩囊は大きいほうがいいですね。[中略]

私は現代詩にくらいのでわかりませんが、詩人たちはどういうふうに分の詩囊を肥やしているのか、あるいは、そんなことに意を用いないのか、でも、たまに現代詩を見ると、その詩囊の大きさはすぐわかる気がします」

なお、杳掛は雑誌『みらいらん』3号（洪水企画、2019）で、フランス詩の翻訳が一番秀れ、詩壇に格段の影響を与えている旨を述べている。

5 その他の仏文系詩人

鈴木和成（1944～）は横浜市大であった。ランボー（1854～1891）の研究家で、詩集には『微分せよ、秒速で』（書肆山田、1988）もあるし、村上春樹の本も出している。

野村喜和夫のほうが詩壇には多く登場するように思うが、非常勤講師のままなので、失礼ながら詩人教授とは呼べない。

さて、山田兼士（1953～）は、大阪芸大である。翻訳にボードレールの『パリの憂愁』（思潮社、2018）、詩集に『月光の背中』（洪水企画、2016）、国文の研究では萩原朔太郎世代ばかりでなく、谷川俊太郎や、現代の詩壇についての時評まで、幅広い。

松浦寿輝（1954～）は、東大であった。デリダ（1930～2004）などの翻訳、詩集には『吃水都市』（思潮社、2008）などがあり、評論もあるが、小説も書いている。

守中高明（1960～）は生え抜きではないが早大である。やはりデリダなどの翻訳、詩集には『未生譚』（思潮社、1992）などがあり、国文のほうでは田村隆一などについて書いている。

ここまでが、勝手ながら詩人教授かと思っている。

その他は、詩集も出した教授という感じである。

鈴木孝（1937～）は名古屋造形大であった。ジャレ（1930～）の翻訳などの他、『鈴木孝詩集』（新・日本現代詩文庫、土曜美術社出版販売、2012）などがある。

橋本征子（1943～）は國學院滝川短大であった。詩集に『破船』（書肆青樹社、2004）などがある。

他には、名のみ挙げるなら、加藤健次、岩切正一郎、大鐘敦子などがいる。専任でなければ、丸瀬康裕もいる。

フランス語力や研究能力は、留学するにも船の時代に比べて上がっているに間違いはない。その分、過当競争になり、のん気に詩を書いていられないとも言えよう。

しかし、そもそもは、芸能人からしてカリスマ性のある少数が人気という時代ではないことであろうと思っている。

おわりに

時代が前後するが、そもそも終戦直後のマチネポエティクの時代から、詩人教授がいたのである。中村真一郎（1918～1997）は、辞任したが東大であった。福永武彦（1918～1979）は学習院大であった。

その前の、早大の西條八十（1892～1970）を、作詞系でこそあるが、忘れてはなるまい。

日本の詩は、いろいろな意味で特殊ではあるが、創作に当たって外国の詩に学び取り込もうという姿勢があった。特に仏文に多かった。

詩人教授ではないが、鈴木美枝子（1949～）が思い起こされる。詩集刊行（『夏の肉体』（北海詩人社、1990））に先んじて、大学でも習っていなかったフランス語を学び、ラフォルク（1860～1887）の詩の翻訳を複数刊行（『嘆き節』（北海詩人社、1986）など）している。訳文には気になる箇所も散見されるが、少なくとも沓掛良彦は大喜びの姿勢である。

仏文を中心とした詩人教授の復権に期待する。（了）

人文学諸学の草分けレオン・ド・ロニーの再評価

—ベネディクト・ファブル＝ミュラーとフィリップ・

ロスシュタインとの鼎談—

クリス・ベルアド（日本語訳：寺尾佳子）

ベネディクト・ファブル＝ミュラーとフィリップ・ロスシュタイン⁽¹⁾は、フランスにおける日本研究の創始者であるレオン・ド・ロニー（Léon DE ROSNY, 1837-1914）の子孫である。曾祖父にあたるロニーの活動の重要性を数年前に再認識したという。そこで、編集者、教員・研究者であった二人は仕事で培った技量を活かし、ロニーに光を当て直すことにした。その成果が、共著『レオン・ド・ロニー：東洋からアメリカへ』⁽²⁾にまとめられ、2014年に発表された。この著作は、ロニーの伝記、家族の希少な資料に基づく証言、学術論文集、日仏文献目録で構成されている。

鼎談に入る前に、二人のプロジェクトが、昨今より広い研究動向に対応していることに触れておくべきである。つまり、一世紀ほどロニーは等閑視されてきたが、ここ数十年、日本でもフランスでも、ロニーの業績が研究者により再検討され、再評価されているということだ。この鼎談の聞き手自身も、この流れに与しており、ロニーの経歴と研究について論文を数本発表している。しかしながら、二人の立場は他の研究者とは一線を画している。ロニーの子孫として、必然的に、研究対象に独自で、他の研究者とは違った関わり方をしているからだ。希少なものを含む家族の資料や伝承にもアクセス可能なのである。今回の鼎談では、まず、ロニーの軌跡がどのように辿られたのかに注目する。後半では、大学教員で言語学者、翻訳学者であるフィリップ・ロスシュタイン（Philippe ROTHSTEIN）に、ロニーの著作について、とくに、言語や翻訳について、ロニーがどのような考えを持っていたのかを聞く。

クリス・ベルアド (Chris BELOUAD、以下CB)：ご著書を出版しようとする時決心されたのはなぜでしょう。また、どのように事が運んだのでしょうか？

ベネディクト・ファブル＝ミュラー (Bénédicte FABRE-MULLER、以下BFM)：1914年に亡くなったロニーのことを、より深く知りたいとずっと願っていたのですが、「転機」が訪れたのは、おもしろいことに、東洋ではなく、アメリカ大陸でした。一度目は、ハーバードで、ワイドナー記念図書館の蔵書でロニーの本を約60冊見つけた時で、二度目は、2011年のメキシコへの家族旅行の際、歴史家であるガイドが、マヤ族の4つの写本のうちの一つを研究し、1888年に出版したロニーという人物について語った時です。フランスに戻ってすぐに私は曾祖父の文献目録を探したのですが、見つかりませんでした。その時、この探究が始まったのです。文献目録は作成され、研究を深化させるために、私のプロジェクトに加わるように親近者の二人にお願いし、私たちは、「証言者」探しを始めました。

その呼びかけに最初に応えてくれたのが、リール市立図書館で、2011年12月に、司書のジャン・ヴィルバ (Jean VILBAS) とロール・デルリュ・ヴァンデンビュルク (Laure DELRUE VANDENBULCKE) でした。リールだったのは、もちろん、ロニーが生まれたのはリール近郊の町、ロスだからです。ロニーは、とりわけ、1906年と1911年に市に所蔵の大部分、1000冊以上の著作を寄贈しています。そのうち395冊が日本語で512冊が中国語、210冊が西洋の言語の著作です。すばらしい蔵書なのですが、残念ながら一般には公開されておらず、ロニーの遺言によれば、リール市立図書館から持ち出すことはできないのです⁽³⁾。

CB：この蔵書のうち、日本の著作用の目録があり、それはイギリスの日本学者ピーター・コーニツキー (Peter KORNICKI)⁽⁴⁾ (ケンブリッジ大学) によって作成されました。この目録が、例えば、デジタル化され、インターネット上でアクセスできるようになれば、この蔵書の価値が高まるとともに、研究者たちの仕事が楽になるでしょう。また、中国関連の文献図録は二松学舎大学の研究者らにより作成中です。この蔵書は、リールの市立図書館から物理的に外に持ち出されることがなく、一世紀以上も「眠って」いましたが、一般公開される日が近づいているわけです。こうした文献調

査の後、研究の第二段階では何をされましたか？

BFM：2012年1月初頭、社会科学高等研究院で、私たちはパトリック・ベイエール（Patrick BEILLEVAIRE）とギヨーム・カレ（Guillaume CARRÉ）と知り会いました。彼らはロニーに精通した日本の専門家で、作成されて間もない文献目録に関心を示しました。この学者の子孫として、私たちは、ロニーの著作の重要性、意義、射程を探究していますが、この取り組みの中で、繰り返しこう自問していました。ロニーの人生と著作は、家族以外の人びとの関心をひくのだろうか、と。ベイエールとカレは、私たちの疑念を晴らし、この課題に取り組むためのいわばゴーサインを出してくれました。

CB：他にはどんな関係者に会いましたか？

BFM：研究が進むにつれて、私たちのネットワークは拡大していきました。多くの人びとと対談を重ね、そのなかには、福沢諭吉（1835-1901）のパリ滞在についての著作⁽⁵⁾を出版した、産経新聞のパリ支局長であった山口昌子、また、ロニーのように独学で日本語を修得し、私たちの著作⁽⁶⁾に大きく貢献してくれた医者アラン・ブリオ（Alain BRIOT）もいます。彼はまた、田安斉匡（1779-1848）の著作の翻訳⁽⁷⁾もしています。

2012年春には、「レオン・ド・ロニー、フランスにおける日本研究の第一人者。伝記・文献目録」⁽⁸⁾の著者リュック・シャイユ（Luc CHAILLEU）と知り合いました。彼は私にこう書いてくれました。「レオン・ド・ロニーがこれほど関心を集め続けていることをうれしく思います。私が修士論文でこの研究を始めた頃には、まさに、「地ならし」をしなければならなかったのですが、図書館や文書館でその何ヶ月ものあいだ、夢中になったものでした。ロニーは本当に興味深い人物なのです。」

CB：一言付け加えさせてください。シャイユは、現代におけるロニー研究の草分けとみなすことができます。私自身、博士論文を書き始めたとき、彼の研究をかなり援用しました。

BFM：ご存知のように、シャイユはロニーの研究を続けていませんが、次

のような興味深い手がかりを私たちに残してくれました。『折衷主義的唯心論』（« spiritualisme éclectique »）に関する様々な事柄をテーマにしていて、私は、ロニーとヴィクトル・クーザン（Victor COUSIN, 1792-1867）を関連づけ、この研究を発展させようと考えていました」。

CB：シャイユーが言及したこの手がかりは、今後のロニー研究の重要な課題であると私にも思われます。ロニーの日本語教育の仕事、日本についての著作はより知られ始めています。ですが、宗教的な事柄との関連、それに関わる問いについてはまだ研究が進んでいません。とはいえ、ロニーをめぐるネットワークに立ち戻りましょう…

BFM：ロニーの活動に関して、日本研究以外の領域にアプローチするために、別の専門家も探しました。そうして、2012年1月には、アメリカ学のナディア・プレヴォ・ユルキディ（Nadia PRÉVOST URKIDI）が連絡をくれました。彼女はとくに、学者シャルル・エティエンヌ・ブラスール・ド・ブルブル（Charles Étienne BRASSEUR DE BOURBOURG, 1814-1874）と、当時16歳であった若きロニーとの出会いについて⁽⁹⁾話してくれました。

CB：ユルキディとの対談で、ロニーの著作の重要な一側面を取材できたわけですね。ご著書の執筆に向かわれる前に、別の分野の専門家とも面談されたことと思います。

BFM：そうなんです。数ヶ月後には、リュシル・テヴノー（Lucile THEVENEAU）⁽¹⁰⁾、ディディエ・バリエール（Didier BARRIÈRE）⁽¹¹⁾、ネリー・ギャブル（Nelly GABLE）⁽¹²⁾により、国立印刷所に迎えられました。彼らは、ロニーと中国研究家ジュール・モール（Jules MOHL, 1800-1876）との書簡を閲覧させてくれました。この機関との間で、興味をそそられる話があるんです。1854年5月28日、17歳だったロニーは、帝国印刷所長に手紙を出すのですが、その中で、日本語の父型のアドバイザーになりたいと申し出ているのです。東洋の印刷部門の監査官モールは、6月22日に肯定的な返事をし⁽¹³⁾、この協力関係は30年続くことになります。

CB：他にはどのような著名な場所を調査されましたか？

BFM：2012年から2014年のあいだに、自然史博物館、ギメ東洋美術館、ケ・ブランリー博物館、コレージュ・ド・フランスといった多くの場所に足しげく通いました。コレージュ・ド・フランスでは、ジャン＝ノエル・ロベール（Jean-Noël ROBERT）と出会い、彼もまた、私たちの取り組みが妥当であると認めてくれ、何人かの人を紹介してくれました。それにより、ロニーについての著作を出版することは理にかなっていると確信することができました。

国立図書館にも頻繁に通いました。そうするうちに、リシュリユー館の写本部門で、日本の蔵書を担当しているヴェロニク・ベランジェ（Véronique BÉRANGER）が、私たちの研究をサポートしてくれるようになりました。彼女もまたロニーに精通しており、彼女の博士論文（2000年）は「ジャポニズムと博識：オーギュスト・ルスエフ（Auguste LESOUËF, 1829-1906）の蔵書における日本の書物」を対象としています。本収集家のルスエフはロニーの親しい友人であると同時に、彼のパトロンでもありました。ルスエフはロニーと連れ立ち、スペインやルーマニアといった国々に旅行する際に、出版や製本、書籍の購入といった彼の現実離れた願望に出資したのです。

CB：1868年5月に、ロニーは東洋語学校で、初代日本語講座の教授に任命されます。フランスにおける日本語と日本文化の教育において、ロニーはどのような思い出を残しているのでしょうか？

BFM：ロニーは、この著名な学校の生徒、大学関係者、研究者らの記憶に深く刻み込まれています。2012年6月には、BULAC⁽¹⁴⁾で、パスカル・ユルト（Pascal HURTH）⁽¹⁵⁾の案内で、日本関連の重要な蔵書について知ることができました。また、ユルトは、私たちの要求に答え、1869年の未公開手稿『日本語講義』まで発見し、東洋語研究の大家である教授たちを紹介してくれました。彼らはみなロニーを熟知していて、その中には、私たちの本の序文を担当した国立東洋言語文化研究所（INALCO）の教授フランソワ・マセ（François MACÉ）もいます。

リールでは、リール大学教授の紀子・ベルランゲ河野（Noriko BERLINGUEZ-KÔNO）に会いました。彼女は、貴重な形で私たちの企画に関わっており、ロニーをめぐるシンポジウムを二つ企画することになり

ます。2015年に、「ヨーロッパにおける日本研究の生成：レオン・ド・ロニーの蔵書をめぐって」（Genèse des études japonaises en Europe : autour du fonds Léon de Rosny）、2018年に、「レオン・ド・ロニーの時代のアジアとヨーロッパの間での知の循環」（La circulation des savoirs entre l'Asie et l'Europe au temps de Léon de Rosny）を開催しました。

CB：松原秀一⁽¹⁶⁾とも交流されましたよね？

BFM：そうなんです、この研究を始めた当初から彼と連絡を取りたいと思っていて、作成した文献目録と論文「レオン・ド・ロニー、1854-1904：言語の生、または民族学の死」⁽¹⁷⁾を彼に送りました。2012年3月7日、メールでこのように返信がありました。「ロスシュタイン氏の貴重な論文を送ってくださり、すばらしい誕生日プレゼントをくださいました。私は1930年3月7日にラ・トロンシュ（イゼール県）で生まれ、今日で82歳になったのです」。別のメールでは、松原秀一は福沢諭吉のことを思い起こしつつ、「福沢の自伝の中では、フランス滞在（1862年）とロニーとの対談について語られています。福沢は、ロニーのことを「欧羅巴の一騎士」と述べ、480フラン払ってサンクトペテルブルクまで日本人たちに会いにきたロニーの熱意に驚嘆していました。実は、おもしろい事情によって、旅費は外務省の負担だったのですが」。松原はこのような付け加えています。「日本語なのだけれども、小論を書いたので、あなたに送ろうと思っています。それに加えて、福沢がロニーに宛てた英語の手紙が載った福沢展のカタログも送る予定です。私たちは、ロニーが手書きの文章を残した福沢の旅の手帳を所蔵しています。」

日本でも、フランスの若者、あなたクリス・ベルアドさん！が、私たちと同じように、ロニーを「蘇らせ」ようと努めていることを知りました。あなたはすでに日本とフランスの雑誌に論文を何本か発表されていました。出会ってから長く実り豊かな交流が重ねられ、それは今日なお続いています。あなたは私たちの著作を充実させてくれました⁽¹⁸⁾。

ロニーをめぐってこのように育まれた人脈によって、多くのまた別の出会いが生まれ、この出会いによって、曾祖父のたぐいまれな個性と研究の多様さに光を当て直すことができるにちがいません。

CB：後半は、フィリップ・ロスシュタインさんにお話を伺いたいと思います。ロスシュタインさんは、民族学、翻訳、唯心論的実証主義の分野における曾祖父様の研究の現代的意義を考察していらっしゃいます。2010年に、先ほど触れた「レオン・ド・ロニー、1854-1904：言語の生、または民族学の死」という論文を發表されています。この論文の目的は何だったのですか？

フィリップ・ロスシュタイン（以下PR）：曾祖父が着手した諸学問分野における研究の現状を踏まえて、ロニーの研究を改めて評価しようとしていました。なかでも、現代民族学の創始者であるマルセル・モース（Marcel MAUSS, 1872-1950）と、1859年からすでに、パリの民族誌学協会の共同創設者であったロニーとの間に、どのような思想的つながりが考えられるのか、その主要なものを掴もうとしていたのです。実は、1913年のパリの民族誌学協会再生の土壌を注意深く見ると、このつながりは明白なのです[この年はロニーの死の一年前にあたる]。

モースは、1913年にパリの民族誌学協会を再生させますが、その際に投げかけられた問いと、再生の背景について、エマニュエル・シブー（Emmanuelle SIBEUD）による三つの解説⁽¹⁹⁾を参照しながら、ロニーの民族学についての態度と比較することにしましょう。

以下、「モース」の箇所では、シブーの論文の引用を紹介し、「ロニー」の箇所ではロニーの見解を紹介します。モースとロニーの対応し合う箇所をそれぞれ傍点で表記しています。そこにおいて、両者の態度にみられる相補性も相違点についても、その解釈は読者の自由に委ねられています。

モースが筋金入りの実証主義者であり、社会学と密接に結びついているとしたら、ロニーの方は、実証主義的唯心論者で、文献学、比較文法、精神の学問、とくに哲学をより一層拠り所としていることを今一度指摘しておきましょう。

「ライバル関係にあったパリ人類学協会と同じように、1859年に創設された最初のパリ民族誌学協会（Société d'ethnographie de Paris）が、1902年ごろには決定的に凋落した」⁽²⁰⁾とシブーは明示していますが、モースの時代にはロニーの書物や出版物、講演録、民族誌学協会の紀要を容易に閲覧できたし、今日では電子化されていることに注意を払う必要があります。これらの諸著作のおかげで、ロニーの民族誌学的思想に触れる場は失われてはいな

かったのです。

- ・モース：「民族誌学と民族学という用語のあいだでのモースの迷いは、文化と化した民族学を実際に即した形で復興させようという期待の表れであると同時に、民族誌学の経験主義があまりに狭い枠内に民族学を追い込むかもしれないという恐れを物語っている。民族誌学と植民地支配との関係についても、モースは同様のジレンマに陥っている：研究の自立性を保ちながらも、いかに有用で、つまり、広く世に認められ、助成金を受けるのか？ この資料〔民族学研究所の紹介の文案〕を、間接的な形であるだけに一層複雑な対話におけるモースの返答とみなせば、20世紀最初の30年におけるフランスの民族学再編成における重要な局面を理解する手段が得られる（p. 105）。」
- ・モース：「結局、『デュルケーム（DURKHEIM）やレヴィ＝ブリュール（LÉVY-BRUHL）ら社会学派のより新しい優れた研究』の理論的重要性は、民族誌学がこれらの研究に素材を提供している以上、モースが、民族誌学を支持して協力を求めた事実を裏付けている（p. 105-106）。」
- ・モース：「民族学研究所が創設されることで、民族誌学の実践においては、職業化が促されるにちがいない。ところが、1913年、この実践は二つの道に発展してゆく可能性があり、モースがその収束を行っていた。それは、高等研究実習院のモースの優秀な学生たちがすでに関与しつつある大学の道と、民族誌学研究所の戦闘的な民族誌学者らによって切り開かれた植民地主義的な道である（p. 108）。」
- ・ロニー：「民族誌学は人間社会と文明の研究である。人間社会を全てまとめれば、人類になる。人類はたえず変化している。人類は、未開状態から文明化された状態へと移行する。その歩みは上昇的で開化的で、進歩と呼ばれている。民族誌学は、哲学が最近までそうであったように、普遍化につながるものであり、民族誌学は、人間の使命と摂理を追究しようと志す諸学問の集大成として生じたと言える⁽²¹⁾。」
- ・ロニー：パスカル・リヴィアル（Pascal RIVIALE）⁽²²⁾が注目しているように、

ロニーによって1859年に共同創設された協会の規約第一条によれば、「協会は、『民族学と言語学、考古学、新・旧世界の歴史とその諸学問、これらの学問の進歩に貢献する』⁽²³⁾ 目的で設立されていた」。その上で、リヴィアルは、ポール・ブロカ（Paul BROCA）率いるパリ人類学協会（Société d'anthropologie de Paris）の関心事を考慮して、著しい相違を指摘する。というのも、民族誌学協会において、「着手された主題の大部分は、言語学、神話、『芸術』に関わっていて、より一般的に言えば、特定の文明の独自の性格を定義しようと判断されたあらゆる原理に関わっているのだから。協会の中心人物であるロニーによれば、まったく別物の二つの研究分野が取り上げられていた。人類学が『自然科学』（« science naturelle »）であるのに対して、民族誌学は、「人間の摂理を探究する学問」（« science de la destinée humaine »）である。身体的特徴はこの学問の構成要素ではなく、より正確には、そうした性質の研究は民族誌学の守備範囲ではない。この説明は、ロニーの信条の表れ⁽²⁴⁾であり、協会がその存在理由・意義についての深刻な危機を経験した時に行われた。民族誌学の役割とは何か？ その活動場所はどこか？ 協会の使命とは何か？ どの問いも、紛糾した議論を内部で引き起こすこととなった。ロニーの遵守した方針が勝利を収め、その結果、人種学、より広義には自然人類学に関する言及はほぼ全面的に排除された⁽²⁵⁾」。

- ・モースとロニー：まさに以上のような点によって、マルセル・モースの確固たる社会学的方針に則った断固として革新的な考え方と、民族誌学の大志に由来し、普遍的と形容されうるであろうロニーのアプローチを比較できる。それでもやはり、ブローカの人類学の物理主義と全面的に対立するとともに、きわめて穏健な立場を取るロニーは、いわゆる「白色人種」の優位性についての当時の植民地主義の飛躍の背景「もっとも、それに対して、はっきりとは距離を置いていないが」を考慮に入れば、この点ではモースに最も近い人類学者の一人である。マーティン・ストーム（Martin STAUM）が指摘するように⁽²⁶⁾、確かに、マルセル・モースは、1902年になって、高等研究実習院で、「文明化されていない民族が存在するのではなく、ただ、民族は、異なった文明をもっているのだ」と宣言することになるが、ストームが念を押しているように、1888年の時点ですでに、ロニーは「進歩し、文明化するのは社会であり、人種ではない⁽²⁷⁾」と述べていた。

モースとロニーは、二人とも高等研究実習院の教授であった。ロニーは、「極東の諸宗教（第5科）」（« les religions de l'Extrême-Orient » (V^e section)）について、モースは、シブーが指摘しているように（p. 107）、「『文明化されていない民族の宗教史』（« histoire des religions des peuples non civilisés »）という奇妙なタイトル」だと自分が思っていた講座を担当している。二人は、1901年から1907年の間のみ同じ職場で働いていた。『高等研究キリスト教とビザンチン叢書』（*Collection chrétienne et byzantine des hautes études*）（高等研究実習院の宗教科学科の紀要、1906-1907年の講義についての簡単な報告と、1907-1908年の演習についての講義計画）の中では、モースによる「文明化されていない民族の諸宗教」についての講義報告と、ロニーとジョルジュ・レノー（Georges RAYNAUD）による「極東とアメリカ先住民の諸宗教」の講義報告が掲載されている。近代民族学の創始者とロニーの間での仕事上の関係を示す証拠は見つかっていないが、モースが、第5科の同僚たちの研究内容を知っていたと考えることはできる。その上、モースは後にこの科の主任になっているのだから。先駆者と革新者、さらに再革新者として、モースの名は歴史に刻まれ、賞賛されることになる。

CB：1871年にロニーが出版した『詩歌選集』の翻訳は、翻訳史と、今や広く世に認められている翻訳過程そのものの理論である翻訳学の歴史の中で、決定的に重要な役割を果たしたと考えていらっしゃるように思います。それについてのお考えを述べていただけますか？

PR：これまで、民族誌学の定義そのものと、この学問の思想的な目的について、モースが1913年に着手した改革と比較しながら、ロニーの30年に及ぶ研究を論じてきました。ここからは、西洋の詩、とりわけフランス詩と日本の詩の間の文化的隔たりはあまりにも大きいので、「翻訳不可能」（« intraduisibles »）と呼ばれているものの翻訳において、ロニーの翻訳研究、とくに、1871年の『詩歌選集』が一転機を画しているということをお話ししたいと思います。ロニーの翻訳の数々は、翻訳科学の最近の成果、とりわけ、ジャン＝ルネ・ラドミラル（Jean-René LADMIRAL）⁽²⁸⁾のものに認められるような、決定的に現代的な視点から読み取ることができます。

CB：翻訳者ロニーの特性を端的に述べていただけますか。研究対象として、翻訳に関心が寄せられ出したのは1950年、60年代以降のことですが、翻訳学という新しい学問において発展していったものと結びつけられるようなロニーの翻訳の特徴とは何ですか？

PR：『詩歌選集』⁽²⁹⁾は、ヨーロッパにおいてこの主題を初めて取り上げ、欧州の教養人に提供された著作ですが、その序文を書いたエドゥアール・ルネ・ルフエーヴル・ド・ラブレ (Édouard René LEFEBVRE DE LABOULAYE) は、ロニーの卓越した研究成果をこのように指摘しています。「外国の言葉をフランス語に翻訳することがただ問題になっているのではない。捕らえて、私たちの国で伝えなければならないのは、民族性なのだ。もし、自らが訪れた遙か遠い国々と未知の民族の物語を書く旅人が賞賛されるなら、外国人自身を私たちのところに連れてきて、彼らの住んでいる場所についてだけでなく、精神まで深く知らせようとする者は、一層賞賛されるべきであろう！」

「人間の摂理を探究する学問」として民族誌学を定義するロニーによれば、ある民族の精神の特性は、世界靈魂の概念とつねに関連づけて研究されねばなりません。この考えは、ロニーが実行する翻訳方法と密接に関わっています。なぜなら、ロニーによれば、どんな翻訳でも、翻訳後のテキストにおいて、民族の精神を置き換えずには済ませられないからです。この精神とは、原典の中で、なかでも詩の元のテキストの中で最も高いレベルで不可避免的に現れ、あるいは透けて見えるものです。ロニーは、ある一節、ある詩について、考えられる翻訳案をいくつか提案することが頻繁にあります。多数の注を付け、その中で自身の疑念を伝えます。たとえ翻訳者が読者に能動的な役割を求めたとしても、翻訳は、「人間の摂理を探究する学問」に役立っているのです⁽³⁰⁾。ちなみに、ロニーが、内なるもの、目に見えないもの、未知なるものに到達することになるのは、日本の詩の翻訳・解釈・媒介においてです。ロニーは最も難しい領域に挑んでいます。翻訳者にとって、最難関である詩という表現手段を媒介しているのだから、他の文章表現には、大いに期待できます。

ロニーは、日本の詩の翻訳において、日本人になります。彼のうちに住まう日本人により、フランスの人は、複合的な自己をなす素材・言語の層が堆積した別の人間になるのです。同一性と他性がひとりの人間のうち

にあるのです。『詩歌選集』を読めば、ロニーが発見してもらいたい日本人に少しはなっているだろうし、また、他性についての一貫性と寛容性の示されたこの記念碑的著作を知る前には、あまりに不可能で、困難に思われていた私たちの二つの文化の交流に関与することになります。

ロニーの翻訳作品の現代的側面に関しては、ロニーにおいて、最終的に、媒介者は翻訳者より重要なのかを考えてみましょう。翻訳学の創始者の一人である、ジャン＝ルネ・ラドミラルを参照してみます。彼は、「起点テキストを重視する者（« *sourciers* »）」よりもむしろ、「目標テキストを重視する者（« *ciblistes* »）」である必要性を強調するために、翻訳学の文脈でトマス・アクィナスの学説を持ち出しています。「万事は受け手それぞれの流儀で解釈される（« *Quidquid recipitur, ad modum recipientis recipitur* »）」⁽³¹⁾。翻訳する時にはいつでも考慮されねばならないけれども、時として、忘れられがちな厳しい現実です。

翻訳学において、ラドミラル⁽³²⁾が、「起点テキストを重視する者」と「目標テキストを重視する者」の間で定めた根本的な違いは、翻訳者にとって、自らの作業の指標として役立つに違いありません。「起点テキストを重視する者」と呼ばれる「直訳主義の誘惑」に従う翻訳者と、「現実主義の要請に従うために、もともと、どうしようもなく失われている（やはり言わなければならない！）起点言語（« *langue-source* »）」を断念することを受け入れた、「目標テキストを重視する者」と呼ばれる翻訳者が区別されています。この分類では、ロニーはおそらく先駆的な「目標テキストを重視する者」の陣営に入りますが、同じくラドミラルの用語で、「極度に目標テキストを重視する者」とみなすこともできます。それは、致命的な欠陥となる批評ではありませんが、翻訳においてつねに奨励されるわけでもありません。

じっさい、ロニーは、註釈することで、当該の民族の精神をいかに取り入れるかについては読者の判断に委ねています。このことは、媒介の作業を明らかに容易にし、彼は、媒介者として優れた役割を果たしています。ですが、翻訳とは選択であり、決定されなければなりません。ロニーは、自らの迷いを読者に直接体験させます。つねにそうではないとはいえ、でも本当によくそうしています。気前よくきわめて正直で、同時代の人びとに献身的であり、自らのアカデミックな地位を盾に取ることはないのです。こうして読者は、ロニーの考察を分かち合うことができ、さらには、豊か

にすることさえできるのです。

CB：ロニーのあるテキスト、『意識的方法、正確主義的哲学論』⁽³³⁾ (1887年)が、彼の著作に取り組んでいる者たちを考え込ませています。この著作もまた、ロニーの著作のなかでなお現代性を帯びているとあなたがみなしているカテゴリーに含まれるのでしょうか？

PR：ロニーとアンリ・ベルクソン (Henri BERGSON, 1859-1941) の間に、重要な関係性を見出すことができました。偉大な生氣論者であるこの思想家は、唯心論の名を改めて高らしめました。ドミニク・ジャニコー (Dominique JANICAUD, 1937-2002)⁽³⁴⁾ は、唯心論的実証主義という表現を広めましたが、その表現はベルクソンが読んで解釈した、フェリックス・ラヴェッソン (Félix RAVAISSON, 1813-1900) の著作を代表していると力説しています。その概念は、ロニーの『意識的方法』にも当てはまります。ロニーの思想的基盤が、実は、彼の研究の大部分に影響を及ぼしているとしても、その種のものでは異色である（そもそも、インターネット上に公開されているどの哲学的著作の中にも、「意識的」(« conscientielle ») という形容詞は見当たらない) テキストについて、ピエール・ルブルー⁽³⁵⁾ は鋭く分析し、ロニーにとって、意識と精神は本当に物質から独立しているという事実を明らかにしています。それにより、ロニーは真の唯心論者とみなされるのです。

『意識的方法』には、「正確主義的哲学論」という副題がつけられています。このサブタイトルにより、「レオン・ド・ロニー [中略] は、正確主義の立場を取る」ことにより、実証主義の思想家とは区別される、とルブルーは指摘していますが (p. 228)、それにしても、この形容句の選択により、実証主義的唯心論者の陣営に彼は位置づけられます。さらに、唯心論に実証主義の形容詞がつけられた時点で、もはや、これらの立場を対立させることはできなくなるということを付け加えておきましょう。精神の現実はまだにここにあるので、形而上学は実証的になるのです。すぐ後で言及する、偉大な思想家ベルクソンの抜粋と、それに続く、ルブルーの論文から引用したロニーの思想において読み取ることができるのですが、ロニーが近代民族誌学のパイオニアであることは確かだとしても、物質と精神の関係について仮説を立てる時、ロニーは、現代の人文科学の真の研究者が取

るべき認識論上の慎重さを示しています。ロニーは実証主義者ではなく、[バルクソンとジャンコーを] 先取りした実証主義的唯心論者ということになるのです。

バルクソンは、次のようにラヴェッソンを評価しながら、偉大な生氣論者の立場から、哲学史への自分の貢献も示しています。さらに、この点が極めて重要なのですが、ラヴェッソンと自分を認めることによって同時に、バルクソンは、そうとは気づかずに、ロニーも評価しているのです。(ラヴェッソンは)、「彼自身の『試論』の主要観念を再度取り上げ、拡張させながら、彼は哲学するための方法を二つに分けて考えています。一つは分析を用いる方法です。それは事物世界を惰性的要素に分解し、単純化を繰り返しながら、よりいっそう抽象的なもの、よりいっそう空虚なものを目指します。その抽象化作用が機械論者と呼ばれる物理学者によって、あるいは観念論者を自称する学者によって行なわれようが、それは大した問題になりません。どちらにしても、それは唯物論的方法なのです。もう一方の方法は、個別要素群だけではなく、それらの秩序、それらの相互理解、それらの目指す共通の方向なども考慮します。それはもはや、生きて活動するものを死んで動かないものによって説明するのではなく、至る所に生命活動を見出し、より高い生命活動の様式へのひたすらなる憧憬によって、[世界を構成する] もっとも基礎的要素群を定義するのです。それはより高いものをより低いものへと導くのではなく、その反対に、より低いものをより高いものへと導くのです。それは、それ本来の意味において、精神論的方法なのです。」⁽³⁶⁾。

実証主義的唯心論は、ジャンコーのこの用語と、ロニーを引き合いに出すブルールのおかげで、次の引用にはっきりと透けて見えます。「精神の存在は、[中略] 力^(*)の存在よりも不確実ではないし、力の存在を否定しようとする者もないだろう。私たちが思考を[中略] 有しているということは、もっとも確かな事実である。身体が本当に自分自身であるということを疑うことは、精神の中に、私たちの個性性を成り立たせるのに不可欠な要素を認めないよりも、明らかに容易であるだろう」(p. 229)。

ロニーの唯心論が実証主義的だという以上に明確に述べることはできません。『意識的方法』の分析を通じて私が示したのは、ロニーが、「20世紀と21世紀初頭を貫くであろう一つの問題提起の基礎、つまり、科学的知が展開してゆく中で、主客の関係のそれを築いているということ」です。これ

らの用語を用いて、ロニーが自身の思考方法を表明することは決していないのですが、主題となっているのはまさにそのことで、青年期から彼を駆り立てていたのはまさにその問いなのだと言えるでしょう」⁽³⁷⁾。

この対談により、曾祖父の著作の一部における現代的側面を主張することができました。ロニーは、もちろん民族誌学の草分けであり、フランスにおける日本研究の創設者です。が、翻訳者たちが皆そうしなければならぬように、自らの研究の中で、媒介、解釈、翻訳の間でバランスを見いだそうとしたという点において、翻訳の精神における改革者でもあります。また、精神において「目標テキストを重視する者」であり、さらには、哲学者の称号を一度も求めなかったとしても、実証主義的唯心論者でもあります。

もっとも、精神の概念、民族の精神、人間の精神、世界靈魂の概念についてのロニーの研究は、当然、それ自体で、深く掘り下げるべき研究だと言えるでしょう…実行に移しましょう！

CB: この対談に応じてくださったことに感謝いたします。ベネディクト・ファブル＝ミュラーさんの証言により、歴史に刻まれた先覚者の身内の記憶を頼りに、他に類のない研究のスタートが切られ、この人物をめぐるいかに学術的ネットワークが築かれ、ロニーに関するここ数年の諸学術研究において、そのネットワークがどのように活用されてきたのか、そのプロセスを垣間みることができました。この鼎談そのものがこのネットワークを動員した成果です。それから、フィリップ・ロスシュタインのお話が、極めて刺激的であったことを強調したいと思います。ロスシュタインさんは、ロニーは単に文化の運び手ではなく、なによりも科学者であったことを私たちに思い出させてくれました。ロニー研究において、とくに日本に関連したものにおいて、彼の様々な活動の成果の根底にある科学的方法を覆い隠し、成し遂げられたものを強調することもできるでしょう。この十数年は、ロニーの著作を再発見する段階であっただけに、この悪いくせに陥るのはより簡単です。ロスシュタインさんのお話ははたがって、ロニーに関心のあるすべての研究者らに対して、注意を喚起してくれています。また、ロニーの著作への理解を一層深めるために今後取りかかるべきことを教えてくれる、研究の道しるべと見なすこともできるでしょう。

(注)

- (1) 二人はレオン・ド・ロニーの曾孫。
- (2) FABRE-MULLER Bénédicte, LEBoulleux Pierre et ROTHSTEIN Philippe, *Léon de Rosny : de l'Orient à l'Amérique*, Presses universitaires du Septentrion, 2014.
- (3) *Ibid.*, pp. 300-307.
- (4) KORNICKI Peter, *La Bibliothèque japonaise de Léon de Rosny*, Lille, Bibliothèque municipale de Lille, 1994.
- (5) 山口昌子『パリの福澤諭吉 - 謎の肖像写真をたずねて』、中央公論新社、2016.
- (6) FABRE-MULLER, LEBoulleux, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 259-267.
- (7) BRIOT Alain, *Monstres et prodiges dans le Japon d'Edo, Présentation, traduction et commentaires de l'album Tayasu 84*, Collège de France - Institut des Hautes Études Japonaises, 2013.
- (8) CHAILLEU Luc, 1986年にパリ第8大学ヴァンセンヌ校で社会学修士を取得。*L'Ethnographie* n° 108, 1990, p. 85.
- (9) PRÉVOST URKIDI Nadia, 2007, p. 489 ; p. 591 と FABRE-MULLER, LEBoulleux, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 285-299.
- (10) 出版ならびに、美術書・版画工房の展示の責任者。
- (11) 国立印刷所勤務の傍ら、小規模の図書館を運営。さらに、印刷の歴史についての書籍を発表する等、国立印刷所の歴史に造詣が深い。
- (12) 国立印刷所の彫刻師。印刷用の父型製作にまだ携わっている数少ないの職人の一人。
- (13) FABRE-MULLER, LEBoulleux, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 49.
- (14) Bibliothèque universitaire des langues et civilisations (BULAC、大学間共同利用言語・文化大学図書館)。
- (15) 図書館の日本コレクションの責任者。
- (16) 松原秀一 (1930-2014)、慶應義塾大学名誉教授、フランス文学者。慶應義塾大学に保管されている福澤諭吉関連の文献を生かし、ロニーと福沢の出会いと友好関係に焦点を当てた「フランス東洋学とレオン・ド・ロニー —福澤諭吉との関連において」(『福澤手帳』、第2号、1974年、pp. 1-10) を発表した。その後、ロニーの伝記的な研究も行い、「レオン・ド・ロニ略伝」(『慶應塾大学福沢研究センター近代日本研究』第3号、1986 年、pp. 1-56) を発表する。
- (17) ROTHSTEIN Philippe, « Léon de Rosny de 1854 à 1904 : La vie de la langue ou la mort de l'ethnologie », *La Tribune internationale des langues vivantes* n° 49, 2010/11.
- (18) BELOUAD Chris, « [1872] Rencontre avec un bonze réformateur : Mokuraji Shimaji, moine japonais résistant au shintoïsme » ; « Parcours d'un pionnier à l'héritage controversé : des études japonaises au 'Bouddhisme éclectique' » ; « Bibliographie des travaux en japonais sur Léon de Rosny » ; in FABRE-MULLER, LEBoulleux, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 105-107 ; pp. 199-213 ; pp. 393-396.

- (19) SIBEUD Emmanuelle, « Marcel Mauss : “Projet de présentation d’un bureau d’ethnologie” (1913) », *Revue d’histoire des sciences humaines* n°10, 2004/1, pp. 105–11. (以下のURLにより参照可能 : <http://www.cairn.info/revue-histoire-des-sciences-humaines-2004-1-page-105.htm>) .
- (20) *Ibid.*, note 21, p. 109 (<http://www.cairn.info>上の論文の書誌情報を表記).
- (21) ROSNY Léon de, *Premières notions d’ethnographie générale*, Maisonneuve et C. Leclerc, 1885 (<https://archive.org/>で「Léon de Rosny」で参照可能。引用はp. 1. 引用のページ数はそれぞれ電子ファイルの番号に対応している)。
- (22) RIVIALE Pascal, « L’américanisme français à la veille de la fondation de la Société des Américanistes », *Journal de la Société des américanistes*, tome 81, 1995, pp. 207–229.
- (23) *Ibid.*, note 24. 民族誌学の規約は *Annuaire de la Société d’ethnographie*, 1863, p. 2にて確認できる。
- (24) *Ibid.*, note 25. ロニーの「信条」は *Actes de la Société d’ethnographie*, 2^e série, I, 1865, p. 161にて確認できる。
- (25) *Ibid.*, pp. 217–218.
- (26) STAUM Martin, « Nature and Nurture in French Ethnography and Anthropology 1859–1914 », *Journal of the History of Ideas*, volume 65, n°3, 2004/7, pp. 475–495. 引用はp. 495. 字義どおりには、「フランス民族誌学と人類学における自然と教育、1859–1914」であるが、ここではもちろん、「自然と文化」と解釈すべき。(以下のURLにより参照可能 : www.jstor.org/stable/3654142).
- (27) *Ibid.*, p. 479, note 30 : ROSNY, « Conditions pour être ethnographe », *Revue orientale et américaine*, 2^e série, 3, 1888, p. 207.
- (28) LADMIRAL Jean-René, *Sourcier ou cibliste. Les profondeurs de la traduction*, Paris, Les Belles Lettres, collection Traductologiques, 2014 ; 2^e édition revue, 2016.
- (29) ROSNY Léon de, *Si-Ka-Zen-Yō, Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon*, préf. par Ed. Laboulaye, Paris, Maisonneuve Frères, 1871 (Gallicaによるデジタル版) . 『詩歌選集』は、ロニー自身がつけた日本語題名。
- (30) ROTHSTEIN Philippe, « Un traducteur à la recherche des origines. L’Anthologie japonaise : essai d’identification de l’âme japonaise », in FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 249.
- (31) THOMAS D’AQUIN, *Liber de causis*, proposition 10 : *Somme théologique*, I, 75, 5c ; in LADMIRAL (2016), *op. cit.*, p. 109.
- (32) LADMIRAL (2016), *op. cit.*
- (33) ROSNY Léon de, *La Méthode conscientielle, essai de philosophie exactiviste*, Paris, F. Alcan, 1887.
- (34) JANICAUD Dominique, *Ravaisson et la métaphysique : Une généalogie du spiritualisme français*, Paris, Vrin, Bibliothèque d’histoire de la philosophie,

- 2000, p. 128.
- (35) FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 225.
- (36) BERGSON Henri, « La vie et l'œuvre de Ravaisson », アカデミー・フランセーズでの演説、のち、*La pensée et le mouvant*, Paris, 1934, chapitre IXに再録。日本語訳：『思考と動くもの（新訳ベルクソン全集7）』、竹内信夫訳、白水社、2017、pp. 331-332.
- (37) FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 215.
- (*) ルブロー氏によれば、ロニーが言う「力」（« force »）とは、現代の用語で言う「自然界の4つの力」（« les quatre forces fondamentales de l'univers »）に相当するものである。FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 228, note 7.

Réévaluation de Léon de Rosny, précurseur dans plusieurs
disciplines des sciences humaines :

Un entretien avec Bénédicte FABRE-MULLER et

Philippe ROTHSTEIN

Chris BELOUAD (Traduction japonaise : Yoshiko TERA0)

Bénédicte FABRE-MULLER et Philippe ROTHSTEIN¹, vous êtes tous deux descendants de Léon DE ROSNY (1837-1914), fondateur des études japonaises en France. Il y a quelques années, vous avez redécouvert l'étendue des activités de votre aïeul. Ayant exercé respectivement les métiers d'éditrice et d'enseignant-chercheur, vous avez mis vos compétences professionnelles au service d'une remise en lumière de Rosny. Ce projet aboutit en 2014 à la publication d'un ouvrage collectif, *Léon de Rosny : de l'Orient à l'Amérique*². Ce livre propose une biographie de Rosny, un témoignage s'appuyant sur des documents familiaux rares, un recueil d'articles scientifiques ainsi qu'une bibliographie franco-japonaise.

Avant d'aller plus loin, il faut dire que votre projet s'inscrit dans un contexte plus large, celui de la réévaluation et de la revalorisation des travaux de Rosny, entreprises depuis quelques décennies par des chercheurs français comme japonais, après un siècle d'éclipse. Je m'inscris moi-même dans ce mouvement, puisque j'ai publié plusieurs articles sur son parcours et son travail. Mais votre position est singulière. En tant que descendants de Léon de Rosny, vous avez nécessairement un rapport particulier à l'objet de vos travaux, un rapport différent de celui des autres chercheurs. Vous avez aussi accès à des documents familiaux, dont

certains rares, ainsi qu'à des récits familiaux. Dans cet entretien, je voudrais donc d'abord recueillir votre témoignage sur la façon dont vous êtes allés sur les traces de Rosny. Dans une seconde partie, Philippe ROTHSTEIN, universitaire spécialiste de linguistique et de traductologie, partagera avec nous sa réflexion sur l'œuvre de Rosny, et plus particulièrement le rapport de Rosny à la langue et à la traduction.

Chris BELOUAD (ci-dessous CB) : Pourquoi et comment avez-vous décidé un jour d'entreprendre ce projet éditorial ?

Bénédicte FABRE-MULLER (ci-dessous BFM) : Nous souhaitions depuis longtemps en savoir plus sur Léon de Rosny, mort en 1914, mais le « déclic » a eu lieu paradoxalement aux Amériques et non en Orient. D'une part à Harvard lorsque nous avons trouvé une soixantaine de titres de Rosny dans les fonds de la Widener Library et d'autre part lors d'un voyage familial au Mexique en 2011, quand notre guide historien nous a parlé d'un certain Rosny qui étudia et publia en 1888 l'un des quatre codex mayas. Dès notre retour en France j'ai cherché, mais n'ai pas trouvé de bibliographie de notre aïeul. Alors je me suis mise au travail. Cette bibliographie établie, j'ai demandé à deux de mes proches de se joindre à moi pour aller plus loin et nous nous sommes mis en quête de « témoins » auxquels nous l'avons adressée.

Les premiers à répondre à notre appel furent, à la Bibliothèque municipale de Lille, les conservateurs Jean VILBAS et Laure DELRUE VANDENBULCKE, en décembre 2011. Lille, évidemment, parce que Léon de Rosny est né à Loos, près de Lille. Et surtout parce qu'il a légué en 1906 et 1911 à la Ville une grande partie de sa bibliothèque, plus de mille ouvrages dont 395 en japonais, 512 en chinois, 210 en langues occidentales. C'est un fabuleux fonds auquel le public n'a malheureusement pas accès et qui, selon la clause précisée par Rosny dans son legs, ne doit pas sortir de la Bibliothèque municipale de Lille³.

CB : Il existe un catalogue de la partie japonaise de ce fonds, établi par le

japonologue anglais Peter KORNICKI⁴ (Université de Cambridge). Un meilleur accès à ce catalogue, par exemple sous une forme numérique mise en ligne, serait d'ailleurs souhaitable pour valoriser ce fonds et faciliter le travail des chercheurs. De plus, un catalogue du fonds chinois est en cours d'établissement par des chercheurs de l'Université Nishōgakusha. Ce fonds, sans sortir physiquement des murs de la Bibliothèque municipale de Lille, devrait bientôt devenir accessible au public après avoir « dormi » plus d'un siècle. Après ces repérages bibliographiques, quelle a été votre seconde étape ?

BFM : C'était début janvier 2012, à Paris. Nous avons rendez-vous à l'École des hautes études en sciences sociales avec Patrick BEILLEVAIRE et Guillaume CARRÉ. Ces deux spécialistes du Japon qui connaissent très bien Rosny, nous font part de leur intérêt pour notre bibliographie. En tant que descendants du savant, nous nous interrogeons sur notre démarche, en quête de l'ampleur, du sens et de la portée de l'œuvre de Rosny. Sa vie et son œuvre intéresseraient-elles d'autres publics que sa famille ? Ils répondent par l'affirmative nous donnant en quelque sorte le feu vert pour nous attaquer à ce chantier.

CB : Avez-vous rencontré d'autres personnes impliquées dans les recherches sur Rosny ?

BFM : Au fur et à mesure de nos travaux le réseau s'élargit. Nous nous entretenons avec de nombreuses personnes parmi lesquelles YAMAGUCHI Shōko, ancienne directrice du bureau parisien du *Sankei Shimbum*, qui a publié un ouvrage sur le séjour de FUKUZAWA Yukichi (1835-1901) à Paris⁵ ou encore Alain BRIOT, médecin qui comme Rosny a appris les japonais seul et a notamment participé à notre ouvrage⁶ et a aussi traduit un ouvrage de TAYASU Narimasa (1779-1848)⁷.

Au printemps 2012, nous établissons le contact avec Luc CHAILLEU, auteur de l'étude « Léon de Rosny. Première figure des études japonaises en France. Éléments de bio-bibliographie »⁸. « Je suis content que Léon de Rosny continue de susciter autant d'intérêt, nous écrit-il. Quand j'avais commencé cette recherche de maîtrise, il fallait vraiment

« déblayer le terrain », mais j'avais trouvé tous ces mois en bibliothèques et archives passionnants. Rosny était vraiment une figure intéressante. »

CB : Je me permets de vous interrompre pour dire que l'on peut considérer Chailieu comme le pionnier des études sur Rosny à l'époque contemporaine. Je me suis moi-même beaucoup appuyé sur son travail au début de ma thèse de doctorat.

BFM : Comme vous le savez, Chailieu n'a pas poursuivi ses travaux sur Rosny, mais il a évoqué une piste qui l'intéressait. Voici ce qu'il nous en a dit : « Il s'agit de tout ce qui tourne autour du "spiritualisme éclectique" et j'avais fait un rapprochement entre Rosny et Victor COUSIN (1792-1867). J'avais dans l'idée de développer cette étude. (...) ».

CB : Cette piste mentionnée par Chailieu me semble, à moi aussi, constituer également une part importante de l'avenir des recherches sur Rosny. Son travail d'enseignement du japonais, son œuvre sur le Japon commencent à être mieux connus. Mais il reste à explorer son rapport au fait religieux, et à des questions qui y sont liées. Mais revenons au réseau mis en place autour de Rosny...

BFM : Pour nous aiguiller sur les activités de Rosny dans d'autres domaines que les études japonaises, nous avons cherché d'autres experts. Ainsi dès janvier 2012 nous sommes contactés par Nadia PRÉVOST URKIDI, spécialiste de l'américanisme scientifique. Elle nous parle notamment de la rencontre entre le savant Charles Étienne BRASSEUR DE BOURBOURG (1814-1874) et le jeune Rosny, alors âgé de 16 ans⁹.

CB : Ces entretiens avec Nadia Prévost Urkidi vous ont donc permis de couvrir un aspect important de l'œuvre de Rosny. Je crois qu'avant de vous lancer dans la rédaction de votre ouvrage, vous vous êtes entourés d'autres spécialistes.

BFM : En effet quelques mois plus tard, nous sommes reçus à l'Imprimerie nationale par Lucile THEVENEAU¹⁰, Didier BARRIÈRE¹¹ et Nelly GABLE¹² qui nous communiquent les lettres de Rosny et du sinologue

Jules Mohl (1800-1876). Avec cette institution, c'est une histoire fascinante. Le 28 mai 1854, Rosny, alors âgé de 17 ans, écrit au directeur de l'Imprimerie impériale, pour lui proposer ses services comme conseiller pour les poinçons japonais. C'est Jules Mohl, inspecteur de la typographie orientale, qui lui répondra le 22 juin, positivement¹³. Cette collaboration durera trente ans.

CB : Dans quels autres lieux prestigieux vos investigations vous ont-elles conduits ?

BFM : Au long de 2012-2014, nous fréquentons de nombreux hauts lieux comme le Muséum national d'histoire naturelle, le musée Guimet, le musée du Quai Branly et le Collège de France où nous avons rendez-vous avec Jean-Noël ROBERT. Il nous confirme, lui aussi, le bien-fondé de notre entreprise et nous donne de nombreux contacts. Cette entrevue est évidemment déterminante dans notre quête de légitimité sur la publication d'un ouvrage sur Rosny.

Nous nous rendons de nombreuses fois, bien sûr, à la Bibliothèque nationale. Ainsi Véronique BÉRANGER, chargée des collections japonaises au département des Manuscrits à la BnF Richelieu, nous guide au long de nos recherches. Elle connaît bien, elle aussi, Rosny. Sa thèse (2000) porte en effet sur « Japonisme et érudition : le livre japonais dans les collections d'Auguste LESOUËF (1829-1906) ». Le bibliophile Lesouëf est à la fois l'ami proche et le mécène de Rosny. Il l'accompagne dans ses voyages (Espagne, Roumanie, etc.), finance ses rêves chimériques d'édition, de reliure, d'achats de livres, etc.

CB : En mai 1868, Rosny est nommé titulaire de la première chaire de japonais à l'École des langues orientales. Quel souvenir a-t-il laissé dans l'enseignement de la langue et de la civilisation japonaises en France ?

BFM : Il demeure très présent chez les universitaires, les chercheurs comme chez les étudiants dans cette célèbre école. En juin 2012, à la Bulac¹⁴, Pascal HURTH¹⁵ nous pilote, nous fait connaître l'important fonds japonais, répond à nos demandes, découvre même un *Cours de japonais*

manuscrit inédit de 1869, et nous présente à d'éminents professeurs de langues orientales, tous familiers de Rosny dont François MACÉ, professeur à l'Inalco, qui rédigera la préface de notre livre.

A Lille, Noriko BERLINGUEZ-KÔNO, professeure des universités à l'Université de Lille nous reçoit. Son implication dans notre projet est précieuse. Elle organisera deux symposiums autour de Rosny : en 2015, « Genèse des études japonaises en Europe : autour du fonds Léon de Rosny », et en 2018, « La circulation des savoirs entre l'Asie et l'Europe au temps de Léon de Rosny ».

CB : Je crois que vous avez aussi échangé avec MATSUBARA Hideichi¹⁶ ?

BFM : Oui, dès le début de nos travaux nous avons voulu correspondre avec lui. Nous lui avons envoyé notre bibliographie et l'article « Léon de Rosny de 1854 à 1904 : La vie de la langue ou la mort de l'ethnologie¹⁷ ». Dans un courriel du 7 mars 2012, il nous écrit : « Vous m'avez fait un magnifique cadeau d'anniversaire en m'envoyant le précieux article de M. Rothstein, car je suis né le 7 mars 1930 à la Tronche (Isère), j'ai donc aujourd'hui 82 ans ». Dans un autre mail, Matsubara Hideichi évoque Fukuzawa qui « dans son Autobiographie, parle de son séjour en France (en 1862) et de ses entretiens avec Léon de Rosny : « Voilà bien l'homme le plus étonnant que j'ai rencontré en Europe » dit Fukuzawa qui était émerveillé du courage de Léon de Rosny à venir voir les Japonais jusqu'à Saint-Petersbourg en payant 480 francs ». En fait les frais de voyage ont été financés par le Ministre des affaires étrangères par une circonstance amusante, ajoute M. Matsubara : « J'en ai fait un petit article que je vous enverrai, bien qu'il soit écrit en japonais. J'y joindrai un catalogue d'exposition Fukuzawa dans lequel est reproduite une lettre en anglais de Fukuzawa adressée à Léon de Rosny. Nous conservons un carnet de voyage de Fukuzawa dans lequel Léon de Rosny avait laissé des autographes ».

Au Japon également, nous avons découvert qu'un jeune Français, vous Chris Belouad !, travaillait comme nous à faire « revivre » Rosny. Vous aviez déjà publié plusieurs articles dans des revues japonaises et

françaises. C'est le début entre nous de longs et fructueux échanges qui durent encore aujourd'hui. Vous avez contribué à enrichir notre ouvrage¹⁸.

Ce réseau tissé autour de Léon de Rosny a comporté bien d'autres rencontres qui devraient contribuer à remettre en lumière la singulière personnalité et la diversité des travaux de notre aïeul.

CB : Je voudrais maintenant interroger Philippe Rothstein qui a engagé une réflexion sur la pertinence actuelle de nombre des travaux de son aïeul dans les domaines de l'ethnologie, de la traduction et du positivisme spiritualiste. En 2010, vous avez publié un article, que nous avons déjà mentionné, « Léon de Rosny, de 1854 à 1904, La vie de la langue ou la mort de l'ethnologie ». Quel était l'objectif de cet article ?

PR : Nous avons entrepris de réévaluer les travaux de notre aïeul en regard de l'état actuel de la science dans certains des domaines qu'il a abordés et en particulier de tenter d'esquisser les bases d'une filiation possible entre le fondateur de l'ethnographie moderne qu'est Marcel MAUSS (1872-1950) et le co-fondateur de la Société d'ethnographie de Paris que fut, dès 1859, Léon de Rosny. Cette filiation s'avère en fait nécessaire lorsque l'on considère les conditions de la renaissance de la Société d'ethnographie de Paris en 1913 [donc un an avant la mort de Rosny].

Comparons les positions de Léon de Rosny sur l'ethnologie avec trois commentaires qu'Emmanuelle SIBEUD fait sur la question de la renaissance de la Société d'ethnographie de Paris mise en œuvre par Marcel Mauss en 1913 et sur les conditions de sa mise en œuvre¹⁹.

Le vocable « Mauss » introduit chaque citation de son article et celui de « Rosny » introduit les positions du savant. Nous avons choisi de mettre en italiques ceux des passages respectifs de Mauss et Rosny, où les positions seront à apprécier en toute liberté par le lecteur, tant au plan de leur complémentarité que celui de leurs différences.

Rappelons que si Marcel Mauss est un positiviste bon teint et qu'il appelle à une collaboration étroite avec la sociologie, Léon de Rosny est lui un

spiritualiste positiviste, qui appelle davantage à une collaboration avec la philologie, la grammaire comparée et les sciences de l'esprit, la philosophie en particulier.

Notons auparavant que si Emmanuelle Sibeud précise que « la première société d'ethnographie de Paris, fondée en 1859 comme sa rivale la Société d'anthropologie de Paris, a définitivement sombré vers 1902²⁰ », les écrits de Rosny, ses ouvrages publiés et les Actes et le Bulletin de la Société d'ethnographie sont aisément disponibles à l'époque de Mauss, et maintenant numérisés. Ils attestent à l'envi que sa pensée ethnographique n'avait pas disparu des bibliothèques.

- **Mauss.** « Ainsi, son *hésitation entre les termes ethnographie et ethnologie* traduit à la fois *l'espoir d'un renouveau pratique de l'ethnologie devenue culturelle* et la crainte que *l'empirisme des ethnographes l'enferme dans des cadres trop étroits*. Son insistance sur le lien entre ethnographie et domination coloniale est prise dans le même dilemme : comment être utile, donc reconnu et subventionné, tout en préservant l'autonomie de la recherche ? En considérant ce document [Projet de présentation d'un bureau d'ethnologie] comme la réponse de Mauss dans un dialogue d'autant plus complexe qu'il est indirect, on se donne donc les moyens de *comprendre une étape importante de la réorganisation de l'ethnologie française* dans les trois premières décennies du XX^e siècle (p. 105). »
- **Mauss.** « Enfin, *l'importance théorique des « plus récentes et plus honorables recherches de l'école de sociologie*, celles de M. DURKHEIM, de M. LÉVY-BRUHL, et d'autres » justifie l'intervention qu'il demande en faveur de l'ethnographie *puisque'elle fournit à ces travaux leurs matériaux de base* (p. 105-106). »
- **Mauss.** « La création du bureau d'ethnologie doit conduire à une professionnalisation de la pratique ethnographique. Or, il est clair en 1913 qu'elle peut suivre deux chemins dont Mauss organise la convergence : une voie universitaire dans laquelle sont d'ores et déjà engagés ses meilleurs étudiants de l'EPHE et une voie coloniale qui a été frayée par les ethnographes militants de l'Institut ethnographique (p. 108). »

- **Rosny.** « L'Ethnographie est l'étude des Sociétés humaines et de la Civilisation. *Les sociétés humaines, considérées dans leur ensemble, constituent l'humanité.* L'humanité se transforme sans cesse ; elle passe de l'état inculte à l'état policé ; *sa marche ascendante et civilisatrice s'appelle le Progrès.* D'un ordre essentiellement généralisateur, *l'Ethnographie prétend, comme le faisait naguère la philosophie, résulter de la synthèse de toutes les sciences qui ont pour but de rechercher la mission de l'homme et ses destinées*²¹. »
- **Rosny.** Pascal RIVIALE²² note que, selon l'article premier des statuts de la Société co-fondée par Rosny en 1859, « la société avait été instituée dans le but de “*contribuer aux progrès de l'ethnologie, de la linguistique et de l'archéologie, de l'histoire et des sciences de l'ancien et du nouveau monde*” »²³. Il relève ensuite une différence d'une importance considérable, eu égard aux préoccupations de la Société d'anthropologie de Paris menée par Paul BROCA, puisque dans la Société d'ethnographie « la plupart des thèmes abordés touchaient à la linguistique, aux mythes, aux “arts” et, d'une manière plus générale, à tous les éléments jugés susceptibles de permettre de définir *les caractères propres d'une civilisation donnée*. Selon Léon de Rosny, l'âme de la société, il s'agissait de deux domaines d'étude totalement distincts : l'anthropologie était une “science naturelle”, tandis que l'ethnographie était “la science de la destinée humaine”. Les caractères physiques n'en faisaient pas partie ou, plutôt, leur étude n'était pas du ressort de la science ethnographique. Cette mise au point, expression d'un credo²⁴ de Rosny, intervenait à un moment où la société traversait une grave crise identitaire : quel était le rôle de l'ethnographie, quels devaient être ses terrains d'action, quelle était la mission de la société ? Autant de questions qui donnèrent lieu à de houleux débats internes. La ligne défendue par Rosny l'emporta et on assista alors à une exclusion de fait de quasiment toutes références à la raciologie et, plus largement, à l'anthropologie physique²⁵ ».
- **Mauss et Rosny.** Voilà assurément de quoi rapprocher le point de vue résolument novateur de Marcel Mauss et de son orientation sociologique affirmée avec une approche qu'on pourrait qualifier d'œcuménique chez

Rosny pour ce qui ressort des ambitions de l'ethnographie. Néanmoins, son opposition radicale au physicalisme de l'anthropologie de Broca et ses positions extrêmement modérées, compte tenu du contexte d'essor colonialiste de son époque [dont il ne se démarqua pas clairement pourtant] sur la soi-disant supériorité de la « race blanche », en font cependant l'un des anthropologues les moins éloignés de Mauss sur ce point. Si Martin STAUM note certes²⁶ qu'il faudra attendre 1902 pour que Marcel Mauss déclare, à l'École pratique des hautes études, qu'« *il n'existe pas de peuples non civilisés mais seulement des peuples aux civilisations différentes* », dès 1888, pourtant, comme le rappelle Martin Staum, Rosny avait posé que « *ce sont les sociétés et non les races qui mettent en œuvre le progrès et la civilisation*²⁷ ».

Mauss et Rosny furent tous deux directeurs d'étude à l'École pratique des hautes études. Rosny sur « les religions de l'Extrême Orient » (V^e section) et Mauss sur une chaire qu'il trouvait d'ailleurs « bizarrement intitulée “histoire des religions des peuples non civilisés” », comme le note Emmanuelle Sibeud (p. 107). Ils ne furent collègues qu'entre 1901 et 1907. La *Collection chrétienne et byzantine des hautes études* (revue de la section des sciences religieuses de l'EPHE, son rapport sommaire sur les conférences 1906-1907 et le programme des conférences sur l'exercice 1907-1908) mentionne un compte rendu des conférences « religions des peuples non civilisés » par Marcel Mauss et un compte rendu des conférences « religions de l'Extrême-Orient et de l'Amérique indienne » par Léon de Rosny et Georges RAYNAUD. On ne trouve pas trace d'éventuelles relations de travail entre le fondateur de l'ethnologie moderne et Léon de Rosny mais on est en droit de penser qu'ils prenaient connaissance des travaux de leurs collègues de la V^e section, dont Mauss est d'ailleurs devenu le président. Du précurseur et du novateur, voire du rénovateur, l'histoire aura retenu et célébré le nom de ce dernier.

CB : Vous semblez donner à la traduction de *l'Anthologie japonaise*, publiée par Rosny en 1871, un rôle décisif dans l'histoire de la traduction

et de la théorie du processus même de la traduction, qui dispose maintenant d'une science reconnue, la traductologie. Pouvez-vous nous préciser votre point de vue ?

PR : Si nous venons d'aborder le travail de trente ans de Rosny sur la définition même de l'ethnographie et son objet épistémologique, en regard de la rénovation entreprise dès 1913 par Marcel Mauss, nous souhaiterions montrer que ses travaux de traduction et en particulier son *Anthologie japonaise* en 1871 marquent un tournant dans la traduction de ce qu'il est convenu d'appeler les « intraduisibles », si grand est l'écart culturel entre une poésie occidentale, et particulièrement une poésie française, et la poésie japonaise. Les traductions de Rosny s'inscrivent, avant la lettre, dans une optique résolument moderne que nous allons mettre en regard des progrès récents de la science traductologique, en particulier ceux accomplis par Jean-René LADMIRAL²⁸.

CB : Pouvez-vous alors nous résumer la spécificité de Rosny traducteur et nous dire en quoi ses traductions ont des traits qui les rattachent à ceux développés au sein de cette science traductologique, récente puisque c'est après les années 50-60 que l'on commence à s'intéresser à la traduction comme objet de recherche ?

PR : Édouard René LEFEBVRE DE LABOULAYE, préfacier de l'*Anthologie japonaise*²⁹, la première du genre en Europe, caractérise ainsi le produit du travail exceptionnel de Rosny, tel qu'il est offert aux lettrés européens : « Il ne s'agit pas seulement de traduire en français quelques mots d'une langue étrangère. C'est le génie d'un peuple qu'il faut surprendre et transporter en notre pays. Si nous admirons le voyageur qui nous fait le récit des terres lointaines et des peuples inconnus qu'il a visités, combien devons-nous admirer davantage ceux qui amènent chez nous l'étranger lui-même, qui nous font pénétrer, non seulement dans sa maison, mais dans son âme ! ».

La conception qu'a Léon de Rosny de l'ethnographie comme « science de la destinée humaine » implique une recherche incessante des caractéristiques de l'âme d'un peuple en relation avec l'âme du monde.

Cette conception est donc intimement liée aux modalités de traductions qu'il se doit de mettre en œuvre car aucune traduction ne peut, selon Rosny, faire l'économie de la transposition de l'âme du peuple dans le texte cible, cette âme qui se manifeste ou transparait nécessairement dans le texte source, au plus haut point dans le texte source de la poésie. Il saura proposer souvent plusieurs traductions possibles d'un passage, d'un poème. Il fera part de ses doutes dans de multiples notes d'accompagnement. La traduction sera au service de la « science de la destinée humaine » même si le lecteur se voit alors sollicité par le traducteur pour tenir un rôle actif³⁰. Mais c'est dans la traduction-interprétation-médiation de la poésie japonaise que Rosny atteindra à l'intime, à l'invisible, à l'inconnu. Il va au plus difficile et lorsque la médiation passe par le truchement de la poésie, difficulté suprême pour les traducteurs, tous les espoirs sont permis pour les autres formes d'écriture.

Dans sa traduction des poésies japonaises, Léon de Rosny devient homme japonais. Le Japonais qui habite en lui fait de l'homme français, un autre homme, sédimenté par toutes les couches de la matière-langue qui font son *soi-multiple*. Le même et l'autre en un seul homme. On ne sort pas de cette *Anthologie japonaise* sans être devenu un peu le Japonais qu'il veut nous faire découvrir, sans avoir participé à l'échange de nos deux cultures, si improbable, si impossible que cet échange ait pu nous sembler avant de commencer à découvrir ce monument de persévérance et d'ouverture sur l'altérité.

Concernant l'aspect contemporain de l'œuvre traductrice de Rosny, la question est de savoir si chez Rosny, le médiateur ne l'emporte pas finalement sur le traducteur qu'il a été. Je vais faire appel à l'un des pères de la traductologie, Jean-René Ladmiral. Celui-ci reprend un principe de Thomas D'AQUIN et il l'emploie dans le contexte de la traductologie pour insister sur la nécessité d'être « cibliste » plutôt que « sourcier » : « *Quidquid recipitur, ad modum recipientis recipitur* » (« Tout ce qui est reçu est reçu selon le mode du récepteur »)³¹. C'est la dure réalité que toute traduction se doit de prendre en compte et que

d'aucuns ont tendance à oublier, parfois.

En traductologie, la distinction fondamentale que fait Jean-René Ladmiral³² entre « sourciers » et « ciblistes » devrait servir à tous les traducteurs d'instrument de mesure de leur travail. Il fait la distinction entre les traducteurs qui cèdent à « la tentation du littéralisme », qu'il appelle les « sourciers », et ceux qui « acceptent de se soumettre aux exigences du principe de réalité et donc de faire leur deuil de la langue-source, qui (il faut quand même bien le dire !) est irrémédiablement perdue a priori » et qu'il appelle les « ciblistes », cette distinction nous permet sans doute de classer Rosny parmi les « ciblistes » avant la lettre, mais peut-être aussi de le considérer, selon la terminologie de Ladmiral comme un « ultra-cibliste », ce qui, sans être une critique rédhibitoire, n'est pas toujours encouragé en matière de traduction.

En effet, Rosny commente et laisse le lecteur libre de choisir son appropriation de l'âme du peuple en question. Cela facilite incontestablement la médiation, et il joue un rôle remarquable comme médiateur. Mais la traduction, c'est un choix, il faut se décider et Rosny nous fait vivre en direct ses hésitations. Pas toujours certes, mais bien souvent. Suprême honnêteté d'un homme généreux et répétons-le, dans l'offrande à ses contemporains. Il ne se réfugie pas derrière son statut académique. Ses lecteurs peuvent ainsi partager sa réflexion, voire l'enrichir en retour.

CB : Un texte de Rosny intrigue tous ceux qui se sont penchés sur son œuvre, à savoir *La Méthode conscientielle, essai de philosophie exactiviste*³³ (1887). Cet essai est-il dépassé ou bien fait-il partie de ce que vous vous considérez comme encore d'actualité dans son œuvre ?

PR : Nous avons pu établir un lien substantiel entre Rosny et Henri BERGSON (1859-1941). Le grand philosophe vitaliste a redonné ses lettres de noblesse au *spiritualisme* et Dominique JANICAUD (1937-2002)³⁴ a popularisé la formule de *positivisme spiritualiste* dont il souligne à quel point elle caractérise l'œuvre de Félix RAVAISSON (1813-1900) telle que revue par Bergson. Elle s'applique également à la *Méthode*

conscientielle de Rosny ; Pierre LEBoulleux³⁵ développe une analyse pénétrante d'un texte unique en son genre (on ne trouve d'ailleurs l'adjectif « conscientiel(le) » dans aucune œuvre philosophique répertoriée sur internet), même si les présupposés philosophiques de notre ethnographe sous-tendent en fait l'esprit dans lequel il a conduit une grande partie de ses travaux. Leboulleux éclaire le fait que, pour Rosny, conscience et esprit sont véritablement indépendants de la matière, ce qui en fait d'abord un véritable spiritualiste.

La formule utilisée par Rosny comme sous-titre de son traité est « *essai de philosophie* exactiviste ». Ce sous-titre le distingue comme penseur du penseur positiviste ainsi que le note Pierre Leboulleux (p.228) : « Léon de Rosny ... choisit son "parti", l'exactivisme » mais le choix de ce qualificatif le met néanmoins au rang des philosophes spiritualistes *positivistes*. On ne peut plus opposer de la même façon positivisme et spiritualisme dès lors qu'on accole à ce dernier le qualificatif de *positiviste*. La réalité de l'esprit est bien là et la métaphysique devient alors *positive*. L'extrait ci-dessous du grand philosophe et la citation qui suit de Léon de Rosny, tirée de l'article de Leboulleux, permettent de montrer que, si Rosny a certes été un précurseur de l'ethnographie moderne, il demeure également un exemple contemporain des précautions épistémologiques qu'un authentique chercheur en sciences humaines doit prendre lorsqu'il formule ses hypothèses sur le lien entre matière et esprit. Il ne sera pas positiviste mais il sera, avant la lettre [de Bergson et de Janicaud] un spiritualiste positiviste.

En faisant l'éloge de Ravaisson, Bergson fait également celui de sa propre contribution dans l'histoire de la philosophie, en grand philosophe vitaliste qu'il est, mais, sans le savoir et c'est notre devoir de le montrer, il fait également celui de Rosny. « Reprenant et élargissant l'idée maîtresse de son Essai, il [Ravaisson] distinguait deux manières de philosopher. La première procède par analyse ; elle résout les choses en leurs éléments inertes ; de simplification en simplification elle va à ce qu'il y a de plus abstrait et de plus vide. Peu importe d'ailleurs que ce travail d'abstraction soit effectué par un physicien qu'on appellera mécaniste ou

par un logicien qui se dira idéaliste : dans les deux cas, c'est du matérialisme. L'autre méthode ne tient pas seulement compte des éléments, mais de leur ordre, de leur entente entre eux et de leur direction commune. Elle n'explique plus le vivant par le mort mais, voyant partout la vie, c'est par leur aspiration à une forme de vie plus haute qu'elle définit les formes les plus élémentaires. Elle ne ramène plus le supérieur à l'inférieur mais, au contraire, l'inférieur au supérieur. C'est, au sens propre du mot, le spiritualisme »³⁶.

Le spiritualisme *positiviste* transparaît ici clairement grâce à cette formule de Janicaud, et à Leboulleux qui laisse la parole à Rosny : « L'existence de l'esprit n'est [...] pas plus douteuse que celle de la force, et personne n'aurait idée de nier l'existence de la force. La pensée [...] est la chose que nous possédons avec le plus de certitude. Il serait évidemment plus facile de douter que notre corps est bien nous-même, que de ne pas voir dans notre esprit l'élément nécessaire de notre individualité » (p.229).

On ne peut pas dire plus clairement que son spiritualisme est positiviste. Nous avons montré³⁷ que, par moments, dans sa *Méthode conscientielle*, Rosny « jette les bases d'une problématique qui traversera tout le XX^e siècle et ce début de XXI^e, celle de la relation Sujet-Objet dans la démarche de connaissance scientifique. Si Rosny est loin de formuler sa démarche en ces termes, c'est bien pourtant de cela qu'il s'agit et pourrions-nous dire, c'est bien pourtant cela qui l'agite depuis son adolescence ».

Cet entretien nous a permis de mettre en avant l'aspect contemporain d'une partie de l'œuvre de notre aïeul. Rosny, un précurseur de l'ethnographie moderne bien sûr, le fondateur des études japonaises en France, mais aussi un novateur dans l'esprit de la traduction, cherchant au fil de son travail à trouver l'équilibre entre médiation, interprétation et traduction comme se doivent de le faire tous les traducteurs, un *cibliste* dans l'âme et enfin un philosophe du spiritualisme *positiviste* même s'il n'a jamais revendiqué le titre de philosophe.

Et pourtant ses recherches sur la notion d'âme, âme d'un peuple, âme

humaine, âme du monde mériteraient à elles seules un travail de fond ...
À mettre en œuvre !

CB : Je vous remercie de m'avoir accordé cet entretien. Le témoignage de Bénédicte Fabre-Muller nous a permis d'entrevoir un processus qui a permis, avec pour seul point de départ la mémoire familiale d'un aïeul ayant marqué l'Histoire, de construire un réseau scientifique autour de cette figure, et de mobiliser ce réseau afin de produire ces dernières années des travaux scientifiques concernant Rosny. Cet article étant lui-même le fruit de la mobilisation de ce réseau. Je voudrais ensuite souligner le caractère extrêmement stimulant des réponses de Philippe Rothstein, qui nous rappellent que Rosny n'était pas seulement un passeur de cultures, mais qu'il était aussi et avant tout un scientifique. Dans les travaux concernant Rosny, surtout ceux liés au Japon, il peut être tentant de mettre en avant les accomplissements de Rosny, en occultant la méthode scientifique qui a sous-tendu ces travaux. Il est d'autant plus facile de tomber dans ce travers que nous avons été, ces dix dernières années, dans une phrase de redécouverte de l'œuvre de Rosny. L'exposé de Philippe Rothstein constitue donc un rappel salutaire pour les chercheurs qui s'intéressent à Rosny. Il peut aussi se lire comme une feuille de route des prochains travaux à entreprendre pour mieux comprendre l'œuvre de Rosny.

¹ Arrière-petits-enfants de Léon de Rosny.

² FABRE-MULLER Bénédicte, LEBoulLEUX Pierre et ROTHSTEIN Philippe, *Léon de Rosny : de l'Orient à l'Amérique*, Presses universitaires du Septentrion, 2014.

³ *Ibid.*, pp. 300-307.

⁴ KORNICKI Peter, *La Bibliothèque japonaise de Léon de Rosny*, Lille, Bibliothèque municipale de Lille, 1994.

⁵ YAMAGUCHI Shōko, *Pari no Fukuzawa Yukichi – Nazo no shōzō wo tazunete* [Fukuzawa Yukichi à Paris – questionnements sur un portrait énigmatique] , Chūō Kōron Shinsha, 2016.

⁶ FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 259-267.

- ⁷ BRIOT Alain, *Monstres et prodiges dans le Japon d'Edo, Présentation, traduction et commentaires de l'album Tayasu 84*, Collège de France – Institut des Hautes Études Japonaises, 2013.
- ⁸ CHAILLEU Luc, Maîtrise de sociologie Université Paris VIII Vincennes, 1986. *L'Ethnographie*, automne 1990, n° 108, p. 85.
- ⁹ PRÉVOST URKIDI Nadia, 2007, p. 489 ; p. 591 ; in FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 285-299.
- ¹⁰ Responsable d'édition et des expositions de l'Atelier du livre d'art et de l'estampe.
- ¹¹ Bibliothécaire, auteur, une des mémoires de l'Imprimerie nationale.
- ¹² Un des derniers graveurs de poinçons typographiques à l'Imprimerie nationale.
- ¹³ FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 49.
- ¹⁴ Bibliothèque universitaire des langues et civilisations.
- ¹⁵ Responsable de la collection japonaise de la bibliothèque.
- ¹⁶ MATSUBARA Hideichi (1930-2014), professeur émérite de l'Université Keiō, spécialiste de littérature française. Tirant parti des archives liées à Fukuzawa Yuchi conservées à l'université Keiō, il rédige un article portant sur la rencontre et l'amitié entre Rosny et Fukuzawa : « Furansu-tōyōgaku to Leon do Roni - Fukuzawa Yukichi to no kanren ni oite - [L'orientalisme français et Léon de Rosny – dans le cadre de sa relation avec Fukuzawa Yukichi] », *Fukuzawa Techō* [Carnets de Fukuzawa] , n° 2, 1974, pp. 1-10. Plus tard, il entreprendra des recherches biographiques sur Rosny, et publiera « Leon do Roni ryakuden - [Une biographie de Rosny] », *Keiō Gijuku Daigaku Fukuzawa Kenkyū Centā Kindai Nihon Kenkyū* [Recherches sur le Japon moderne du Centre de recherches Fukuzawa, Université Keiō] , n° 3, pp. 1-56, 1986.
- ¹⁷ ROTHSTEIN Philippe, « Léon de Rosny de 1854 à 1904 : La vie de la langue ou la mort de l'ethnologie », *La Tribune internationale des langues vivantes* n° 49, 2010/11.
- ¹⁸ BELOUAD Chris, « [1872] Rencontre avec un bonze réformateur : Mokurāi Shimaji, moine japonais résistant au shintoïsme » ; « Parcours d'un pionnier à l'héritage controversé : des études japonaises au 'Bouddhisme éclectique' » ; « Bibliographie des travaux en japonais sur Léon de Rosny » ; in FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, pp. 105-107 ; pp. 199-213 ; pp. 393-396.
- ¹⁹ SIBEUD Emmanuelle, « Marcel Mauss : "Projet de présentation d'un bureau d'ethnologie" (1913) », *Revue d'histoire des sciences humaines* n° 10, 2004/1, pp. 105-11. Disponible en ligne : <http://www.cairn.info/revue-histoire-des-sciences-humaines-2004-1-page-105.htm>.
- ²⁰ *Ibid.*, note 21, p. 109 (de l'article sur <http://www.cairn.info>).
- ²¹ ROSNY Léon de, *Premières notions d'ethnographie générale*, Maisonneuve et C. Leclerc, 1885, 116 p. Consultable sur Internet Archive Search creator : "Léon de

- Rosny" (p.1. Les numéros de page de toutes les citations correspondent au fichier numérisé).
- ²² RIVIALE Pascal, « L'américanisme français à la veille de la fondation de la Société des Américanistes », *Journal de la Société des américanistes*, tome 81, 1995, pp. 207-229.
- ²³ *Ibid.*, note 24. Riviale précise que les statuts peuvent être consultés dans : *Annuaire de la Société d'ethnographie*, 1863, p. 2.
- ²⁴ *Ibid.*, note 25. Riviale situe l'origine de ce « credo » de Rosny : *Actes de la Société d'ethnographie*, 2^e série, I, 1865, p. 161.
- ²⁵ *Ibid.*, pp. 217-218.
- ²⁶ STAUM Martin, « Nature and Nurture in French Ethnography and Anthropology 1859-1914 », *Journal of the History of Ideas*, volume 65, n° 3, 2004/7, pp. 475-495. p. 495 pour la citation. Littéralement, « Nature et éducation dans l'ethnographie et l'anthropologie française, 1859-1914 » mais il faut bien sûr l'interpréter ici comme « nature et culture ». Disponible en ligne : www.jstor.org/stable/3654142.
- ²⁷ *Ibid.*, p. 479, note 30 : ROSNY, « Conditions pour être ethnographe », *Revue orientale et américaine*, 2^e série, 3, 1888, p. 207.
- ²⁸ LADMIRAL Jean-René, *Sourcier ou cibliste. Les profondeurs de la traduction*, Paris, Les Belles Lettres, collection Traductologiques, 2014 ; 2^e édition revue, 2016.
- ²⁹ ROSNY Léon de, *Si-Ka-Zen-Yō, Anthologie japonaise, poésies anciennes et modernes des insulaires du Nippon*, préf. par Ed. Laboulaye, Paris, Maisonneuve Frères., 1871 (édition numérisée par Gallica).
- ³⁰ ROTHSTEIN Philippe, « Un traducteur à la recherche des origines. L'Anthologie japonaise : essai d'identification de l'âme japonaise » ; in FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 249.
- ³¹ THOMAS D'AQUIN, *Liber de causis*, proposition 10 : Somme théologique, I, 75, 5c ; in LADMIRAL (2016), *op. cit.*, p. 109.
- ³² LADMIRAL (2016), *op. cit.*
- ³³ ROSNY Léon de, *La Méthode conscientielle, essai de philosophie exactiviste*, Paris, F. Alcan, 1887.
- ³⁴ JANICAUD Dominique, *Ravaisson et la métaphysique : Une généalogie du spiritualisme français*, Paris, Vrin, Bibliothèque d'histoire de la philosophie, 2000, p. 128.
- ³⁵ FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 225.
- ³⁶ BERGSON Henri, « La vie et l'œuvre de Ravaisson », discours à l'Académie française, repris in *La pensée et le mouvant*, Paris, F. Alcan, 1934, ch. IX.
- ³⁷ FABRE-MULLER, LEBoulLEUX, ROTHSTEIN (2014), *op. cit.*, p. 215.

【執筆者紹介】

宮 里 厚 子	琉球大学国際地域創造学部准教授
関 根 仁	渋沢史料館学芸員
小 寺 瑛 広	松戸市戸定歴史館研究員
木 村 哲 也	北海道教育大函館校准教授
クリス・ベルアド	関西学院大学文学部准教授

(掲載順)

編 集 後 記

2018年6月23日（土）に全国大会が行われた神戸松蔭女子学院大学にて総会が開催され、会長が清水勲先生から新会長の池村俊郎先生に引き継がれた。それと共に他の役員及び事務局の体制にも大幅な異動があった。清水先生を始めとしてそれまで当学会の活動にご尽力された先生方に感謝申し上げ、今後も引き続き貴重なご意見を賜りたいと思う。

2019年1月6日（日）に清水前会長の前任の会長であった市川慎一先生が不帰の人となられた。個人的には、2014年7月に南米チリへ研究の旅にご一緒したことなどもあり、幾多のことが思い出される。取分け、フランス語やスペイン語で夢を見たとのお話が印象深い。優れた研究者のご永眠に衷心からお悔やみ申し上げる。

今号も特色ある研究の成果に恵まれ、嬉しく思う。最終的には「論文」の形式で発表されることが望ましいと思われるが、日仏交流に関する原稿であれば広義に解釈してできるだけ多くの研究成果を本誌に掲載できるように願っている。

なお、前号（第44号）に誤植があったので、次のとおりお詫びして訂正する。

<58頁15行目「酒井卯三郎」→「清水卯三郎」>

<84頁5行目「樟家重敏」→「楠家重敏」>

次号（第46号）への執筆を希望する旨の連絡をお待ちしている。会員諸氏のご健筆に期待したい。締切りは2019年9月末日であり、原稿提出の締切りは12月末日である。（T）

学 会 記 録

月例研究発表会

2018年(平成30年)10月～2019年(令和元年)5月

期 日	回数	題 目	発 表 者	会場
2018.10.20	492	詩人教授の系譜	木 村 哲 也	N
12.15	493	ロラン・バルトと俳句 —新たな形式の模索のために—	石 川 美 子	N
2019. 1.26	494	日本におけるフランス革命研究史	水 野 延 之	N
3.23	495	川島忠之助遺稿にみる19世紀末日欧交流の 表と裏	川 島 瑞 枝	N
5.25	496	一明治人の見た普仏戦争	横 堀 恵 一	N

会 場：N = 日仏会館 恵比寿（5階洋室）

◇第42回日本仏学史学会全国大会

日 時 2018年6月23日（土） 10時00分～ 17時45分

会 場 神戸松蔭女子学院大学 教室棟7号館 711号教室

〒657-0015 兵庫県神戸市灘区篠原伯母野山町一丁目2-1

	総合司会	加 藤 豊 子
開会の辞		清 水 勲
神戸松蔭女子学院大学長挨拶		待 田 昌 二
関西実行委員会委員長挨拶		伊 川 徹
○研究発表	司会	浜 田 泉
・「生野銀山お雇いフランス人と日仏植物交流」		白 井 智 子
・「若きフランス軍人ルイ・クレットマンが見た日本」		中 津 匡 哉
・「駐日フランス大使ポール・クロードルの国際秩序観 ー日中関係をプリズムとして」		学 谷 亮
・「1880年におけるフランス極東艦隊フルニエ(Fournier) 中佐の朝鮮国情調査について」		宮 崎 善 信

(昼 食)

○シンポジウム

「神戸開港とフランス150年」	司会	伊 川 徹
・「ド・リュシイ・フォサリウ領事ー神戸・パリ・1900年」		谷 口 義 子
・「明治期の食の文明開化と神戸英国領事館の 西洋料理本について」		梶 原 苗 美
・「大阪・神戸居留地とG.ビゴー」		清 水 勲

パネル・ディスカッション	ディスカサント	池 村 俊 郎
		中 村 茂
		津 田 睦 美

閉会の辞		池 村 俊 郎
------	--	---------

午前の部 研究発表者・発表内容紹介（敬称略）

白井 智子 「生野銀山お雇いフランス人と日仏植物交流」

◆略歴（開会時・以下同じ）：神戸大学大学院国際文化科学研究科博士後期課程修了，博士（学術），グルノーブル大学専任講師，姫路獨協大学准教授，兵庫県立大学客員教授を経て現在，姫路日仏協会会長，神戸大学・立命館大学講師，神戸大学研究員ほか，2010-2012年日本仏学史学会副会長。

◆発表内容：明治元年，殖産興業政策の下，生野銀山刷新のために明治新政府のお雇い外国人第1号として採用されたフランス人技師ジャン＝フランソワ・コワニエ，鉱山開発の業績は周知であるが，それ以外の貢献についてはこれまで未調査で知られていない。この度，当時のフランスの植物雑誌等の調査により，コワニエら仏人たちの手記を発見した。入手した資料等をもとに，お雇いフランス人たちの新たな一面や植物を通じた兵庫とフランスとの交流について考察する。

中津 匡哉 「若きフランス軍人ルイ・クレットマンが見た日本」

◆略歴：2018年，パリ第7大学において博士号取得。専門は19世紀後半の日仏交流史で，主にフランスに残された公文書，文献などの史料を用い，日本とフランスの多方面にわたる交流を研究している。特に博士論文は，幕末と明治初期にフランスから派遣された陸軍軍事顧問団をテーマに執筆した。

◆発表内容：明治初期にフランス軍事顧問団の一員として日本にやってきて，陸軍士官学校で測量学の授業を担当したルイ・クレットマンが2年間の滞在中に家族に宛てて送った手紙，日記，写真がコレージュ・ド・フランス，日本学高等研究所（Institut des Hautes Études Japonaises）に残されている。この史料に含まれる文書は，2015年，書籍として出版されたのだが（Deux ans au Japon, 1876-1878 : journal et correspondance de Louis Kreitmann, officier du génie），本発表では，この史料を用いて，若きフランス軍人が，その2年の滞在中に見た日本という国に対する視点や，そこで出会った日本人・外

国人たちとの人間模様を紹介したい。

学谷 亮 「駐日フランス大使ポール・クロードルの国際秩序観—日中関係をプリズムとして」

◆略歴：慶應義塾大学文学部仏文学専攻卒業。東京大学大学院総合文化研究科修士課程、パリ第4大学Master2修了。クロードルを中心とする近現代フランス文学、戦間期の日仏関係史を専攻。現在、創価大学教育・学習支援センター助教（日本語アカデミック・ライティング担当）。

◆発表内容：本年、生誕150年を迎えるポール・クロードル（1868-1955）は、駐日フランス大使（1921-1927）時代、日仏会館設立に代表される多くの業績を残した。当時彼はどのような国際秩序観をもって任務にあたっていたのか。クロードルの抱いていた問題意識は、日仏二国間関係の構築にとどまらない、広い射程をもつものであった。本発表では、当時の日中関係に対するクロードルの見解を分析することを通して、戦間期における彼の国際秩序観を明らかにする。

宮崎 善信 「1880年におけるフランス極東艦隊フルニエ（Fournier）中佐の朝鮮国情調査について」

◆略歴：上智大学外国語学部英語学科を卒業後、西江（ソガン）大学文学部史学科を経て、高麗大学大学院韓国史学科修士課程修了。専攻は、韓国カトリック教会史、近代日韓カトリック教会関係史。日本仏学史学会の他、朝鮮史研究会、キリシタン文化研究会に所属し活動を行っている。現在、長崎外国語大学非常勤講師（韓国語講読、時事韓国語）。

◆発表内容：清国直隸総督李鴻章は1879年8月、朝鮮王国高官李裕元に書簡を送り、朝鮮が英独仏米などの欧米諸国と国交を樹立して日本やロシアを牽制するよう勧告した。これを受けて駐清フランス公使ブーレ（Bourée）が動き、フランス極東艦隊フルニエ中佐が軍艦Lynxで朝鮮の国情調査を行うことになった。また、同じ時期、駐日フランス臨時代理公使バロワ（Balloy）も朝鮮の対欧米開国問題に大きな関心を寄せていた。本研究では、フルニエ中佐の調査報告書や駐清、駐日フランス公使の公信記録などを通じて、朝鮮開国問題に対するフランスの認識や姿勢について明らかにしたい。

午後の部 シンポジウム パネリスト・発表内容紹介（敬称略）

谷口 義子 「ド・リュシィ・フォサリウ領事－神戸・パリ・1900年」

◆略歴：神戸学院大学非常勤講師、神戸外国人居留地研究会監事、研究課題は神戸外国人居留地における日仏交流および神戸・阪神間の地域史、研究報告「神戸・大阪フランス副領事ド・リュシィ・フォサリウ」「フランス観測隊と金星台」ほか。

◆発表内容：「フランス語を話す日本人、フランス語を話せるようになりたい日本人、フランスに好意を抱く日本人とフランス人をつなぐ」との主旨のもと、1900（明治33）年に神戸日仏協会が誕生した。同じ年、パリ日仏協会も産声を上げている。この両交流団体の設立に関わった人物が、神戸・大阪フランス領事ド・リュシィ・フォサリウ（1859-1908）である。神戸における領事の足跡と日仏交流の一端を紹介する。

梶原 苗美「明治期の食の文明開化と神戸英国領事館の西洋料理本について」

◆略歴：神戸女子大学名誉教授、医学博士、広島大学教育学部卒、大阪市立大学家政学部大学院修士課程修了。専門は、食生活と健康に関する栄養生理学研究、海外栄養疫学調査研究および食文化（神戸洋食のルーツなど）に関する研究等。

◆発表内容：神戸は明治の開港以来外国人居留地、或いはそれ以外の雑居地に住んだ人々、或いは条約締のなかった清国人たちの作った南京町、大正期にはロシア革命を逃れてきたロシア人達など、様々な人々によってもたらされた各国料理をすべて受け入れた形で、食の文明開化を進めてきた。そこで、明治期の洋食がどのような形で紹介されたかを、神戸英国領事館領事代理夫人により明治35年に発行された料理本をもとに考察してみたい。

清水 勲「大阪・神戸居留地とG.ビゴー」

◆略歴：1939年東京生まれ、立教大学卒、ジョルジュ・ビゴー研究家、漫画・風刺画研究家、元帝京平成大学教授、高橋邦太郎賞、文化庁メディア芸術祭功労賞（文部科学大臣賞）などを受賞。著作に『ビゴー日本素描集』（岩波文庫）、『漫画の歴史』（岩波新書）、『江戸戯画事典』、『ビゴーの150年』、『ビゴーを読む』（以上、臨川書店）、『ビゴー「トバエ」全素描集』（岩波書店）など80冊余りある。日本仏学史学会会長。

◆発表内容：明治15（1882）年に来日し、17年間余り滞在したフランス画家
ビゴー（1860-1927）は、生活のため銅版画集、石版漫画集、石版漫画雑誌を
出版、居留地のホテルを中心に販売した。イギリス画家ワーグマン主宰
『Japan Punch』の販売法を見習ったようだ。当初、横浜・築地（東京）が販
売の主体だったが、さらに大阪・神戸に販路拡大のためしばしば同地を訪れ
た。居留地に関し、文章・写真による記録は数多くあるが、絵での記録は希少
なので紹介する。また、銅版画集『Croquis Japonais』はロングセラーだった
ようだ。

（以上）

役員等氏名

(役員)
会長
副理事

池田 俊郎
浜猪 紀子
楠家 重敏
高村 昌憲
野澤 丈二
川島 瑞枝

加藤 豊子
白井 智子
中島 裕之
ル・ルー プレンダン
那波 洋子

顧問
評議員

清水 勲
滝澤 忠義
西堀 昭

滑川 明彦
平野 実

(事務局)
事務局
会長
会計
メール配信
『事務局ニュース』
ウェブサイト

野澤 丈二
ル・ルー プレンダン
飯島 幸夫
今井 隆太
谷 亮

中津 匡哉

(学術委員会)
委員長
学会誌
月例会

浜田 泉
高村 昌憲
野澤 丈二

(編集委員会)
委員長
委員

高村 昌憲
池村 俊郎
浜田 泉

清水 勲

(2019年4月1日現在)

ISSN 0386-6637
Furansugaku Kenkyu

『仏蘭西学研究』 第45号(1972年創刊)

2019年(令和元年)6月22日発行

頒価 1,500円

発行人 日 本 仏 学 史 学 会 池 村 俊 郎
事務局 駿河台出版社内

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-7
電話 042-678-3983(事務局直通・野澤)

印刷所 スピックバンスター株式会社
〒112-0014 東京都文京区関口1-47-12
電話 03-5225-4142

ETUDES FRANÇAISES

22. 6. '19

N° 45

TABLE DES MATIÈRES

ARTICLES

Le séjour de l'*Alcmène* dans le royaume des Ryûkyû vu à
travers les archives de la Marine Nationale française
..... Atsuko MIYAZATO.....3

Premières recherches sur *Kōsei-nikki*, redigé par Sei-engyofu et
Aizanshoja
..... Hitoshi SEKINE.....13

Tokugawa Akitaqué et la Tabottokai : Un autre réseau de
personnes ayant soutenu les échanges franco-japonais
(Première partie)
..... Akihiro KODERA.....36

NOTES DE RECHERCHES

Généalogie des poètes-professeurs : de manière un peu
personnelle Tetsuya KIMURA.....56

ENTRETIENS

Réévaluation de Léon de Rosny, précurseur dans plusieurs
disciplines des sciences humaines : Un entretien avec Bénédicte
FABRE-MULLER et Philippe ROTHSTEIN
..... Chris BELOUAD.....67

ACTIVITÉS DE LA SOCIÉTÉ103